

---

# 乙女のSOS

wolf

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

乙女のSOS

### 【Nコード】

N8535P

### 【作者名】

Wolf

### 【あらすじ】

第一章完結 事故から目覚めれば超美少女。身体を取り戻そうと頑張る犬神有希（ ）のお話。そこはかたなくエロいシーンがあるのは、作者のせいではありません。全て猫耳が悪いのです。第二章がまだまだなので、一旦完結済みとさせていただきます。今後モヨロシク。



せろよ。毎日寝不足なんだから……。

心の中でそう呟きながらも、後頭部の痛みと知らない男の低い声に、俺は目を開けた。どうやら道端で仰向けに倒れているらしく、灰色の曇った空と、知らない男の顔が視界に入った。男は二十代後半辺りだと思う。泥やセメントで汚れた群青色の作業着に、茶の斑模様の短い髪。縁無し of 眼鏡をかけ、目つきは鋭いがあまり恐くは感じない。寧ろやわらかな笑顔が似合いそうだ。イケメンの部類に入るかもしれない（俺基準で）。

目を覚ました俺を見て、男はホッと安堵の表情を浮かべながら眼鏡を押し上げた。

眼鏡

「ふう、良かった。どこか痛いところない？」

どういふ状況か解らなかったけど、そう訊ねられた俺は、首を横に振りながら周囲に目を向けた。強いて言えば、肩を揺すった時に地面をゴリゴリ転がった後頭部が痛い。

某お笑い芸人の頬の表面みたいに凸凹した、車やバイクでは走りにくそうな道路。濃い潮風が肌を撫で、何隻もの（何漁かは判らない）小さな漁船が浮かんでいる青い海。そして、まるで人語を話さない宇宙人が送ってくる解読不能のメッセージすら受信する気満々なほどの巨大なパラボラアンテナが、遠く交差点の向こう側に見えた。

ここは港町だ。ちょっとした賑わいを見せる都心のN市と、住宅街ばかりのU市との境目の海沿いの辺りであり、今いる現在地がどちらの住所に当てはまるのか、俺にはわからなかった。それどころ

か、付近にあるバイト先の住所さえも知り得ない。きっと他のバイト生達も同様であるだろう。バイト先の住所を紙面に書き記す必要性が今まで皆無だったからな。近くにある高校のそばに川が流れていたから恐らくそれが市境なのだとは思うのだが、根本的なところで全く以て興味無しだった。たぶんこれからもそうなのだろう。いやそこは興味持てよ、とセルフツツコミ。……んー、やっぱりツツコミは他人にしてもらった方がいいな。

バイト以外でこんなところに私用なんて俺には無いわけで、この時間にここで倒れていることはつまり、バイトが終わってこれから気合いを入れて帰ろうとハンドルを握った筈であって、昨日はバイト休みだったから今日は確実に水曜日で……水曜日だったわけ？ てゆーか昨日ホントに休みだった？ くそう、マジで海馬が逝ってしまったるかもしれん。高校時代と比べての記憶力と集中力の下げ幅の凄まじさ、これは今飲んでる薬の副作用だろうか。それとも頭打って記憶が飛んだか？

でも、なんで倒れてたんだろ？ こんなゴツゴツした明らかに寝心地悪いところで、睡魔に身を委せられるほど疲れてはいない……いやすまん、訂正する。そういえばさっき、皿磨きしてる途中で立ったまま居眠りしそうになったばかりだった。果てしなく眠かったぜ。昨日は太陽が昇ってからようやく目を瞑ったんだ。時間で言うと、だいたい三十一時（午前七時）頃だったと記憶している。普段は十時に出勤するため、遅くても八時半にはウチの二階と三階の間の階段に座っている真っ赤なクマさんにおはようを言わなければならぬ訳だが、仕事があるというのにこういう危険な夜更かし癖は治らない。別に治そうとも思っていない。俺的に三大欲求の中で睡眠欲はそれほど大事じゃないからな。

眼鏡

「そっか。大事じゃなくて良かった。立てる？」

これは……たぶん俺のモノローグに対しての言葉ではないだろう。『団長』と記された自作腕章を装備し、何かにつけて周囲にハリケーン並みの傍迷惑な被害を押し付ける女子高生の側で最初から最後まで親から貰った名前と呼ばれた事がないある小説の主人公とは無関係であって、返事は必ずカギカッコの中の台詞に由来する。まさかこの（小説の）世界に読心術を使うことが出来、その能力で他人の心の独白を覗こうとする輩はいない筈だから、その辺は安心してくれていいと思う。もしそんなやつがいたら……後で考えよ。そもそも絶対にいないとは言い切れない訳だけどな。ただ、考えたくないじゃないか、誰かに心を読まれてるかもしれないなんて。そんなやつは変態だ。そうに決まってる。

有希おれはズボンのベルト部分をなんとなく押さえながら自力で立ち上がり、バンパーが物凄く凹んだ軽トラックと、倒れた黄色いバイク「Let's」を見た。

……ベルトの感触がいつもと違った気がしたが、たぶん気のせいだろ。

軽トラは路肩に停まり、俺が乗っていたバイクは何故か中央分離帯を越えた反対側の歩道の植え込みに突っ込んでいる。バイクのフロント部分の黄色いカバーは事故の衝撃で外れ（元々壊れてた）、俺ともバイクとも離れた位置で、赤ちゃんを乗せていない揺りがごの如く寂しそうにその体を揺らしていた。ヘルメットはベルトの切れ端だけがブチ切れて、目の前に落ちていた。

……つまり、これは事故つたとみていいのか？ 十八時十五分にバイト先を出たことはうつすらと記憶にあるような気がしてきたが、そこから先の記憶は空白でなにも思い出せない。同時になにか得体の知れない物足りなさを覚えた。そして、お腹の辺りをギュツと抱き締められるような感覚。

……???

そういえば関係無いけど気絶してる間、なんか変な夢を見た気がする。ぜーんぜん思い出せないけど。

眼鏡

「一応今から救急車呼ぶから、病院で精密検査受けてみてね」

有希

「……？」

この言葉を聴いて、俺の頭に一つの式が成立した。

救急車を呼ぶ⇨警察介入⇨メンドーな事情聴取。

……ダメ。絶対。そんなメンドーな事やってられないし、俺は早く帰りたいんだ。もうすぐ日が暮れる。今から病院行ったら、無意味な『様子見』のせいで退院は明後日辺りになってしまうだろう。ヤブ医者め、様子見ってなんなんだよ。それに、怪我や痛みは全くといっていいほど無い。っていうか、家帰って早く小説読みたいんだよ。まだ途中までしか読んでなかったし。長門の緊急脱出プログ

ラムを起動させた後、キョンはいったいどうなるんだ？ うわーめ  
っちゃ気になる。よし、ここらでバシッと行ってやるか。

有希

「あ、あの……」

……言う割には弱々しい声。しょうがないさ、俺って人見知りするからな。メールの文面とか、ダンスをやるときはテンションがバリ高くなる。それを普段から出せればねえ……って、大学の先生にはよく言われた。

男は携帯を取り出しながら俺の顔を見た。

眼鏡

「ん？ どうかした？」

……うん。俺はどうかしたようだ。なんだかおかしいぞ？ 声と耳の、どちらかが。それとも、頭がおかしいのかな？ それが一番あり得るから困る。

自分で不思議に思いながらも、俺はきっぱりと言った。

有希

「あ、救急車、要らないです」

アニメの少女キャラのような幼い高い声が、俺の台詞と重なった。イヤ、重なってはいなかった。その幼い声はどうやら俺の口から発せられたらしい。バス及びバリトン時々カウンターテナーの低音ボイスな俺だが、通常この時間帯はどうやっても裏声すら出ないのだ。朝の寝起き時はバリバリ出せる上に四オクターブぐらいになる。で

も起きて二、三時間したら徐々に声帯の筋肉がどうにかなってしまい、声が低くなっていくという仕組みらしい。そのため、今の時間帯の俺には絶対にあり得ない声域なわけ。到底無視出来ない大事件だが、ここは敢えて放っておこう。とにかく帰りたい。

有希

「すみません、ちょっと急いでるんで……」

もちろん急いでなんかないがな。

トテトテと倒れたバイクに駆け寄る。を、おかしいな。なんとなくだけど、身体が思うように動かない気がする。でも今はどうでもいい。とりあえず倒れたバイクのハンドルを握り、気合いを入れながらも軽くひょいっと起こそうとした。

有希

「えいっ！」

……………。

あれっ、このバイクこんなに重かったっけ？ 原付のくせに。てか今の掛け声は一体どういう事だ？ 俺は口を開かなかった筈だし、俺はそういうキャラじゃねえぞ。

俺の口から発せられた謎の掛け声と不自然な身体の調子に首を傾げながら、やっとの思いでバイクを押し上げ、歩道でスタンドを立てて一息つく。それからエンジンをかけようとした。セルは一昨年のある夏の雨の日に盛大に滑って転んで壊れてしまい、全く反応しなくなってしまった。なので、キックペダルに足を乗せて全体重を掛けて思いっきりキックした。しかし、何度やってもかかる気配

がない。それどころか事故の衝撃でバッテリーまでダメになったらしい。照明が消えてしまっていた。

眼鏡

「壊れてしまったみたいだね。急ぎの用なら送っていいところか？」

いつの間にか後ろにいるし！？　そして爽やかな微笑と夕陽に反射する眼鏡が眩しい。この人、工事現場的な格好してるのに、どうしてこんな素敵な笑顔が作れるんだろう？　毎朝お友達のミラーさん（鏡）に挨拶しているのか？

んー、どーしよっかな？　でも、バイクが無いと明日出勤出来なくなるじゃん。俺は歩きもバスも絶対に御免だ。この人、その辺どうにかしてくれるのかな？　加害者なんだからそのくらいは……。

うーんうーん、と迷っている有希の姿を見て、男は「ああ、」と声を上げて付け加えるように言った。

眼鏡

「脚なら弁償するし、それまでは俺のバイク貸してあげるよ」

キラーン。

………今のは俺の目が輝いた音。

有希

「ほんとですか!？」

「またもや愛らしい幼い声が聴こえた。現金な響きを伴っている。

む。俺、半端なく声高え。マジでどういうことだ？ 頭打ったか

……？

眼鏡

「もし少しでも時間があるなら、今から取りに来る？ 燃料代も全部こつちが出すよ」

……悪くねえどころじゃねえ。寧ろ疑ってしまいそうだ。いやい  
かんぞ有希！ 人間信じる心を無くしたら終わりだ。でも、ああー  
でもでも……どーすんのよ俺。オーデイエンス使ってもいいかな？  
ってゆーかこいつも俺の声に疑問を抱いていないらしい。やはり  
おかしいぞ……？

有希

「あ、じゃあ、お願いします」

まあいいや。ライフラインは三つとも取っておく事にする。とり  
あえずバイク借りて、身体の異変とその他のことはそれから家でゆ  
っくり考えよ。

ああ……なんてこつた……。

車で移動中、車内で俺は気付いてしまった。偶然すれ違ったパト  
カーを見て慌ててシートベルトを締めた時、なんと！ 俺の胸にベ  
ルトを挟む形で双丘が出現したのだ！ 否、していた事に気付いた  
のだ！ しかも、でかい。「爆」が付くレベルだ。大きさ的にはア

しだ、ちっちゃいメロンパンとか長野県産のでっかい梨とか、そんなぐらいかな。さっきから妙に肩が張るのは、そしてなんだかゆらゆらしてバランスが悪かったのは、更には下を向いても遮られて足が見えなかったのは全てコイツのせいだったのか。

何故今まで気づかなかったのかと心底驚きながら、同時に危惧すべき場所がもう一ヶ所あることに気付いた。

げっ……いやまさか、その、……無いの？

俺は恐る恐る、隣で運転する男にバレないようにさりげなく自分の急所へ手を当てた。

ムスコは、家出してしまっていた。

嘗て無い絶望に滝の如き冷や汗。薄いシャツは完全に汗で濡れてしまっている。これは……ヤバいだろ。夢だろこれ。フィクションの世界じゃねえか。マジで？ いやーヤバいでしょこれ。もっかい言うけどヤバいでしょこれ。

俺は押し黙ったまま、とにかく目的地に着くのをひたすら待とうとして、ふと思った。

今の俺は、女？ なのか？ 可愛いかな？ ん？ だとしたらコ

イツ、そんな女の子を自分の家に？ えっ？ てゆーかシャツの前破れてるし！ しかも破れた場所が、きわどすぎ……！ あ、まさかコイツ爽やかな笑顔で油断させといて、これから犯罪者になる予定とか？ 婦女暴行？ ……えっ？ ええっ！？ ……

……なんてことはなかった。普通にバイクと鍵を差し出され、連絡先を訊かれ、壊れたバイクは此方で処理すると言われ、何故かスポーツドリンクまで買ってもらった。見たこと無いラベルのやつ。おいしかったよ？ そして手を振られながら見事に送り出された。うん、まあ、何事も無くて良かったけど……。

借りたのは中型の単車GPZだった。ピッカピカだ。カウルが全部外されていて、見た目は新車のようにピッカピカだ（被った）。ただ、一つ二つ部品のメーカーが違う。走れるかどうかがまず不安だ。こんなの借りて大丈夫かな？

俺は中免は持ってなかったけど、別に乗れないこともないのでそのまま運転した。全く問題なく走り出すGPZ。ほっほう！ 速い速いっ！ やっぱバイクはこうでなきゃ！ 俺のあの黄色いバイク、めっちゃめっちゃ古いからパワーが弱いんだよね。常に三十キロメートル毎時だ。それ以上出すとガソリンがエンジンの回転に合わず、空回りして逆に速度が落ちてしまう。上り坂なんかもつと大変で、時には押して歩くほどだった。

こういう単車ってやつはあまり好きではないけど、今まで時速三

十キロメートルが常だったからな。スピードが出せるといふその一点だけで爽快MAX！ただ、信号待ちで停まる時なんか足が全く届かない。そのせいで何度も倒れそうになった。どーなってるんだこりゃあ。俺、こんなに足が短かったのかな？それとも女になって背が低くなったのか？

……これをあいつらに話したら、なんて言うかな？同性になったことを喜ぶか、異性でなくなったことを悲しむか。そしてその逆も……。結局同じ事なのに、やっぱりそれぞれ違う反応するんだろな……。

## 02 寢床

有希

「着いた〜あ……むっ？」

家に着いた時にはもう十九時半。外は既に暗くなっていた。が、車庫には車が一台も無い。真っ白いフュージョンカスタムが一台あるだけだ。うちには車が三台とビッグスクーター・原付が一台ずつある。父と母が車を一台ずつ、長兄が車とビッグスクーター両方を所有している。原付は俺。つまり車庫にビッグスクーターのみということは長兄は車で仕事に出ており、まだ誰も帰ってきていないということになる。……雨も降ってないのに、バイクじゃなくて車で出るってのは珍しいな。バイクと言えばこのGPZ、中型と思っていたが、よく見るとGPZ1100Fだった……。やばくね？ これ。どうりで足が届かないわけだ。

今俺は両親と七歳年上の長兄とで四人暮らしだ。次兄と三兄は就職のため、それぞれ東京と神奈川に行ってしまった。二人とも美容師だ。次兄は去年の秋頃に結婚した。今年の九月の末頃に披露宴を予定している。三兄も今カノと結婚したがっているが、コイツは次兄と比べて精神的に自律出来ていないため、母がなかなか首を縦に振らない。それは俺の目から見ても、一目瞭然だった。まあアイツはアホだから無理もない。

長兄の職業は板金（だと思っ）、普段あまり話さないの彼女がいるかどうかすらもわからん。俺は中学以来ずっといない。

もう十九時半になるというのに、母も兄もまだ帰らないのか。母は今日は仕事が休みだった。兄も普段ならこの時間には居るはずな

のに……。因みに父は十九時〜二十時頃に帰るが、最近は何故か不規則であり、帰る時間が予測出来ない。何をしてるのやら。

携帯電話を取り出してディスプレイを見……。アレ？ この携帯、俺のじゃない。俺の携帯は最新機種でスライド型の黒色だった。今手の中にあるのは同型のピンク。ディスプレイには俺がとつくに剥がしてしまった透明フィルムが、未だぴったり綺麗に貼られたままだ。……。どういう事だろう？ この携帯は、その日の気分によって体の色を変えたりするのか？ それとも、俺の身体と一緒に性別が変わってしまったからこの色なのか？

プロフィールを表示する。一応同型なので操作方法はわかっており、オートロックも掛かっていなかったためすぐに表示出来た。だがそこに俺の名前は無く、代わりに「ふたがみさき二神幸」という知らない名前とともに、知らない番号とアドレスと誕生日と星座と血液型が登録されていた。

……。つまり、アレか？ 見知らぬ誰かと突然身体が入れ替わったとか、そういう安っぽい携帯小説の性転換カテゴリか？ ん？

……おいお前、説明してくれ。

理解に苦しむこの状況を。

一体、何がどうなったからこんなことが起こるんだ？

俺は俺であって、他の誰でもない筈なんだ。

ちょっと前まで俺は平均3時間睡眠の携帯小説大好き少年、いや、青年だったんだぞ？

最近、海老嫌いを完全に克服したばかりなんだぞ？

なのに、

どうして……？

鍵持っていないから家にも入れないじゃないかー！！

何故鍵を持ってないのかと言うと、身体が入れ替わってるから荷物とかも総て入れ替わってしまったというなんとも歯軋りしたくなる状況だからだ。どうやらバイクは偶然同じタイプだっただけらしい。

しかもこの身体の持ち主、ふたがみさき二神幸は高校生のようだ。この家から歩いて十五分の場所にある工業高校の長袖カッターシャツと、男子と同じ制服のズボンを穿いていた。女の子なの？ というのはまあ、アレだ。俺が高校を卒業した次年度からの女子高生は、スカートとズボンを選ぶようになったらしいという話を友達（ ）から聴かされたし、実際に男子のズボンを穿いて歩いている女子高生を何度か見かけることがあった。どうやら昨今の女子高生のスカートの異常な短さが原因のようだ。挑発的で犯罪を誘発する可能性や、冬の寒い日も丈を短くしたまま毛布やジャージの上着を膝に掛けて授業を受ける姿が見苦しいという声は俺が在学の時からあった。階

段を上る男子は皆一様に下を向いて歩く。上を向けば目に入るから。これはかなり迷惑だった。下を向いてるせいか、たまに階を間違えて最上階まで上ってしまうこともあったからな。俺や友人達は表向きはミニスカートに否定的だったため（本音は不明瞭）、そこらの問題が解決されて良かったと思うのだが、スカート丈を伸ばさせるのは結局無理だったよ

うだな。何やってんだよ、教育委員会。

特にやることもないので、俺は車庫側のドアの前に座って携帯でwebを開いた。『小家になるう』というサイトで携帯小説を書いているのだ。……間違えた、書かせているのだ。メル友に。タイトルは『魔女の子ども』。主人公は幼い頃両親を殺された少年。彼は朝起きたら女の子になっていた。だがそんなことには構わず、魔王を倒すため、あとついでに男に戻るために旅に出るのだ。……今なら、主人公のリアルな心理描写が書けそうだな。まったく洒落にならない。

『魔女の子ども』のこれまでのあらすじを確認した俺は、すぐさまこの後の展開を脳内で微調整しながらメル友にメールで内容を送信し、待受画面に戻そうとして、ふと思いついた。携帯が替わっているのだから、アドレスも総入れ替えだ。このままでは誰とも連絡が取れない。一部の人を除いては（何人かは番号を覚えてる）。

こんな時のために俺は自分の携帯サイトに、鍵付きでアドレスを全て保存してある。一応番号とアドレスを記録した手帳を自分の机に置いてあるのだが、それも二年前に記帳したために大多数はアドレスを変更しており、面倒なので更新もせずにはあったらあした。携帯を無くしたらどうしようと思ってサイトに保存した訳だが、この時ばかりは本気で過去の自分に感謝した俺だった。

ついでに昔作ったサブアドレスをこのピンクの携帯のアドレスで登録し直し、これから連絡を取り合う香りがしそうな人達に送るメールを作る。学生時代の友人数名とバイト先のマネージャーに。

親指を超光速で動かしていると、突然携帯がブルブルし始めた。

誰かからメールが来たようだ。送信者名を確認する。『y u - k i  
- 』と表示されていた。

メール0001

5 / 6 19 : 36

From : y u - k i -

To : \* \* \* \* @ \* \* \* \* . j p

Sub : やっほい

<メールありがとー。有希はいつもスゴいなあ！ 『魔女の子ども  
もっともっと面白く書いてやるぜ！

>てか、これ聞くの忘れてた。久々の保育園は楽しかった？

<土曜日は確かクラス会だったよね。飲み過ぎてへマするなよ

>あとさ、今度そっち行くぜい 日にちは教えないけど。じゃな  
！ あたしはもう寝るよ。終夜と交代する。

女らしさの欠片も見受けられない文章が四つ。y u - k i -とは  
大学入りたての頃にネット上のある掲示板で知り合い、メル友にな

った。「小説書きたいけどアイデアが浮かばない！」とか言うので、俺が『魔女の子ども』のプロットを作ってメールで送ったのが始まりだった。名前が同じなのは偶然だ。が、住んでるとこの距離が遠すぎて、今まで一度も会ったことがない。y u - k i - は俺に会いたいと言ってくれる。他のやつらも同様に。俺も会いたい。しかし……今の俺の姿は、受け入れられるのだろうか。男だった頃の写メはもう送っちゃったし。いや、あいつらだからこそ、逆に簡単に受け入れられるかもしれないな。外見の違いなんて、あいつらはもう慣れっこだろうしな。

因みにサブアドレスを使ってメールのやり取りをしているのは y u - k i - 達だけだ。

送信メール作成

5 / 6 19 : 41

To : y u - k i -

Sub : Re

昨日は楽しかったよ。子ども達もすぐになついてくれたし。中には俺の事覚えてる子もいたし。

俺は別にそんな飲まないよ？ 大学入った頃からどんどん酒に弱くなってきているからね。今じゃビールぐらいしか飲めない。

遂にこつち来るんだ？ 初顔合わせだな。楽しみだよ。……ちよつとしたハプニング付きだけど。

おやすみ、y u - k i -。

追伸〓終夜

ルビは振らなくていいからね。ややこしくなるよ。

……仕方ない。めんどくさいが、このメールの内容を解説してやるんじゃないか。感謝しろ。崇め奉って、誕生日が来たら猫を三匹俺にくれ。マレーシアンジョーク、ナウ！マジ笑える。

昨日は俺が学生時代に保育実習で訪問した『ひま　り保育園』に遊びに行ってきたのだ。去年の二月～三月と、八月の計二回。認可園であり、中々な規模で父兄からの評判も良い。色んな特別事業を行っており、特に五歳児クラスの音楽なんかは凄かった。本当に五歳かと疑うほどの演奏や演技を見せてくれる。

この辺は語り出せば読者の皆さんが退屈してしまうかもしれないので割愛。

俺はサブアドレスを使って y u - k i - にメールを送り、友達やマネージャーにメールを送ることも忘れたまま携帯をポケットに入れた。そうだ……土曜日はクラス会なのだ。大学を卒業してからも何カ月かに一回は集まるうという事になっていて、明明後日がその日に決まった。俺は土曜日にも日曜日にもしてほしくなかった。土日は労働基準を軽く無視して、半日以上働いたりする。すると俺の今の時給なら、一日で一万円を超えることだつてあるのだ。これを逃すのは惜しいよな。ちくしょう。それで、場所は卒業パーティーの時とおなじライブハウスか……。どうすんだよ俺。こんな格好で

……顔で、行ってもいいのかな？ 『事故つて目が覚めたら女の子になっていた』なんて話、三十五人中何人が信じるだろう？

もつと根本的な問題に気づいてしまった。この身体は、俺の身体と入れ替わっている（たぶん）。ってことはこの身体の主『さき』という女子高生が、俺のクラスメイト達に誘われたりなんかして（勿論無理矢理）、俺の身体でクラス会の会場であるそのライブハウスにやってくる可能性がある。それは中々にマズイ事態だと、俺の頭の中に巣食っている小さいオッサン達が口走りながら意味不明な行動を繰り返している。具体的にどうマズイのか、そのオッサン達の中の一人に問い質した。

オッサンが言うには、中身は違っても外見は変わらない『有希の身体』が存在している。てことは女子高生の姿の俺が何を言おうとも、俺が本物の有希だと信じる者はいないと。

イコール家にも入れないってことじゃないか！

マズイぞこれ。俺これからどうやって生きていきゃいいんだ？

『さき』の家族又は知り合いに見つかって連れ戻され、そこで女子高生として生きるのは絶対にイヤだ。かといってホームレス女子高生なんてのもお断りだねっ！ お水も断固拒否してやる！

ならば、今現在の最優先事項はなんだ？

決まってる。『さき』に会わなければ。それも、二人つきりで。

他の人間が一緒だと面倒だ。入れ替わっている事がわかれば、向こ

うも俺を探す筈。問題は、それまでの間どうするか。『さき』として生きるつもりはない。俺は俺として、そしていつかは自分の身体を取り戻す。絶対に。

ま、それまでは滅多に体験出来るものではない『女子高生』というものを楽しもうじゃないか。オッサン達、あんたらもそう思うだろう？ ただし、『さき』の学校には絶対行かないがな。

さて、これから今夜の寝床を確保しなければならぬ訳だが、これはそう難しい問題でもないかもしれない。短大時代のクラスメイトにな、実家暮らしだが誰でも泊めてくれる『奴』がいるんだよ。

ただ一つ注意しなければならぬのは、『奴』は だということだ。そして『人畜無害』という言葉が似合う輩ではない。見知らぬ女の子がやってきていきなり泊めてくれなんて言ったら、その場で襲われかねない。元の身体なら、腕力にものを言わせて『奴』を伏せさせる事なんぞ造作もない。下っ腹以外はガリガリだからな。しかしこの小さく非力な身体では、その抵抗は親を失くした雛鳥のようなもの。か弱い上に助けも無い。思う存分蹂躪されるだろうねー。さすがにそれはこの身体の主『さき』に悪いし、何より俺が立ち直れなくなる。生きていけなくなっちゃう。是が非でも避けなければな。もしそんな事態になったらもう身体の持ち主とか関係無え。意地でも自殺してやっからな。

### 03 奴の家

G市は俺も説明しづらいが、結構な面積がある。全体の何分の一かは米軍の基地がどーんつと居座っており、それを差し引いてすらこの俺が時々迷子になったりするほどだ。因みに俺は都心のN市と接するU市の南端に住んでおり、G市はU市の北東に位置する。

G市の市役所の隣に、『奴』の家はあった。G市役所はジュースの空き缶を……幾つだったかな？ 忘れた。たぶん五百くらいだったと思う。集めて持つてくと、図書券と交換出来るのだ。ただしG市の市民限定。今もやってるかどうかは知らないが、U市の市民である俺は小学生時分はG市の市民である従兄弟の住所を借りて空き缶を持つていき、図書券を買いまくっていた。……実際に空き缶を集めたのは母で、俺はその図書券の所有権の行方に期待の眼差しを向けるだけだったのだが。

『奴』の家の前に辿り着いた。バイクを目の前の公園の隅に停め、スカートを手で直す。実はさきのバッグの中には筆記用具やノート、その他の（男の俺には理解不能な）女の子用品等と一緒に、制服のシャツとスカートが綺麗に折り畳まれて入っていた。スカートは膝上数センチの長さだったが、わざとくるくる折り曲げて短く調節する。膝上十センチ。俺の高三の時の生徒会長がだいたいこれくらいの長さだったな（学内一の短さだった）。

さて、ここでツッコミをいれたい人も中には沢山いるかもしれない。呆れて何も言えない人もいるかもしれない。うん、わかる。わかるよその気持ち。だが、言わせてもらおう。

俺は、女子高生ルックは初めてではない！！

はい、事実です。ミニスカートで、カツラをかぶって人前に出たことあるよ。それも去年の話。いやーあれは楽しかったね。お子さんがちよつと引き気味だったのは微妙に辛い思い出だが。何故スカートに履き替えたのか？ という質問も無しの方角でよろしく。っというか気になるじゃん。『奴』がどんな反応するか。

というわけで、午後九時頃、『奴』の家。ここに来る前にメールしてみたら、『奴』は平日の夜に珍しく家にいたのだ。学校は二時半に終わり、会社も休みだったよう。好都合だね。

『というわけで』というわけで、躊躇いというものを自慢の強肩で遠くへ投げ飛ばしてインターホンを押す。うーん、誰が出てくるかな？ 妹さんかな？ それとも、あの若い（ちよつと変わった）お母さんかなあ？

ガラガラガラッ

「……………」

有希

「……………」

…………… 恐いお父さんでした……………。

奴のお父さん

「あつしー、客が来てるぞ」

恐々としながらお父さんに用件を伝えた。『あつしさんが落として物をしたので渡したい』という二秒で考えた嘘丸出しな事を言い、冷や汗をかきながら俯いて純が来るのを待つ。普通に考えて、二十九の独り身に女子高生の知り合いがいる筈はない。

このお父さん、特に恐いところがあるわけではない。ただ俺が雰囲気的に恐そうだと決めつけてしまっているだけで、今まで喋った事も無いのだ。心情的には人を外見で決めつけるのは良くないと思っただけなのに、そのイメージを崩す事がなかなか出来ないでいた。

お父さんはなんにも考えてなさそうな顔で、こちらを振り返らずに奥に引っ込んで行き、俺は一人ぼつんと玄関に取り残された。鮭をかじっている木彫りの熊と目が合い、微かに身体が震えた。なんとなく嫌な雰囲気を感じて、俺は外に出て待つ事にした。

公園の木々は風にさわさわと揺れ、その優しい音を聴いて俺は心を落ち着かせる。ふぁんたじくな世界をひたすら夢見て生きてきた俺だったが、まさか本当に非日常な日常というものをこの身に受け入れることになるうとは全く思いもよらなかつた。しかも、性転換だぜ？ 性転換。……いや、ただの入れ替わりか？ まあどっちでもいいや。女になったことに変わりはない。

しかし、簡単ではないのだろうな。二十一年間フツーに男として生きてたんだから、まあその、いろいろな？ そんな感じの……つまり女の子的な知識なんてものは俺の壊滅寸前の海馬には存在しないわけで、知らない現象には対処のしようがないわけで、その方面に詳しいヘルパーが絶対不可欠となる。……男に訊くわけにもいかないな。いや、純ならあるいは知ってそうだが、うん、やはり訊けないな。てゅーか危ないよな。絶対色んなとこ触られる。やっぱ女の子に訊くしか……

「……………あれ？」

これは純の声。やっと玄関口に現れたようだ。俺はここで有料スマイルを使って振り向こうかと思っただがやめた。さつきバイクの小さなサイドミラーで自分の今の顔を確認してみたのだ。……なにかしらのミス・グランプリを獲得することに然程の努力も必要無さそうなくらいの美少女だったよ。ただの笑顔だけでも、メロンパンちゃんの必殺パンチの数万倍の威力を発揮することだろう。……俺には効かないけどな。しかし純は友達だ。惚れられても困るんだ。

無表情の俺がゆっくりと振り返る。

純は少し驚いた表情で俺を見つめ、女子高生の制服を身に付けた俺の華奢な身体を視線で嘗め回し、それからはっとした様子で慌てて辺りをキョロキョロと見回した。

純

「……………あれ？」

事前にメールをしていたことから『有希』が来たのだろうと思っていた筈。しかし目の前にいたのはAAAランクの最強に可愛いちっちゃい女子高生。そして見覚えが無ければ心当たりも皆無。普段から冷静な俺ですら戸惑ってしまいそうなこのシチュエーション。拳動が乱れるのも当然であり、しかしこの純が焦る姿を見るといっなのはかなり久しぶりだった。

有希

「三ヶ月前の卒パで“一緒にバンドしよう”って言った約束、全然守られそうにないな。スマン」

まあ他の人には意味不明な台詞だろうが、これはこれで俺なりに考えてのものだ。一々説明するのが面倒なのが理由の大半だが。

純

「……………えっ……………え？　は？　……………有希？」

というわけだ。俺と純の間だけで通じる言葉を探していたら、これに思い至ったのだ。案の定、純は俺絡みだと気付いたようであり、さっきまでの視ただけで妊娠させそうなほどのエロ視線を引っ込め、多少の真面目っぽい表情を前線にもって来た。コイツに信じて貰えなかったら、俺はこれから先を生きていける自信が無い。

有希

「まあ立ち話もなんだから、中でビールでも飲みながらゆっくりと……ネ」

なんとなく危険な響きを伴っている事には気付かない俺。

純

「あ、うん……いや、ここおれん家だからね？」

……つまんねーツツコミ。てかコイツも気付いてない。

有希

「いいよそんなの。ハイハイ早く上の鍵開けてきてっ」

と言いながら俺は外階段を使って純の部屋の前へ向かう。純は友人などを部屋に上げる時、大抵は玄関からは通さない。外階段で二階ベランダに上がらせ、そこにある勝手口から直接部屋に入れるのだ。外階段を上っていくということは純の部屋を訪ねた経験が有るという証明であり、先に発した俺の発言から『有希』というキーワードは頭から離れない。超短いスカートを後ろ手で押さえながら階段を上る俺を呆然と見送ってから、純は中に入って玄関を閉めた。

とても煩雑な部屋だった。

相変わらず汚いというか、なんというか……掃除しろよな。この狭さなんだからすぐ片付くだろうに。言葉にするなら、ありふれた言い回しだが『足の踏み場も無い』というのが相応しかろう。これ以上汚くなったら、上履きが必要になるかもな。学生時代に泊まり

に来たときは特になんとも思わなかった筈だが、今になって目につくのは身体が女の子になったからだろうか？ この身体の持ち主『さき』は、綺麗好きだったのかね？

とりあえず床に散乱している教科書やら段ボールやらを適当に蹴散らしながら、俺は我が物顔で突き進む。……おいおい、お気に入りギターまで床に寝かしてあるじゃないか。しかも二本とも。ギターアンプなんか、プリントの山に半分埋もれかけてるぞ。

有希

「もっつ、相変わらず汚いな！ 先ずは掃除するぞ掃除！」

ポカンとする純を蹴って無理矢理働かせ、一先ず床に落ちてた物は一時的に整頓出来た。クローゼットやベッドの下は今回は触れない事にする。純もそういつた『隠すのに適した場所』には心の準備がてやつが必要かもしれないし。俺だつて見たくないよそんなもん。

掃除している間の俺は全く気付いてなかったが、この時純は『執拗』と言い表しても過言ではないほどにあるポジションをキープしていた。それは四つん這いの姿勢で片付けている俺の背後。……ん？ これは激ミニスカートでそんな姿勢のまま片付けていた俺のせいなのか？

純

「で、あの……有希、は？」

自分の部屋なのに借りてきた猫状態の純が、耳に届くか否かの声で訊ねてきた。

……あれ？ まだ俺が『有希』だという考えには至っていないかったようだ。当たり前か？ 確かに今のこの容姿に俺を思わせる要素なんて、ほとんどどこか欠片も無いからな。でも外見は違えども性格は変わらない。そうともさ、俺って周囲と違って結構異質なオーラを放っているらしい。それがカリスマオーラなのか、それとも変人オーラなのかは難しいところだが。自分では然程の自覚はない思い過ごしだと思いたいが、実は小さい頃からそういうことを周りから言われていたような気もする。生まれ持った存在感は、二十一年の月日が経つても風化せずに生き残ってきたらしい。ならばテキストに喋っている内に純も俺の空気を感じ取るだろう。俺は俺で、少しずつ情報を与える事にする。

有希

「四大は楽しい？」

ベッドにポスンと座り、入口付近で立ち尽くしている純を見上げて微笑を向ける。

コイツは俺らのクラスで唯一、短期大学から四年大学に編入した。三月まで通っていた白百合短大のカリキュラムを微妙に勘違いしていたらしく、彼の二年間の短大生活はほぼ無意味に終わってしまった。白百合短大は保育士・幼稚園教諭・児童館構成員になるための学校で、純は心理学系の勉強をしたがっていた。それで白百合短大の心理教育コースに入学して得たものは、心理学にも属さない、ある意味生兵法みたいな基礎中の基礎知識のみだった。

純

「……あぁー、あんまり……」

有希

「やっぱり？ 白百合と違ってクラス内での関わりが薄いしね。軽音楽サークルには入らないの？」

純

「……いや、サークルには入らないよ。もうこれ以上他の人とは組む気ないから。グラスホッパーとニットキャップス以外は願い下げだぜ」

『グラスホッパー』は純が地元の友達と三人で組んでいるバンド。俺は彼らの演奏を聴いたことはないが、純がリーダーをやっているらしい。ギター専門かと思つてたらこの眼鏡野郎、何気にベースやドラムも出来やがる。その上ギターボーカルだから歌も……ああ、あの、こーゆーのイライラするよな。なんでそんなに何でも出来るんだよ！ 年の功か？

ニットキャップスは俺達のバンドだ。入学して半年後くらいに結成した。この話は……またいつか、な？

有希

「ふーん、じゃあ藍華が帰ってくるまでニットキャップスは無しだな。で？ これは？」

小指を立ててこれ見よがしに見せつける。まあ解るだろうけど、彼女は出来たか？と訊いている。俺の記憶が正しければ、もう丸二年間はいないはずだ。短大に入る直前に別れたらしいからな。純は見た目は全然悪くない。寧ろかなりいいんじゃないか？ 結構簡単に女持ち帰ったりするらしいし。あ、藍華つてのはツインヴォーカルの片方（ ）ね。もう片方は俺。

純

「あー、それなんだが実は……ゴニョゴニョ」

有希

「!?!」

なっ…………卒業前から、彼女がいただと…………!?!

有希

「…………聞いてないんだけど」

純

「…………いや、別に言うほどでもないかなと」

有希

「言えよ！ 何黙ってたんだよそんな大事なこと！ なんだそれ！？  
圭介達知ってたのか!?!」

圭介は俺らのクラスメート。髪を染めていて言動も軽く、入学当初から遊び人の烙印を捺されかけていたのだが、実際に彼女が出来るみると驚くほどに一途な奴だった。彼女の為に煙草も辞めたと言うのだから、相当強い“想い”を持っているようだ。ただ、男だけで飲み会をした時の下ネタとテンションは本当にウザイ。しかし純もエロが大好きなので、この二人はよく下話をするようである。

有希

「てか実はどーでもいいけどね。そんなもつすぐ三十路になるオッサンの色恋とか下らんものはその辺に置いてさ。もういいでしょ？ 今お前の目の前に座ってるのはヴォーカルでダンサーで、お前から借りたお金をまだ返してないあの有希だけどなんか文句ある?」

これで納得しなかったらベランダから蹴り落とした後に、妹さんと柚美ちゃん（純の元カノ）にアレの隠し場所全部チクってやるからな。お金は、まあ…………いつか返すよ。

ちよつとの間呆然と俺の顔を見つめ、目蓋をパチパチさせた純は。

純

「…………マジか？」

有希

「マジ。てかお前もつと早く、そして自分から気付けよ。あの頃のぴったり呼吸はどこに行ったんだ」

アイコンタクトで会話することもあるほどにお互いの呼吸を理解していた短大時代だったが、容姿が変わればやっぱこんなもんなんだな。それとも、あれは全て俺の勘違いだったのだろうか？

純

「いやいや、気付くわけ無いだろ！ どういうことかこれ！？ ほんとに有希か！？ 何があったらこんな有る意味おいしい事態が訪れるんだ？」

とりあえず一発蹴っておこう。

目の前に座る超美麗な女子高生が『有希』であることを理解した純（二十九歳独身）は、途端にそれまでの緊張感から脱け出して俺の隣に座った。ベッドの脇のサイドテーブルに置いてあった縁が紺色の眼鏡を掛け、改めて俺の頭のとっぺんから足の爪先までいやらしい目を見た。…………いや、なんかマジで背中がゾクゾクする。俺だと解つたら素直に手加減無しだな。

有希

「…………少しは遠慮しろよ」

純  
「なんで？ お前男なんだから別に気にするところじゃ無いだろ。それより早く経緯を聞きたいんだけど」

「また一々説明するのも面倒くさいから割愛しとくね。要するに『事故って目が覚めたら女の子になっていた』ということだ。OK？」

純

「……触って良い？」

有希

「却下!!！」

そろそろと近付いてくる左手を思いつきり打ち落としながら叫ぶ。なんてやつだ！ 人が困ってるってのに、自分の欲望に従うことしか頭に無いのかよ！

純

「まあそれは冗談として、その身体の持ち主とは連絡とれたのか？」

有希

「ほんとに冗談か……？ まあいいさ、今から『さき』に電話してみよ」

スカートのポケットからピンクの携帯を取り出し（この時、スカートが持ち上がってパンツが見えそうになった）、すっかり頭に刻み込まれた自分の携帯の番号を打ち込む。受話口を耳に当て、元々は俺のものだった低い声が聴こえてくるのを待った。

「

」

聴こえたのは、電波が届かない事を伝える事務的な女性の声だった。

## 04 夢(巻)

誰だろう？ ベッドで寝ている俺を取り囲んでいる彼女らは。何だか急に目が覚めたけど、誰かが起こしてくれた訳ではなさそうだし、携帯のアラームも鳴っていない。そうだ、今何時？ 携帯を探して枕の周りを探ってみた。普段はアラームで起きるため、携帯さんには寝ている間、枕元に常駐してもらっている。探している内に俺は自分の手を見て驚きの声を上げてしまった。『さき』の身体ではない。てかこれ、俺の身体だ。『さき』はこんなに手がでかくないし、毛深くないし……いや、俺もそこまで毛深くはないけど、ほら、『さき』の腕はツルツルだったから。

結局携帯は見つけることが出来なかった。というより、探す必要がなくなった。暗い、否、真っ黒？な部屋に俺はいたから。この部屋に見覚えは無い。てゆうか、何も見えない。なのに自分の身体は明かり無しでも見えるし、周囲の女の子達も暗闇の中で可視領域にいる。こんなの、夢じゃないわけがない。俺は純の部屋のベッドで寝ていた筈だし、もし昨日の出来事が全て夢だったとしたなら、自分のベッドで寝ていないのはおかしいじゃないか。家にある俺のベッドは二段ベッドで何もかも木製だから、こんなにふかふかしてない。このまま目を瞑ってしまいたい気持ちもあったが、そういう状況でもないのかな、これは。

俺を取り囲んでいる女の子達は皆一様に俺を見つめ、ただただ静かに佇んでいる。幼稚園児くらいの髪の毛長い双子の幼女。中学生っぽいセーラー服の女の子（見たことある制服だな）。見た目は小学生並みに小さいが、その佇まいから俺と同世代かそれ以上と思われる女性。二人は無表情、双子の片方がウズウズ？な感じでこちらを見ている。もう片方の幼女はブスツとして機嫌悪そうだな。

……もう完全に意味不明だけど、どうしましょう？

双子の片方は最早抑えきれない様子で、突然ベッドに横になったままの俺に飛びついて来た。勢いで頭が俺の顎にぶつかり、でも衝撃はあつたけどそんなには痛くなかった。幼女の方は中々に痛かったよう、おでこを押さえて少し涙目だが無理矢理笑顔を見せた。そして俺のお腹の辺りにガシツと力強く抱き着き、とても幸せそうな表情でそのまま寝息をたて始めてしまった。その様子を見てさらに機嫌を悪くするもう片方の幼女。……なんなんだ？

全くついていけてないまま、眠っている幼女の頭をなんとなく撫でている俺の様子に、小さい方の女性が苦笑しながら話しかけて来た。

ちびっ娘

「その子、ずっと貴方が来るのを待っていたのよ」

そんなことを言うちびっ娘。声からしてもやっぱり同世代っぽい。こういう人ほど『小さい』とかそういう言葉に反応すると思うからな。俺ってうっかり口滑らせる性格してるっぽい。いや、違うな、空気を読めてないってのが正解かな？ しかし、俺を待ってたってのはまた意味がわからん。首を傾げるしかすることがねえや。

ちびっ娘

「その内解るから。今日はもうお仕舞い」

肩に掛かった髪を後ろに払いながら控えめに笑う。婉美な仕草と

その上品な笑顔、そしてコンパクトな可愛らしい体格にノックアウト寸前だった俺は、言われた言葉の意味を図りかね、俺の腹に抱き付けて眠る幼女を見ると急に眠気に襲われた。……まあいいや。どうせ夢だろうし。考えるのもめんどくさい。

さて、朝起きたらこの身体は男と女の、どちらであるだろう？ぶっちゃけどっちでもいい。男なら起きて風呂に入って飯食ってそのままバイトに行くだけだ。何もおかしいところはない、普遍的なストレスまみれの日常。女なら……常に不安感つきまとう非日常。しかし、それは新たな世界の始まりであり、実は希望に満ち満ちた素晴らしい世界への扉なのかもしれない。一々悲観的ではいけない。なってしまったものはいくつかないかと早めに割り切ってしまう、その状況を楽しんでしまえば何処にも問題など発生し得ないのだから。

## 05 触ったんでしょ？

ベッドのすぐ横の窓のカーテンの隙間から朝陽が射し込む。ベランダ側の窓は数センチ開いており、そこから朝のまだ少し冷たい空気が押し込まれてくる（今は五月だが、基本的に寒がりだから俺）。静かな……とは言い難い、何台もの自動車が家の前の道路を走る音が俺の右耳のみを刺激してきやがる。俺は『朝』というものを常にライバル視しており、毎日無意味な闘いを繰り広げて来たが、今日は調子が悪いのかななのか、一向に勝負が始まる気配すら無い。スースーと女の子らしい静かな寝息。ズズツ、ズズツ、グゴガガガツて感じの三十路の鼾。外から聴こえる車の騒音と、すぐ傍から聴こえる有機生命体の口から発せられる騒音。戦場の最前線さながらに迷惑な大音響だが、それは非日常の中の、どんな強敵にも侵しがたい平和な一時だった。

……この三十路の鼾って、純か？ それともうちの二十八になる兄貴のか？

階下から足音が響いてくる。トストツツ、とあまり荒々しくない緩やかな足音は恐らく純の妹さんか、又はうちの親父のものだろう。その音でノンレム睡眠からレム睡眠に引き上げられた俺は眠ったまま、夢を見ずにただそれらの音が右耳に侵入するのに任せていた。侵入者の大部分は三十路の鼾だった。

……うるさいな、この騒音発生機め！ リアルにオツサンじゃねえかこの鼾。無呼吸症候群になってそのまま死ねばいいのに。

足音が徐々に高度を上げてくる。階段を上ってきているようだ。

まさか、起こしに来るのか？ そついえば純は平日は学校だ。そろそろ起きた方がいいんじゃない？ ……俺も今日はバイトだ。

妹さん

「お兄ちゃん朝だよおつ、起き……」

そんな声が聴こえる。うん、やっぱり妹さんだったか。もう二六になるはずなのに三十路の工口兄をわざわざ起こしに来てくれるなんて……今なんか台詞が途中で止まらなかったかい？ どうしたんだろう？ 起きて確かめたいけど……起きれない。目を覚ます事ができないぞ。頭は殆ど覚醒してるはずだが、これはどうしたことか。

妹さん

「……女子高生連れ込んだの……？」

なんか声に絶望が入り交じってるような気がする。なにがそんなにショックだったんだ？ ……ん？ 今女子高生って言った？ え？ 何それ？ ……女子高生……！

ガバツ！

妹さん

有希

「……」

敵意は籠っていない、無言の対峙。純の家には何度か来たことがあるが、妹さんに会うのは初めてだ。……たまに純と間違われるだけあって、パツと見、又は遠目に見れば結構似ているかもしれない。妹さんは俺を見ている。それは確かなのだが、視線は微妙にずれてるな。そして今、急に敵意が籠ったように感じた。心なしか、胸の辺りを見ているような？ 自分の身体を恐る恐る見下ろす。ワイシャツ、ミニスカート、紺のハイソックス、そして爆乳……！

妹さん

「……………」

有希

「……………」

女子高生…………俺だ…………。

互いに驚愕の表情を向ける俺と妹さん（爆乳に対して敵意あり）。ヤバい…………これはヤバいよ。下手すりゃ警察沙汰だぞ（純が）。早く、早く説明して誤解を解かなければ…………でもなんて説明したらいいのだろうか。

その辺の床に視線を走らせる。純…………あれ？ 純はどこに行った？

純

「……………んん……………」

お腹に何か巻き付き、ビクツとしてそちらを見やる。

純

「ゲゴツ、ん……むゆ、……き」

有希

「……………」

妹さん

「……………」

ひっ、ひゃくとごぼ~~~~ん!!!!!!

純

「申し訳ありませんでした」

妹さん

「……………最低」

有希

「以下同文」

とりあえず二人で純を（阿吽の呼吸で）フルボッコにしてから土下座させた。今、俺の左足の下に純の後頭部がある。ゴリゴリ。オラ、強制猥褻の罪で死刑にしてやるぞ。寝惚けて腕を俺の腰に回しただけだったらしいのだが、関係無いね。てゆうか俺の布団の中に入ってきた時点でゴキブリプレイの刑確定だろ。……ゴキブリプレイの内容はご想像にお任せする。まあ、男の身体のままだったら別に一緒にベッドで寝ても気にしないが。……あ、待て、誤解しないでくれ。俺はそんな異常性愛者じゃないぞ！

有希

「お前には前科があるんだ。思い知らせてやるぞ」

そう。去年の文化祭で女装したとき、俺はこのクズにお尻を触られた事がある。しかも二回も。さらにスカートを捲ろうとまでしゃがって。あの時は男だったからな。ギャグで済ませてやったが、今は状況が違う。

有希

「てゆーかお前床で寝てた筈だろ。……もしかして何かしたのか？」

途端に鳥肌が立ち、着衣が乱れてないかを調べる。シャツ、スカ  
ート、靴下、ネクタ……あれ？

有希

「……ネクタイは？」

妹さん

「……ネクタイってアレ？」

……何故昨日まで締めてた筈のネクタイが部屋の反対側に！？

純

「……イヤ、そのままだと苦しいだろうなと思って……」

足の下から声が聴こえる。白々しい言い訳を……。あ、ネクタイ  
を外したってことは……

有希

「……触った？」

足にビクツと振動が伝わる。ハイ確定。お前は死刑だ。誰がどう  
口出ししてこようと、もう俺の決意は揺るがないぞ。ひま り保

育園で飼ってるインコの餌にしてやろうか、それともゲイの噂で有名な夜中の与 公園に放り出してやるうか？ ゴキブリよりはましだろつ。

純

「……触ってないです」

有希

「触ったね？」

純

「……触ってな」

有希

「触ったよねえ？」

妹さん

「触ったんでしょ？」

純

「……触りました」

純のおかげで妹さんと仲良くなれた俺は、これから仕事だという妹さんを二人で送り出し、部屋に戻ってスカートの形を気にしつつベッドに座る。妹さんには「酒飲んじやって運転出来なかったから泊めてもらった」と言っておいた。とりあえず納得してくれたようであり、一先ず安心かな。

純は俺の前で着替え始め、上下を脱いでから最初にジーンズを穿き始めるまでたっぷり五分以上かけた。相変わらず四肢は細いが、

ビール腹は短大時代と比べてちょっとだけ引つ込んでる気がする。最近では飲んでないのかな？ それとも、殴りすぎて凹んだまま元に戻らなくなったか。

俺が何も言わずにまじまじと見ていたからか、

純

「……お前ちょっとは女の子らしくさあ、ここは恥じらいとかってのを見せるところじゃないのか？」

……つまり、そうしろと言いたいんだな？ 俺に『女の子』を演じると。こいつは俺を自分好みに調教しようとか思っているのかもしれない。懲りない野郎だな。

有希

「誰に言ってるの？」

純

(ガクガクブルブル)

純の野望はあっさりと打ち砕かれた。

携帯の待受画面を見ると、今日は木曜日らしい。時間は八時前。

待受画像は二匹の可愛い子猫だった。普段の俺ならまだまだノンレム睡眠で『朝』との戦いに向けて最終調整を行っている頃だが、今日から暫くは『朝』に奇襲をかけて、コテンパンにした拳句に地を嘗めさせる必要がある(今日は妹さんに起こしてもらったが、そこはツツコンでくれるなよ?)。何時ものように昼まで寝ていては(火曜日〜日曜日は大概八時半に起きる)、全く以て時間の無駄だ。純のエロに一々付き合ってるのもかなりのタイムロスだけど。

これから俺は元の身体に戻る方法を探す訳だが、ただ探すだけではいけない。方法が見つからずにこの状態が長引く事も考えて、そうなった場合の『生き方』というものも重要だ。とりあえずは純の部屋に居候するのが基本作戦A。その他は必要に応じて随時展開していく。

元の身体に戻るのが遅れるようならバイトもしなければ。ただ何もせずに純の厄介になるのは俺の気が済まない。働かざる者なんとやらだ。それに友人宅を転々とするのはめんどくさいからな。今までやってたバイトをそのままやればすぐに主力になれるだろうし。平日も出勤させてくれたら最高なんだが……。

純

「気をつけて行けよ。今のお前危なっかしいから」

風呂にも入れてもらえたり、仕事に行く前に妹さんから服も貸してもらえたり（上衣のサイズを物凄く気にしていた）、昨日俺を撥ね飛ばした御兄さんからもらった燃料代で財布の心配はする必要がない（『さき』の財布は最初から諭吉さんで込み合っていたが、勝手に使いたくはない。なんでこんな大金持ってたんだ？）。妹さんから借りた服は黒のチュニックに膝丈のデニムで、純のお母さんに「可愛い！」って言うてもらえた。顔の事なのかファッションの事なのかはわからないが。そういうお母さんも実はこっそり妹さんの服を借りていたようで、その若々しいファッションから「純にもう一人妹さんが！？」と驚愕するほどだった。……一瞬だけ見ればそう感じる。間違ってもじろじろ見ないことをお勧めするよ。

そんな感じで上衣に胸を締め付けられつつ、それでもちよつとだけ上機嫌だった俺だが、先程の純の言葉（「今のお前危なっかしいから」）で思い出した事がある。身体が思うように動かない、と昨日感じたこと。俺は九歳の頃から「PKC」と呼ばれる運動障害を患っている。動作開始時に得体の知れない発作を起こすのだ。手足の筋肉が俺の意思に反して勝手に動き、酷いときは顔面の筋肉もひきつる。普段は《カルバマゼピン》という抗てんかん薬を飲んで発作を抑えているが、この身体ではどうだろうか。PKCは非常に稀な障害だし、男女比率は男性側に傾いている。まさか『さき』がPKCを患っているとは思えないし、俺の持病がそのままこの体でも連続するとは思えないのだが、一応その辺りも配慮しなければ。

しかし、「気をつけて行けよ」か……。純って実はいい奴なんだよなあ。エロが無ければサイコーだったのにな。

有希

「大丈夫よお。眠ったまま運転出来る男だぜ俺は」

実際にバイクで居眠り運転をして、気付けば曲がり角をキレイに曲がっていた事が一度あったのだ。

純

「いや、そつちじゃなくてな」

有希

「？」

なんとなく言いにくそうな雰囲気を醸し出しながら呟く純。なにやら解らんけど、とりあえず心配してくれてるのは伝わるから良し

としよじ。

有希

「じゃ、行ってきまーす」

純

「おう。あんまり歩道に近寄るなよ」

有希

「……はあ？」

側溝につっこむなって言ってるのかな？ んん？ ワケわからん。

昨日は結局『さき』と話す事は出来なかった。携帯の電源を切っていたのか、それとも真夏のビアガーデン並みの人混みの中にもいたのか。ビアガーデン会場はマジで圏外になるからな。（ギリギリ未成年だつたくせに）ビール飲みながらサークルの部長とメールで緊急サークル会議を開いていたのだが、送信も受信も一苦労だった。

我が家に付いたのは朝の八時五十分頃。高校生の起床時間は最低でも八時半だし、俺も普段は八時半に母に起こされる。『さき』も流石にもう起きているだろう。なのに未だに連絡がつかないのはどういう事だ？ 俺の携帯壊したりなんかしてないだろうな。

ピンポン

ピンポン

インターホンを一度だけ押し（一度で二回鳴るタイプ）、バッグを後ろ手で持つ。黒い玄関扉の真ん中には磨りガラスが嵌められており、ざらざらした視界の向こう側の様子がほんのちよつとだけ窺える。影が動き、窓から射し込む朝陽を遮った。誰かがこつちに来るな。……てゆうかこの服、胸が苦しい。巨乳って、何気に辛いな。

「ハイ？」

玄関を開けたのは母だった。所々混じりつつある白髪を最近染め出した母は既に仕事着に着替えており、表には出さないがなんとなく焦っているような、息子の目にはそう映った。普段母は十時半に家を出るのだからまだまだ余裕があるはずだが、一体どうしたのだらう？

有希

「あの、今、有希さんはいますか？」

そう、今日の目的はそつちだ。俺の身体に入り込んだ『さき』に会うため。でなければ話が始まらない。ちよつとの間でもいい、若しくは今日はバイトをサボタージユさせてでも……。

母

「……あの、有希は今病院にいて……」

有希

「……え？」

思わず声が漏れた。病院だと？ どうして？

母

「なんか実際に見ていた人の話だと、バイクを運転していきなり横に倒れて気を失ったみたいなのよ」

有希

「……………」

……………それってつまり、身体が入れ替わった瞬間に俺も『さき』も同時に気を失って倒れたという意味で、打ち所の問題で俺はすぐに目覚めた。だが『さき』はその逆で未だに目を覚まさないよ。

……………こいつは由々しき事態というものではないか？

俺は総毛立った。この状況に既視感を覚え、頭が一瞬真っ白になる。もう三年半も前になるか。朝早くに鳴り響く救急車のサイレン。明るい性格の担任がホームルーム後に突然溢した涙。千羽を超えた数えきれない程たくさんの、想いが届かなかった千羽鶴。もうあんな思いはしたくない。ましてや俺の身体を持った、まだ十六歳の少女。これからもっともつと面白くなっていく、先の長い人生が待っているのだ。数十年の内のたった三年間に詰められた濃い高校生活。部活をしたり恋をしたり、進学或いは就職して、結婚して……………。

そんな一つの人生を、絶対に喪う訳にはいかなかった。

## 06 病院

『さき』はG市の国立病院に入院しているらしい。俺の主治医がいる病院だ。先述した障碍のことで二年前に診察を受け、それから三ヶ月に一回は薬を貰いに行く。薬を飲めば発作は抑えられるが、この障碍は一生治ることはない。長い歳月を経て自然に発作が目立たなくなるのを待つだけだ。

時計の針は九時十分を指している。フロントで病室の場所を訊ね、すぐに向かった。『さき』は北棟の三階、通称『北さん』の308号室にいるとのこと。去年俺が検査入院した時と同じ病室だ。あの時は入院患者が少なかったため、六人部屋を俺一人で占領していた。ただの検査に二泊三日もかけるのは絶対に間違っていると、そのときはイライラしたものだ。相当に暇だったからな。

今回も六人部屋を独占状態だった。六台並ぶベッドの角側、陽がよく当たる窓際のベッドに横たわる男の身体。酸素マスクやら心電図モニターから伸びる電極なんかは装着されていない。腕や脚を吊り下げられてもいない。点滴の管が一本、左腕に伸びているだけだ。別段大したことはないようで、俺は安堵のため息をついた。

バイクで転んだときにぶつけたのか、左目にガーゼを当てている。傷がついたのは別に構わないが、出来れば俺が病室に居る内に目を覚まして欲しいな。

ベッドの傍に椅子を立てて座る。小さく開いた窓から侵入する生温い風が髪を揺らし、開いたままの扉から出ていった。こっぴつ涼

しくない風って結構好き。なんでかわからないけど、考え事する時の保冷剤になる。少し落ち着いて、さあ、考えよう。

……

……

……

……何を考えるんだっけ？

再びベッドに横たわる姿に目を向ける。真つ黒く細い髪の毛は男性としては少し伸び気味。顔のパーツはそれぞれ大きく、整ってはいるが特にイケメンというわけではない、物語の主人公にはなり得ない顔。自分が目の前で寝ている姿を自分の目で見るというのは、なんとも奇なるものだ。幽体離脱をするとこんな感じなのかもしれない。有機体であるか否かの違いしかない。

低いモスキートのような音が続けて三回聴こえた。覚えている。これは俺の携帯のバイブレーションの音だ。どうやらメールが来たらしい。携帯……どこにある？

すぐに見つかった。ベッドの傍にある鍵付きの引き出しの中の袋の中にあつた。鍵は案の定ベッドに寝ている俺の身体の首にかけてあつた。元は俺の物である黒の携帯。キーロックを解除し、待受画面を見る。

「Eメール 3件」

受信ボックスを開く。メインフォルダに二件、短大フォルダに一件、メールが入っていた。まずはメインフォルダを覗いてみよう。

0002 5/6 21:04

メディアポケットJPO7b

mpoメルマガ 5/6

……ちくしょう。客観的視点に立つとこんなにも悲しくなるのは何故だ。

……ああ、さっきのメールは何かの間違いだ。俺は何も知らない。『メディアポケット』とかいう、如何わしい動画を紹介するメールマガジンを欲したなんてことは俺の頭の中に記憶として残ってなんかいないから、きつと業者がメールアドレスを間違えて送ってきたのだろう。きつと気のせいだ。俺は何も知らない。

俺は、何も、知らない！

さて、間違いメールと脳内の一部の記憶を同時にこっそり削除した俺は、次のメールを見た。

0001 5/7 9:11  
中城良隆  
(non title)

バイト先のマネージャーからだった。恐らく母が入院の旨を伝え  
たのだろう。

メール0001

5/7 9:11

From: 中城良隆

To: \*\*\*\*\* - \*\*\*\*\* (ry

Sub: (non title)

大丈夫か？入院したって聞いたけど。起きたら一度連絡ちょうだい  
ね。

ふむ、どうやら迷惑をかけてしまったようだ。やっぱりいきなり  
こういう事態になると、マネージャーとしては困るものだよなあ。  
実は俺、バイト先のアルバイト達の中で実質立場的にトップなん  
だよな。ジャニターっていう役で、もちろん給料もトップ。今でこ

その後輩の数人が徐々に育ってきて、俺の仕事を出来るまでになったが、それでも支障が全くないとは言えない。平日は……おっと、そういうえばまだバイトの内容を説明してなかったな。失礼。

俺は今、モダン・将聖ホテルという結婚式場で働いている。披露宴や結納、パーティーなどのサービスを少々。所謂宴会スタッフというやつだ。一番の古株、という訳ではないのだが、高校二年の十一月に営業部門の母に無理矢理連れてこられて嫌々ながら始めてしまい、前半分の派遣スタッフ時代と合わせてかれこれもう三年と八ヶ月にもなる。多分四番目位に古株かな。

営業部門のおばさん達は普段は営業をしながら平日のランチバイキングや休日の披露宴のサービスをしていて、殆どの人が俺よりもずっと長くいるベテラン揃いだ。母が居るからかどうかはわからないが、皆よく俺を助けてくれるし、勿論俺もお返しとばかりに色々手伝いをする。失敗もよくするのだが、それはしょうがない。既に四年目の後半に入っているにも関わらず、俺は相変わらず接客というものが大の苦手であり、それ以前に要領が悪いからな。しかし仕事は毎日誰よりも真面目にやってきた。その点は気後れ無く自負出来るし、営業のおばさん達やマネージャー達はそういうところを評価してくれた。

そんなこんなで俺が今のジャーナターという立場に立ったのはそういった頑張りを考慮した訳でもなんでもなく、ただ二月の終わりにジャーナターが一人辞めてしまったのでその代役を探していた時に、三月に短大の卒業を控えていて且つ進路を決めていなかった暇人属性を持っていたからという、なんとも複雑な気分にさせてくれるテキトーな理由からだった。

その後、更に残った二人のジャーニターも辞めてしまい、その時点で俺はモダン・将聖ホテルのアルバイト達のトップに立たされてしまったわけだ。約三分の一の確率で週休二日、給料も軽く六桁にまで足を踏み入れ、仕事を助けてくれる人も多い。ストレスに根こそぎ髪の毛を奪われていくような錯覚すら起こすほどに疲れる仕事だが、その代わりにバイトの忙しさからお金を使わない生活に切り替わったため、貯金通帳を見れば思わずにやけてしまう俺がいる。

十月からは短大の奨学金の支払いが始まるが、それも一ヶ月の支払額はとるに足らない数字である。このまま一人暮らしをしても余裕が出来てしまうこの現状は、暫くは捨てられそうにないな。……早く元の身体に戻らないとこの立場も危うくなるかもしれないし。

いやすまない。たかがバイトの話でここまで長くなるとは思わなかった。次は短大フォルダを見てみよう。

0001                    5 / 6                    22 : 23

琴音

(non title)

琴音は短大時代の級友で、クラスのリーダーだった。高校では硬式テニス部のキャプテンをやっていたらしく、その明るい性格とリーダーシップの凄まじさ、責任感の強さは驚愕に値する。卒業した

今でもクラスのみんなに連絡を回し、クラス会の企画もしていた。  
彼女に対して、俺は冗談抜きで尊敬の念を禁じ得ない。

メール0001

5/6 22:23

From: 琴音

To: \*\*\*\*\* (ry

Subject: non title)

こんばんはー

5月10日(土)

Dクラス

第一回のクラス会に  
ついてなんですが

来れそうな人

何人ぐらいいるのかな？！？

ある程度の

人数知りたいので

来れる

まだ迷いちゅうの

人は返信メール

お願いします

今回はパス

行かない人は  
返信メール  
送らなくて大丈夫です!!

お忙しいなか  
恐れ入りますが  
お願いします

琴音

ハ矢鱈と絵文字（特にハート）が多かったが、そこは敢えて削除しておいた

今度のクラス会の人数確認か。場所は確かN市にあるライブハウ  
ス『b1』、時間は二十一時からだったな。返信メールは送らない  
でおこう。今の俺が行っても「誰？」って言われるだけだし、別に  
店を貸し切ってるわけではないから一般客として普通に出入りは出  
来る。それに純がいるから、行って一人ぼっちで空気を演じるなん  
てことはないだろう。

一応身体が女子高生であるため酒は飲むわけにはいかないが、そ  
の辺俺は理性で我慢できる。酒も煙草も、その気になれば半年以上  
手にせずとも生きていける。煙草はもう一年以上触れていないしな  
元々ニコチンに対してそれほど依存していなかったから、禁煙どこ  
るか煙草の存在そのものが無くなったとしても特に悲観することは  
ないだろう。俺って欲求に強いかも。性的欲求は……せいぜい一ヶ

月つてとこか。男は性欲を適度に処理していかないと不能になるらしい。つまり性欲に関してあまり我慢しちゃいけないってことだ。本能に従いすぎるのも不味いけど。俺の場合、一番我慢出来ないのは読書欲だな。

俺は『さき』のピンクの携帯をバッグから取り出した。純にメールを打っておこう。俺の身体が病院にいること、クラス会のこと、そしてバイトを始めようかなー？　と思っっていること。バイトは何にするかはまだ決めていない。将聖ホテルでもいいし、どこか小さな本屋とかもいいかもしれない。ここは迷いどころなのだが、考えてみれば将聖ホテルはこれからの数日間、或いは数週間を俺抜きでやっていくことになる。それはちょっと心許ない気がする（俺の自惚れかもしれないが）。ならばここでの最良の策は俺がこの身体のまま将聖ホテルの面接を受け、その場でマネージャーに実力を見せつけ、そのままジャーナターになってしまふことだ。……まあ、それは俺の身体が目覚めるまでの間という条件付きになるだろうが。てか面接受けてその場でアルバイトのトップに立てたら凄くない？

俺は『さき』の携帯のプロフィールを俺の携帯に登録した。そして、直ぐに連絡が欲しいという旨のメールを送って俺の携帯を引き出しに仕舞った。

『さき』が起きるまであまりにも暇であるため、俺は再び携帯小説を打ち始めた。今度は昨日とは違う作品で、説明するのも面倒くさいからタイトルだけ記しておく。

『奇跡の少女』だ。

一応最強設定になっただけではいても、実際に闘ってみれば一番強くは

ならないところが俺の小説のスタイルらしい。昨日書いた小説の主人公も、元魔王だけど自らの力を制御しきれずに、結局最強足り得なかった。他の作品の主人公達もそうだ。最強に相応しい力を持つてはいるものの、何故かどこかに矛盾が生じ、勝てない敵の存在を許してしまうのだ。ただし例外もいる。それがこの『奇跡の少女』の主人公『ミライ』ブランド『マルコシアス』『レイン』と、シリーズ全体の主人公『神崎蒼華』だ。二人とも人々に恐れられるほどの強大な力を発揮し、『神』と呼ばれて以下略。

しかし奇跡の少女はなんの構想も考えずに、ミライというキャラのイメージとただの勢いだけで書き始めてしまったため、なかなか思うように筆が進まないのが現実だった。完全に失敗だ。もっと世界観とプロットを具体的にイメージするべきだったな。

『奇跡の少女』の六話目を書き終える前に、部屋にノックの音が響いた。振り返る俺の視界に飛び込んできたのは白衣×5だった。看護師の女性もだいぶ前からズボンを着用するようになった。この国立病院もその例に漏れずに、三人の露出少な目な白衣女性達が俺に笑顔を向けた。あとの二人は男性医師。うん、男性のほうは見覚えあるぞ。そのメジャーリーグの某日本人キャッチャーにそっくりな気がする顔と、コンビ名に『博多』がつくお笑い芸人の右側のような顔は、なかなか印象深かった。俺の記憶が正しければ、キャッチャーの方は確か神経内科医長だったような？　そして博多芸人の方も神経内科医で、二人とも前回の検査入院の時の俺の担当だった。

俺は何でもない風を装って携帯をバッグに仕舞い（当然ながら院

内は携帯使用不可)、博多芸人もとい袖口先生の方を見た。

袖口先生

「あれ、もしかして有希くんの彼女さんかな？」

有希

「！」

〈妄想ワールド展開中〉

その言葉に反応し、思いつきり悶えてしまった俺。いやー、今の一瞬で俺が超美少女『さき』とあんなことやこんなことやそんなことを妄想したというのは冗談だが(ほんとに冗談だよ?)、ただ一緒に歩いているのを想像しただけでなんか堪らなくなったよ。

ロリキャラは否定できないが、これほどの美少女なんだ。『天使』の羽根を着けて眼前に現れたらどうだろう。今の俺なら「彼女は天使だ!」と、簡単に信じ込んでしまえる自信がある。とにかく可愛いんだ。普段はこういう女の子系の話題を口にしない俺が言うんだから、その美貌のレベルは推して知るべし。現実見ると年の差五歳(すまん、免許証覗いた)、見た目はそれ以上に離れて見えるわけだが、今の俺をとにかく言える輩はいないはずだ。ただ、これだけは言わせてくれ。俺は、ロリコンではない。

有希

「ち、違いますっ。学校の先輩で……」

一応否定しておかないと後で『さき』に迷惑をかけてしまう。ていうか、俺は三年前まで『さき』が通っている工業高校の生徒だっ

ただ。事実を言ってるのだから、何も気にすることはない。そう、俺は『さき』の先輩。

袖口先生

「ああ、そうなんだ。でも学校サボってまでお見舞いに来るのは患者側からすれば嬉しい限りだろうけど、客観的に判断するならあまり良いとは言えないね」

有希

「……ハイ」

そんなことは解ってるけどさ、今『さき』の代わりに学校に行けば、絶対に何かをやらかす自信がある。第一『さき』がどんな人物かも知らないし、女性的知識というものが俺には欠落している。今の俺達は『解離性同一性障害（多重人格）』の状態と似たようなものだ。例えれば俺は『さき』の頭の中で生まれた交代人格であり、今俺は主人格としてスポットに立ち、『さき』の身体を使って行動している。解離性同一性障害の当事者は自分が多重人格だということに気付いていない場合が殆どであり、それゆえ周囲の人間達は別人のような振る舞いをする彼等を遠ざけたり攻撃したり……とにかくいいことなんかないからな。中には、話せば理解を示す者もいるかもしれない。だがそんな危険は犯せないし、もう十時半を過ぎるのに『さき』の家族及び友人達は連絡すら寄越さないじゃないか。無断欠席なんて、『さき』にとっては日常茶飯事なのか？　こんな天使のような容姿を持ちながら、実は不良少女なのか？　非行少女か？　……全く以て信じられない事だが、もしそうだったのならまあ納得出来ないでもない。でもやっぱり腑に落ちないな。欠席どころか、無断外泊しちやっってるんだぞ。両親は何を考えてるんだらう。放任にも程があるぞ。

袖口先生

「うん、じゃあ有希くんはこれからいろいろと検査があるから、君はちゃんと学校に行くんだよ？」

有希

「ハイ……」

まあ、頷くしかないよな。でも、ちょっと気になるぞ？

有希

「なんの検査ですか？」

事故に関すること？ それだったら外科医が来なきゃおかしいよね。それともPKC？ 現状では結果を出せる検査はもう無いはずなのに、なんで今更……。

袖口先生

「んー、ごめんね。患者さんの事はあまり話せないから……」

あ、そっか。患者のプライバシー？ってやつですか？ 周囲の目から見れば、俺って他人だもんね。俺、本人だけ……。

身体の前でバッグを両手で持ち、病室を出る。お母さんと一緒にお見舞いに来たらしい三・四歳くらいの女の子に、すれ違い様に超笑顔で手を振る。女の子は“はにかんで”手を振り返し、小走りにお母さんを追いかけていった。……めっちゃ可愛い。やっぱり就学前の子どもって最高に可愛いよね。俺的に特に二歳から三歳頃は天

使だね。このどす黒い心まで洗われるようだよ。……一応念を押し  
ておくけど、俺は、ロリコンではない。元々保育士志望だから子ど  
もが好きなんだ。間違えるなよ。

一階の売店の前の自販機でアップルティーを買い、外に出てから  
『奇跡の少女』の続きを書き終えて投稿した。『奇跡の少女』はい  
つになつたら完結するだろう？ 先が長いようであり、案外早く終  
わらせる事が出来そうでもある。てか、早く終わらせたい。ぶっち  
やけ面倒くさい。『金色の悪魔』とか『悪魔の子』とか『ウルフガ  
イ』とか『魔狩人』とか、他にも書くのはいっぱいあるん  
だ。順番的には『魔女の子ども』『奇跡の少女』『金色の悪魔』こ  
の三つが同時進行、次に『魔狩人』と『ウルフガイ』が同時、そし  
て『悪魔の子』。

『奇跡の少女』と『金色の悪魔』は内容がかなり密接に繋がって  
いて、どちらかが滞るとどちらかが進められないし。そして全作品  
終わらないと『悪魔の子』も進まないし。『悪魔の子』まで終わら  
せて初めて本編が始まるからね。そして本編のタイトル、まだ決め  
てない(爆)

実際にはこのシリーズ以外にも書くものがある。ただこっちはま  
だ資料不足で、未だ手をつけられない状態だ。

病室を追い出されて特に何もすることが無く、かといって元の身  
体に戻るための手掛かりとかもさっぱりだ。今の時間は十時四十五  
分。飯『喰う』のにも早いしな。ちょこつと本屋で立ち読みでもし  
ようかな。確かこの病院から十分、純の学校から五分の場所にB O

OK・OFFがあつたはずだ。

## 07 引つかかってるし

「さきー？ 何やってんのこんなところでっ」  
「……え」

肩を叩かれてさきは振り返る。そこに立っていたのは、肌が黒いポニーテールの女の子だった。目がぱっちり大きく、睫毛がキリンみたいに長い（ウソ。でも1cm以上はあるはず。てかキリンの睫毛とか知らん）。桃色の唇は瑞々しく、とつてもチャーミング。左腕にポーチを提げ、右手はさきの肩に伸びている。右手の人差し指が一本だけ立てられ、振り返ったさきの右頬に勢いよく突き刺さった。

「あははっ、さきひっかかってるし！」

けらけらと無邪気に笑う姿に活発な印象を受け、しかし見覚えの無い顔なのか、さきは困惑した様子で応える。

「……誰？」

爪の伸びた人差し指が突き刺さった頬を擦りながら、不安の色を表情に滲ませるさき。

「……誰、って？ なぐに言ってんのさき！ りかじゃん！ どしたどした？」

その名前にも反応せず、益々困惑して顔を俯けるさき。

（どうしようっ？ この子は仲良さそうだし、ほんとの事言った方が……）

↳ a point of view りか

(…………どーしたんだろーさき。さっきからなんか変。「…………誰？」  
だなんて、まるで記憶喪失にでもなったみたい。昨日まで普通に  
喋りしてたのに…………)

「ねえーさきー、どーしたの？ 記憶喪失？」

そういうと、さきは身体をピクツと振るわせて顔を上げた。とっ  
ても不安そうな表情をりかに向ける。

「あの、私…………」

「ん？ なあに？ さぁどんどこい！ なんでも言いな。りかが助  
けてあげるよっ」

「私…………実は男なの」

「…………はい？」

なんだそりゃ。「実は男なの」？ いやいやいや、今までフツ  
に女の子してたじゃ…………ん？ そういえばさきって、人がいるとこ  
じゃ着替えないなあ。…………まさかのまさかですか？

「…………マジ？」

「マジ」

「くんと頷くちぎ。

だああゝ！ 嘘でしょ！？ クラスどころか学校でも一番可愛

いのこ！ ……ん？

「……いやでも待って、それとこれとは話が別じゃない？ 昨日まで一緒にお喋りしてたりかの名前を忘れるというのはいったいどういっつ見さ？」

「あつ、そ、それは……」

……パタン。

……ふう。

読んでいた小説を棚に戻して一息つく。タイトルは『頑張れ狼さん』（この小説は現実には存在しません）。

いやーびつくらこいた。まさかのまさかだったね。今純の学校から五分のところにBOOK・OFFにいるけど、何気なく手にとった小説の何気なく開いたページで、まさかこんなどつきりするよ  
うな展開が繰り広げられていようとは！ この主人公の『さき』、  
一歩間違えば今の俺と全く同じ境遇なわけで、っていうか俺もこう  
いう状況に陥る可能性も棄てられネーゼ！

というわけで、もし俺がこの状況に置かれたらどう言い訳しよう？ 記憶喪失？ それとも解離性同一性障害（多重人格）？ 事実を激白するというのは……無いな。

今度は漫画コーナーへ行き、スク 二出版のあの漫画を手に取り  
うとした。主人公は絵本作家を目指す女顔の男、ヒロインは解離性  
同一性障害の女子高生。その他個性爆発愉快な仲間達が繰り広げる  
……………ジャンルは分からない。ラブコメかなあ？

その漫画に手が触れるや否やの瞬間、それは訪れた。

「さきー？ 何やってんのこんなところでっ」

有希

「…………え」

肩を叩かれて俺は振り返る。そこに立っていたのは、肌が黒いポ  
ニーテールの女の子だった。目がぱっちり大きく、睫毛がキリンみ  
たいに長い（ウソ。でも1cm以上はあるはず。てかキリンの睫毛  
とか知らん）。桃色の唇は瑞々しく、とってもチャーミング。左腕  
にポーチを提げ、右手は俺の肩に伸びている。右手の人差し指が一  
本だけ立てられ、振り返った俺の右頬に勢いよく突き刺さった。…  
…痛え！！

「あははっ、さきひっかかってるし！」

けらけらと無邪気に笑う姿に活発な印象を受け、しかし見覚えの  
無い顔に俺は困惑した。……………なんだとお！？

これ、完全にさっきの小説の展開じゃん……………。どーすりやいいん  
だ。「人違いです」で逃げられるかなあ？

俺は爪の伸びた指が突き刺さった頬を擦りながら、それを言った。

有希

「…………あの、人違いじゃ…………？」

よし、言ってやった。これで納得してくれたらいいけど、まあ冷静に考えたらそんなのあり得ないよなあ。

「人違いだつて？ な〜に言ってんのさき！ あたしっ、りか（仮）じゃん！ どしたどした？」

…………ナンダコレハ？ 何故ここまで展開が被ってるんだ…………？ 名前まで同じだぞ。さーてどうしようか。さっきのシミュレーションでは二つの選択肢があった（三つ目は即却下）。記憶喪失か、多重人格か…………というか、多重人格も非現実的でなかなか信じられるものでもないよな。となれば、やっぱり記憶喪失か、或いは強引に人違いでこのまま押しきって逃げようかな…………。記憶喪失っていったら、そのまま連れ帰られる可能性大だもんなあ。それは絶対にイヤだ！ というわけで、このまま人違いで押しきろうと思います。異議は受け付けません。

有希

「私、さきじゃなくてゆきなんですけど…………。人違いだと思いますよ？」

りか

「ええ〜？ そっくりなんだけどな〜。まさか、さきはあたしをからかってるのかい？」

んー、引かないな。でもここで逃げたら追っかけてきそうだなコイツは。

有希

「そんなに似てるんですか？」  
りか

「うん。ていうか本人って感じ。ねえ、本当にさきじゃないの？」

俺はゆっくりと首を横に振る。そろそろ諦める。面倒くさいし、もう十一時半過ぎちまつてる。飯食って学校行ってパソコンでもいじるからもう邪魔しないでくれ。

りか

「……光でも愛でも、珊瑚でも蓮華でもないの？」

有希

「……？」

……誰だ？ 光とか蓮華とか……もしかして、そんなにそっくりさんがいっぱいいるのか？

りか

「うーん、あたしの勘違いかあ。ごめんね、間違えちゃって」

ちよつとすまなそうな顔で手を合わせて謝ってくるりか。あ、その仕草なんか可愛いな。いや、マジでこっちこそ騙してごめんって感じだけど、実際に俺は『さき』じゃないから嘘ではないよな？

有希

「ううん、いいの。あつ、私そろそろ学校行かなきゃ。じゃーね」

……事実を言っているよ？ 逃げる口実なんかでは……あるけど。  
りか

「うん、じゃあねっ。あつ、さき……じゃないか。ゆきー！ メアド

教えて！ お友達なるっ」

有希

「えっ、メアド……？」

コ、コイツ……手強い。もしこいつが『さき』のメアドを最初から知っていたら、ここで『さき』の携帯のメアドを教えれば、『さき』であることが即刻バレてしまう。かといってサブアドレスを教えるのは不審に思われるかもしれないし。かといって断るとか、もう論外だよな。やっぱりサブアドしか手は無いな。

有希

「あ、あの……サブアドレスでも、いい？」

りかは眩い笑顔を崩さず、

りか

「サブアド？ いいよいいよーっ」

ポーチからすちゃっと携帯を取り出して操作し始める。俺もバッグから携帯を取り出し、プロフィールからサブアドレスを出す。

有希

「ゆきが送信するね」

すっと携帯を差し出し、

りか

「はやっ。じゃぁりか受信受信っ」

その後、俺がりかのメアドを受信し、やっと解放された。「りっかとさつきは……あっ、間違えた。りっかとゆつきは仲良しこよし（以下繰り返し）」と妙な歌を歌いながら、何も買わずに本屋から出ていった。俺も無駄に荷物を増やすと面倒なので、そのまま店を出てバイクに跨がる。フルフェイスのヘルメットを被ろうとする、またしても後ろから声をかけられた。

？

「おおーバイクかつこいい！ ねえねえ名前なんていうの？」

声をかけてきたのは茶髪で少し陽に焼けた顔の男の子。十八歳から二十歳ぐらいだと思っただが、このにやけ面はどうだろう。ちょっと近くに居たくない雰囲気を感じてしまい、気付かれない程度に後ろに身を退いた。

有希

「名前？ GPZだよ」

とりあえずバイクの名前を言っておく。

コイツは学校とか仕事とか無いのかな？ 平日の昼前に外をほつつき歩いて、拳見知らぬ女の子に声をかけ。

？

「えー、いいじゃん名前教えてよ」

む、今の答えじゃ納得出来ないのか？ 某暴走族漫画みたいに

ケニー・ロバーツ号』とか『エディ・ローソン号』とか言ったら喜ぶのか？ ああ、なんか気持ち悪い。吐き気がするよお前の顔。いや、決して不細工ではないのだ。ないのだが、そうニヤニヤ緩んだ顔を向けられると、何とも形容し難い不快感に苛まれる。

有希

「すみません。私、ちょっと急いでて……」

逃げるに限るね。

？

「えー、ちょっとでいいからさ、お話ししない？ ねっ？」

……あれ？ 今気付いたけどこれって、所謂『ナンパ』とかいうやつではないかい？ 冗談でしょ。こんな文句で女の子の関心を惹けると思ってるのか？ ……ヤバイ！ コイツ超面白い。完全に馬鹿だよ。めっちゃからかいたいけど、なんか面倒くさいからやっぱりいいや。

有希

「ドンマイ！ もう話かけないでねっ。面倒くさいから」

？

「……は？」

ポカンとする男の子を余所に、エンジンをかけてヘルメットを被る。我ながらこの投げやりっぷり、いつも感動してしまう。普段の俺はかなり細かい性格をしているため「A型でしょ？」とよく言われるが、実際にはO型。そのテキスト精神は半端ない。「有希のそんな投げやりな所が好きだぜ」と、純に言われた事もある。うん、だから違うってば。俺はゲイじゃねえ！ ついでに言うところリコンで

もないから！

はぁー、お腹空いた。『お腹と背中がくつつく』という表現を今まで馬鹿にしてたけど、これは土下座しておくべきかな？ 今日超特盛のカツ丼でも食べたい気分だ。いや、今の俺なら鶴見屋の『爆弾ラーメン』でも三十分で完食できるかもしれない。あの大きさときたら、器が軽自動車のタイヤぐらいあるからな。昔挑戦したときはボロ負けだった。……ああ、さっきのナンパ野郎には、発進するついでに隙をみて蹴り入れといた。なんか見てるだけでムカつくよね。ちょっとだけ、ストレスを千尋の谷に突き落とすことが出来たよ。強くなりたければ、上がってくるが良い。

小祿の最強食堂でセットメニューを二つ、驚異のスピードで完食した俺は、周囲の視線を独り占めしながら外に出た。ここから学校まで三十分くらいはかかるかな。別に急ぐわけでもないから、ゆっくりのんびり安全運転で行こー。時速三十キロぐらいで。

学校に着いた俺は、迷わず別館の階段を上る。白百合短期大学は本館・別館・体育館の三舎に別れており、本館には教室や学長室、事務や食堂などがある。

公道を挟んで向かい側にある別館は、一階に附属幼稚園、二階に

図書館、三階に特科教室で、四階は多目的ホールがある。入学式等のイベントはこの多目的ホールで催される。

別館から更に反対側の公道を挟んだ位置の体育館は元々附属高校の校舎であり、物凄く小さい。一階に理科教室と暗室、二階に職員室や茶室、三階が教室で四階に体育館や“元”附属高校音楽室（現軽音楽サークルと合唱部の部室）がある。この附属高校の小ささときたら、恐らく学年ークラスずつ、合わせて三クラスが限界なのではないだろうか。教室が三部屋たぶんしかないのに、理科室や音楽室、更衣室、サークル室などはちゃんとあった。それでいて生徒の数が少なすぎることを理由に廃校、というのは俺的には「ギャグなのか…?」と思うてしまうくらいどうでもいいし、その上更にどうでもいい事だった。ギャグ「どうでもいい」。

今回は別館にのみ用があるので、他の学舎の説明はここらでカットする（作者が面倒くさがってるからね）。

別館三階に二つあるパソコン室はどちらも講義中で使えなかった。ちくしょう、前年度は一日中講義が入ってない日もあったのに……。

廊下に人がいたら確実に聴こえただろうと思えるぐらい思いつきり舌打ちし、諦めて四階の多目的ホール前のピロティにやってきた。ピロティは何もない広い空間で、ダンスサークルの活動場所だ。何故ここに来たかって？ それはね、ピロティには、ここで練習しているダンスサークルのために（かどうかは知らないが）パソコンが一台置いてあるのだ。しかもスピーカー付き。これならデッキが無くても、CDがあればダンスサークルは練習が出来る。普段は誰も居ないから講義も気にせず利用出来るとあって、俺的には結構気に

入っているのだ。ただ我儘を言わせて貰えるなら、やっぱり印刷機が置いてあるパソコン室の方がいいな。空調完備だし。

パソコンを立ち上げ、教師陣が使うユーザーIDとパスワードを入力して勝手に侵入する。これは以前オープンキャンパスでミニ授業を手伝った時に偶然先生の指を見ていて入手したものであり、未だ誰にもバレていないので、卒業してからも自由に（勝手に）使わせてもらっている。まあ、普段は自分の記憶装置デバイスを使用しているので、ユーザーIDはログインするためだけにしか使っていないが。

こうして学校に来てパソコンなんか触っているときに、よく思う。この学校はほんつとに警戒の色が薄い所だと。白百合の学生じゃないう人を敷地内でよく見かける。俺はここを三ヶ月前に卒業したばかりだし、教師陣や職員、現二年生達にも顔が明るいのですんなり顔パス出来る。もしかしたら一年生にも俺を知ってる奴が何人かいるかもしれない。去年のオープンキャンパス、マスク無しでダンス踊ったしな。元々女子大だったこの白百合短大でここまで有名な男子学生は俺だけだろう。

高校時代の成績がかなり優秀であり、それでも文系でない俺にはこの学校のカリキュラムは正直辛かったのだが、『教師は出来の悪い生徒ほど可愛がる』みたいな言葉をどこかで聞いたことがある。実際理系の工業高校で優等生だった俺は、文系のスキルがより求められるこの学校では適度に低レベルな成績を誇りながらも、先生方からの印象は悪くないどころか好意的なものばかりだった。

理系や心理学系の科目は高評価『優』を幾つも貰えたが、文才を要する科目は真面目に散々な結果が続いた。卒業までの二年間でい

つたい幾つの再試験を受けただろうか。勿体ねえ。再試験を受けるのに一科目三千元。という事は、三万円以上は使ってるな。アホな金の使い方をしている。三万円もあればPSP買えたぞ。俺もモンンやら恋 土無双（おおつと間違えた、三 無双だった）やらをしたかった。確実に親が買わせてくれなかったたどろろことは置いて。

ゴツッ、ゴツッ、ゴツッ……

インターネットを開き、小説検索サイトを開こうとした俺の耳に届く足音。俺的には重いハンマーをコンクリートにぶつけるような音に聴こえる。この音は多分アレだ、固い靴底の『ティ バーランド』だろう。女子が圧倒的割合を占めるこの学校でも、ティ バーランドを履く学生は男女問わずたまに見かける。しかし現時刻は十二時十五分。この時間にこの場所が上がってくるのは憲吉と陽ぐらিদらう。二人は現二年生で俺の一年後輩にあたる。憲吉の方はダンスサークルと一緒にpoppin'を踊った。陽は……オープンキャンパスと一緒に案内役をしたぐらいの繋がりだ。因みに陽の靴は『ティンバールランド』ではない。

思った通り、ピロティに顔を出したのは憲吉と陽だった。二人は未だに女だらけの教室で弁当を食べることに抵抗を感じていらしい。そのため、いつも誰もいない場所（主にココ）で弁当を食べ、後は次の講義の時間までベンチに横になって寝る。在学中その姿をよく見かけていた俺は、少し寂しい気分させられたものだった。

振り返った俺と、弁当と教科書を持ってダルそうに歩く憲吉の目が合う。憲吉は髪を短くして、爽やかな印象が臍気ながらも出てい

た。しかし微妙に髭を生やしているので、そのイケメンフェイスとのアンバランスさや在学中の彼の印象（あんまり喋らないクセに、たまに親父ギャクを言うんだ）を思い出すと同時に、俺の顔を見て呆けた表情で立ち止まったのを見た俺は、咄嗟に顔を背けて肩を震わせながら何故か込み上げてくる笑いを堪えた。ま、マズイ。人の顔見て笑うなんて失礼だろ。耐える！ 耐えるんだ俺！ てゆーかなんでこんなに笑えるんだ！？

笑われている当の憲吉は二、三分ほど足を止めたままで、後ろを歩いていた陽に怪訝な顔を向けられていた。

ようやくと我を取り戻した様子の憲吉は、陽と一緒にピロティの隅にあるベンチに座った。弁当を食べながらもこちらをチラチラと盗み見ているのが窺える。陽は憲吉に対しても、俺に対しても、全く気にしていないようだが。俺も笑いを堪え、努めて無視しながらネット小説を読んでいたが、ここまで“チラ見”されると俺も気になってしまう。まさか、さっき笑った事で怒らせてしまったか？ それとも、実は『さき』の知り合いとか……？

勝手に脳内会議を始め、あーでもないこーでもない騒ぐ、頭の中の小さな天使達<sup>オッサン</sup>。やけに声が高い気もするが、そこは俺の妄想と幻聴が噛み合わさってアホな事になっているのだろう。

憲吉

「あの……」

有希

「！」

背後（しかもかなり近く）から声をかけられ、椅子から転げ落ちそうなほどにびっくりした俺は、とりあえず深呼吸して拍動を抑えた。びっくりしたよー。まさかティンバーランドの足音に気付かないとは。

有希

「……………なあに？」

ゆっくりと振り向き、柔らかい微笑を浮かべながらちよつと可愛く（俺基準）言ってみた。まだ胸のドキドキは止まっていないが、一応平常心を保てるくらいには落ち着いた。声をかけられて深呼吸する時点で平常ではない事には気付かない俺。いや、気付かないフリをしていたい。あの驚き方はちよつと恥ずい。何事も無かったかのように振る舞えば、憲吉も流石に合わせてくれるだろう。ああそれと、この胸のドキドキは単にびっくりしたからであって、決して憲吉を相手にときめいた訳ではないからな。

憲吉

「あ……………いや、あの……………」

憲吉が自分から女子に話しかけるところ、初めて見るかもしれない。そして顔をほんのちよつぴり上気させている様子を見るのは、完全に初体験だ。憲吉がもじもじ恥ずかしそうに俺に話しかけてくる。一瞬、男色（その気）があるのかと思ってしまったが、今の俺は『さき』の身体なのだということを出して納得した。逆にこの顔を見て、憲吉のような反応をしない陽の方がおかしいかもしれないなあ。それにしても憲吉、顔紅いぞ。ちよつと悪戯してやろうかな？

有希

「んう？」

軽く首を傾げて見せる。やや俯け気味にすることで『上目遣い』  
という、女の子特有の必殺技を演出し、加えて憲吉の視線が上から  
見下ろす状態であるのを利用して……

ムギユツ。

憲吉

「!!!!!!」

所謂『だっちゅーの』ポーズで憲吉の理性を攻撃した。

胸元を完全にガードした服だったものの、サイズが（胸の辺りが  
特に）小さかった為に腕を前に持つてくるだけで巨乳を強調するこ  
とに成功した。はち切れんばかりの胸元。対称的にアンバランスな  
程小さな身体。殺人的に可愛い口り顔。上目遣い。

俺は、男でありながら女性の最終奥義を会得した。

憲吉はびっくりしたように俺の胸を凝視して「……なんでもない、です……」と呟くと、名残惜しそうに視線を外してフラフラした足取りで陽の元へ戻っていった。ティンバーランドが奏でる足音が五月蠅い。

暫くして弁当を食べ終えた憲吉と陽は、次の講義開始を待たずに立ち上がり、階段に向かっていった。歩きながらチラチラと俺を覗き見る憲吉の顔はさっきよりも紅く、ジーンズの前の方は……ノーコメントだ。

……

……

……… ちょっと待って!？ 硬い布地のジーンズを押し上げるほどの勢いって、あり得ねえだろ! 獣か!？ 憲吉は百獣の王を飼っているのか!？

それらを視界の端に捉えた俺は、憲吉には同級生の彼女がいることを思い出した。ひよっとして、俺は何かとんでもないことをしてしまったのではないだろうか。憲吉のあの下の反応ぶり。間違いない、彼女の事など頭から吹き飛ばされている。告白されたらどうしよう、とかの問題ではない。襲われたらどうしよう……。先程の憲吉の下半身の反応が、滲み出る恐怖を加速させた。

## 08 お母さん

あの後、学校に居てはいけなさと判断せざるを得なかった俺は、の恐怖を拭い去る為にどこかの保育園で子ども達と遊ぶことに決めた。ただ知り合いがいらないところよりは、誰でもいいからいるところに行つた方がいいだろう。不審者扱いされても困る。まあこの容姿で不審者もないだろうが。今の俺は女の子の身体。顔にも全く面影が存在していない。純はすぐに信じしたが、他の奴らはどうだろうか。

男友達がいる保育園には行かない事にする。みんな彼女がいるから、俺が行くことで何か間違いがあつては面倒だ。他の女の子とメーイルするだけで彼女がめっちゃめっちゃ嫉妬するっていう話も聞いている。圭介なんか、職場が女性だらけというだけで彼女が機嫌を悪くしたらしいし（実際にはオバサンだらけだった）。

学校を出た俺はクラスの女子で一番仲が良かった（と俺は思っている）由利が勤めている保育園に向かった。由利は白百合短大でダンスサークルの部長を努め、まあ個人的な問題もあったが、素晴らしい統率力を見せつけてくれた。それでいて派手にノリが良く、ちよつとした妄想少女で、背中に『萌』とでっかくプリントされたTシャツを着たりなんかするような娘だった。でもそのテンションが話し掛けやすい雰囲気を作り、逆に真面目な時は凄く頼りになる女性であり、事実俺は由利が相手ならどんな話でも出来た。……エロい話も出来たし。

園の柵の外から中の様子を窺うと、保育室で由利と子ども達が向かい合って座っているのが見えた。由利は背が低く、だいたい百五十センチ強といったところだろうか。学生時代は茶色かった長い髪を黒く染め、動きやすいようポニーテールにしている。真っ赤なTシャツに高校時代の物と思われる濃い青のトレパン、可愛い動物のアップリケをあしらったピンクのエプロンを身に付けていた。

うん、あんな格好していても滲み出るフェロモンは健在だな。よく見るとそうでもないのに、何故か色っぽく見えてしまう。俺も嘗てはあの色気にやられ、夢中にさせられた時期があった。うん、いい思い出だ。

子ども達はだいたい二歳頃だろう。みんな行儀良くお山座りしている。由利の方は園児用の小さな椅子に腰掛け、絵本を左手に持って口をパクパク動かしていた。時間から考えて、午睡前の絵本の読み聞かせをしているようだ。由利は時々身振り手振りを交えながら子ども達に笑顔で語りかける。子ども達の何人かは時々立ち上がって何かを叫んだり、由利にまわりついたりしていた。

読み聞かせが終わり、由利と他の保育士の女性がゴザを敷き、子ども達を寝かしつける。二〜三歳ともなると、午睡の時間にも眠らない子が出てくる。由利が眠らない子の相手をしていたが、その中の一人がこちらに気づき、指を指して由利に話し掛ける。由利がこちらを向いた。あっ、と口を開けてこちらを見つめ、子ども達に何か声を掛けて立ち上がった。そのまま玄関に向かい、靴を履いて、外に出て、こちらに歩いてきて、俺の目の前で立ち止まり、じつと俺の目を見つめ……？

由利

「こんにちはあふたがみ二神さん。今日早かったんですね。もう学校終わっ  
たんですかあ？」

有希

「……………へ？」

予想<sup>ガイ</sup>GUY。

事態がよく飲み込めなかった俺を由利は園の中へと引つ張り込み、  
「母の日が近いので、皆でお絵描きをしたんですよ」と言いなが  
ら一枚の画用紙を渡してきた。クレパスで色とりどりに何かを描か  
れている。丸やら四角やら、ごちゃごちゃすぎてわけわからん。  
被写体を言い当てられるような人は存在しないだろうと、一目で理  
解出来る。ただ画用紙の右下には水色のクレパスで「ふたがみさく  
や」と、名前だけは綺麗に書かれてあった。一歳児クラスでお絵描  
き遊びでもしたのだろうか。でも、「ふたがみ」っていう苗字は「  
さき」と……………同じ？」

由利

「朔耶ちゃんが描いたんですよ」

有希

「……………」

朔耶って誰だ？ 『さき』の妹か従姉妹かだろうか？ いや待て、  
男の子である可能性も……………とにかく『さき』の親類なのは、この応  
対からして間違いないだろう。だとしたらここではなマークを出

すのはマズイ。一応話を合わせておこう。

有希

「あ、ああ、そうなんですか。朔耶が……」

由利

「はい。朔耶ちゃん、お母さんに褒めてもらうんだって、一生懸命描いてたそうですよ」

由利が眩い笑顔を放つ。嬉しくて堪らないといった様子だ。何が嬉しいのかは解らないが。

朔耶『ちゃん』と由利は言ったから、恐らくは女の子なのだろう。“お母さんに褒めてもらう”か……。やっぱり就学前の子どもは可愛い。可愛すぎる。普段は感情の起伏に乏しい俺が、子ども達の前では自然と笑みが溢れる。はあ、早く俺も残った単位を履修して、保育士になりたい。

由利

「二神さん、今日はどうしますう？ このまま朔耶ちゃん連れてお帰りになりますかあ？」

有希

「……え」

……連れて帰るだと？ 迎えに来たと思われてるのか？ いやいや、俺朔耶の家とか知らないし、それ以前に自分の家（おち）にすら辿り着けない。まあ、（『さき』の）家に帰るつもりは微塵も無いが。しかし、朔耶は無事に家に届けなくてはならないだろう。流石に子どもを連れて純の家に泊まるのは無理がある。てゆーかそんなことしたら俺、誘拐犯になっちまうだろ。由利は『さき』の事をよく見知ってる様子だし、この反応を見る限り、『さき』が毎日朔耶を迎え

に来ているみたいだ。今更逃げるといふ選択肢は無い、か……。

有希

「あ、ええ。今日は早めに……」

由利

「そうですね。じゃあ、朔耶ちゃんを呼んできますねえ」

そう言つて階段を上つていく由利。俺は職員室の前で由利を待ちながら起きている子ども達に手を振つたり、すれ違ふ先生方に挨拶をしたりした。そうやって待つこと八分、漸く由利が下りてきた。

由利

「お待ちせしましたあ」

現れた由利は左手に小さな手を握つていた。一步一步ゆっくり、頑張つて段を踏むその足は細く真っ白い。真っ直ぐに伸びた綺麗な赤髪は、軽やかに風に靡いている。小さなリュックがとても大きく見えるその身体は年少のようにも見えるが、顔つきは大人のそれに近い。凜とした表情の小さな美少女がそこにいた。

朔耶

「お母さん！」

階段を下りきつた途端に由利の手を放し、へにゃつと表情を崩して俺に向かつて突進してくる朔耶。小さな足で懸命に走るその姿はとても微笑ましいのだが、予想だにしないほどの可愛らしい顔立ちに面食らつてもいるのだが、それ以上に俺は今自分の耳を疑いたい。そして俺の“ムギユツ”に興奮した憲吉の×××による×××を恐れ、その恐怖を払拭するためにこの保育園で遊ぶことを選んだ二十

分前の自分を派手に呪い殺してやりたい。

疾駆の勢いからそのまま全身で俺にぶつかってくる朔耶。頑張っ  
て走りすぎて、振り乱した髪の毛をいくらか食べてしまっている辺  
りにはご愛敬だ。

『お母さん』と呼ばれた事は、とてもとても衝撃的だった。『さ  
き』に娘？ 嘘だ、幻聴だ。さつき見たバイクの免許証には、平成  
五年生まれと書いてあった。今は平成二十一年だから、『さき』の  
年齢は十六歳で間違いないのだろう。なら、朔耶は一体何歳なんだ  
？ もし一歳児なら、中二で身籠った計算になるが……。

朔耶

「お母さんっ！ 朔耶ね、お絵描きでせんせえに褒められたんだよ  
っ」

宝石のように輝く瞳が眩しい。しかし、『お母さん』って呼ばれ  
るのはちよつとなあ……。

有希

「ああ、これでしょ？ 上手に描けたね朔耶」

さつき渡された画用紙を差し出しながら言う。

朔耶

「そうこれ。この絵ね、遠くから見たらスゴいんだよ！」

有希

「……遠くから？」

画用紙を由利に渡し、朔耶と一緒に絵から離れる。あの丸やら四

角やらに何の意味があるのだろうかと思いつつ振り返ってみると……。

有希

「……………!」

涙が出そうになった。

有希

「さあ、お家はどっちでしょう?」

朔耶

「あつちだよ」

『さき』と朔耶の家を見付けるために、手っ取り早く出した結論がこれだった。俺が解るわけ無いから、朔耶に聴けばいい。毎日一緒に帰っているなら道順ぐらい覚えていたろう。もう六歳なのだから、それぐらい当然だ。

そう、朔耶はもう六歳なのだという。来年の春にはランドセルを背負って小学校へ通うことになる。見た目は二、三歳だが、知的発達には問題ないようだし（性格が少し幼いだけだ）、あの絵の才能は既に恐ろしいほどだった。自分で手にとって見ると、ただの凶形の乱闘のようなごみごみした絵。しかし遠くに離れて見ると、驚愕の光景を目の当たりにする。それは『さき』の顔だった。それも、写真のように正確なパスで。少し前にコマーシャルでやっていた、

写真を沢山並べてイチー選手の顔を描いたやつとか、あんな感じを想像するのいいと思う。とても就学前の子どもに真似できる芸当ではない。大人でも無理だ。

有希

「あつち？　ほんとに〜？」

朔耶

「ほんとだもん！　朔耶、ちゃんと道知ってるもんっ」

俺の誘導にのせられて、朔耶は道順を事細かに説明する。その道筋を頭の中で辿っていった俺は、またしても驚かされてしまった。『さき』の家は、結構な金持ちだ。場所は一等地、敷地は一般的な高校の運動場ぐらいの広さだ。造りは日本家屋で、二階建て。ガレージには高級車が四台並んでいる。俺の中学からの親友が近くに住んでおり、付近を通る度に『この家、火事とか起きたらやべーな』とか言い合っていた。木造だし、庭園も素晴らしく燃えそうな植物がいっぱいなのだから。それと、どっかの大企業の社長だという話も聞いたことがあるな。

朔耶

「ねえお母さん。そういえば、なんで今日は違うバイクなの？」

昨日までは原付だったからな。座り心地に、究極の違和感を覚えているのだろう。と同時に、俺も違和感を覚えた。『さき』が乗っていた原付は『Let's』だった。Let'sなんて、もう部品も売ってないぐらい古い型だぞ？　燃費も相当酷い。金持ちならもつといいもんに乗れよ。

有希

「ん〜、お友達から借りてきたの」

朔耶

「そうなんだ〜」

有希

「そうなの」

実際には知らない人なのだが。

朔耶

「お母さん、日曜日の母の日は朔耶がお料理するっ」

有希

「!?!」

そうか、今度の日曜日、五月十日は母の日か……でも朔耶、料理出来るのか？

有希

「朔耶……お料理大丈夫？ お母さん手伝おっか？」

保育園児に料理をさせるといふのは……不安過ぎる。殺人兵器作ったりしないだろうな。しかし、自然に『お母さん』と言えるあたり、俺もなかなか順応性が高い。

朔耶

「ダメ〜っ！ 母の日だから、お母さんはゆっくりしてて！」

有希

「……そう？」

……なんか、凄くいい子だな。六歳……六歳という事は、つまり『さき』が九歳の頃に身籠ったという事で、小学三年生にあたる。その時期の女の子は当然生理などきていない。常識的に言えば、ま

だまだ子どもを産める身体ではないはずだ。だが、世界は広い。ギネスブック（それもかなり前の。最近のギネスには載っていない）を開いてみると、史上最年少で子どもを産んだのは“五歳の女の子”なのだ。名前も、妊娠時の写真も載っている。翌年には小学校に入学する年頃の女の子が、極度の栄養失調とは違う理由でお腹を大きくしている。年の差が五歳という事は、母親と子どもが一緒に小学校に通うというなんとも珍妙な光景が見られるわけだ。……世界は、広い。

朔耶

「おいしいおいしいお料理作るからねっ。」

有希

「……うん。頑張ってるね」

不安だけど、ちょっとだけ楽しみだな……。

……？ そういえば、

有希

「そういえば朔耶、昨日はどうしてたの？ お母さん居なかったけど」

子どもがいると知ってれば、意地でも家を探したのに。

朔耶

「字のお勉強してたの」

有希

「一人で？」

朔耶

「うんっ」

偉いな。でも、疑問はそれだけじゃないのだよ、朔耶。

有希

「ご飯は？」

朔耶

「じは〜どが作ってくれたよっ」

有希

「……ジハード？」

え？ ジハードって、アラビア語で『奮闘する』とか『努力する』とか、そういう意味のジハード？ それとも『聖戦』？ ジハードが作ってくれたって、まるで“ジハード”が人の名前みたいじゃないか。

朔耶

「じは〜どは、お母さんが帰ってこないときによくご飯作りに来てくれるんだよ」

有希

「……そうなんだ」

……やっぱり人っぽい。ジハードって、何者？ なんか名前からすでにただ者じゃないよね。

有希

「ジハードは、今日も来るのかな？」

何故『さき』の両親や兄弟ではなくて、“ジハード”がわざわざ来てご飯を作っていたのか。っていうか『さき』……今の朔耶の口ぶりだと、無断外泊が日常茶飯事っぽいな。自分の子どもほった

らかして帰ってこないってのはどういっつ見だよ……。

朔耶

「じは〜ど？ 来てって言ったら来るけど、お母さんがいるときは来ないって言ってたよ」

有希

「……どうして？」

さっぱり訳がわからない。『ジハード』……本当に何者なのだろうか。

朔耶

「着いた〜！」

遂に『さき』と朔耶の家に到着した。門の横にある駐車場にバイクを停めて（メルセデスとBMWが停まっていた）朔耶を下ろし、一緒に門を潜る。外から見ても凄いものだったが、中に入ると言葉を失ってしまう。広すぎる庭園。門を抜けたらテニスコートが三面入る広大な庭がある家つてのは……この感動は言葉に出来ない。『さき』は金持ちのお嬢様だったのか……。これはますますヤバイな。どうやって振る舞えばいいかわかんねえし。でも朔耶の反応を見る限り、これで問題ないのかな？

二人で真っ白い石畳の上を歩く。広い庭を朔耶の歩幅で縦断し、玄關の前で立ち止まる。ここに一步足を踏み入れれば二度と帰ってこれなくなるという訳ではないが、気分的にはそれに近いものがある。

る。俺の中の何か壊れそうというか、二度と男に戻れなくなりそうというか……。どっちにしても良い結果は無さそうだ。

朔耶

「お母さん……？」

振り向いて不安げな顔を向ける朔耶。娘に心配かける母親というのは、ちよつと戴けないな。せめて『さき』が起きるまでの間は、良いお母さんでいてやるか。

有希

「うん、大丈夫だよ朔耶」

朔耶を安心させるように微笑む。俺は覚悟を決め、引き戸に手をかけた。

グイッ

……

アレッ？ 開かないぞ？

グッ、グッ

……やっぱり開かない。鍵がかかっているのかな？

朔耶

「お母さん、このドアはこうやって開けるんだよっ」

ガチャ。

有希

「……………」

朔耶は見た目サザエさん家の玄関のような引き戸にしか見えない玄関扉を、まるで蝶番が付いた開き戸の如く手前に引っ張って開けた。なんとという騙し扉！ なんとという仕打ち！ 誰を騙すために作ったんだ！ 誰が考えたんだ！

俺は悔しさに心の中で毒づきながら、それでも表情は変えずに前を向く。挫けそうになる心を叱咤して、《負けない！》と胸の内です強く叫びながら。

有希・朔耶

「「ただいま」！」「」

有希

「行ってきまーす！ー！」

Bダツシユで玄関を飛び出し、三面テニスコート並みの庭を横切つて、朔耶を抱えたまま家を出る。地面を蹴る度に爆乳がぶるんぶるん暴れて鬱陶しいが、この際なりふり構っちゃられない。門を抜けて二十メートル走った辺りで息が切れ、朔耶を下ろして息を整える。

有希

「ハア、ハア、……酷い目に、あつたね。ハア」

朔耶

「……うん」

俺もそうだろうが、朔耶も若干顔が青ざめている。いくら子どもでもやっぱりあれは怖かったか。まあ無理もない。お家に帰ったらいきなり猫耳&メイド服着た知らない女の人が

「お帰りなさいませ、ご主人様、お嬢様っ」とか言ってくれば、誰だつてドン引きだし。日本様式の家を超ミニスカゴシックなメイドがいる時点で既にツッコミどころなのに、その猫耳メイドを指差して俺の顔を見つめ、首を傾げながら

「……誰？」

という朔耶の言葉を聞いて、俺はもう何も言えなかった。

そのメイドは赤みを帯びたショートヘアで目が凄く大きくて、端正な顔立ちのまるでトップアイドルのような可愛さだった。俺達に挨拶するなり、呆然とする俺と朔耶を引っ張り込んでいきなり寝室に向かい、俺だけがベッドに押し倒された。即座にマウントポジションを取られる。まるで持久走大会を終えたばかりのように息が荒い猫耳メイド。その顔は興奮を示す赤に染まり（危険を示す赤でもある）、その瞳は獲物を見つけた獣のよう。

何かなんだか判らず成されるがままの俺の服が一枚、魔法の如く

見事な程の素早さで脱がされた。下からは真っ白い肌と藍色の下着、その下着に確りと守られた巨大な二つのマシユマロが顔を出す。この時点になって、活動を停止していた俺の頭も、漸く貞操の危機を感じて、脳内サイレンが鳴り響く。しかし、俺が猫耳メイドを押し退けようと手を出す前に、猫耳メイドは俺の（……間違えた。『さき』の）ブラの中に無理矢理手を突っ込み、乱暴に揉みしだき始めた！ 驚掴まれてもまだまだ掌からはみ出る、真っ白で弾力性MAXなミラクル豊乳に猫耳メイドってゆーかエロメイドの細く力強い指がえげつなくそして大胆に食い込んで痛い痛いっ！ なんだこのエロ猫耳！ 俺の（『さき』の）おっぱいを握撃で破裂させる気か！？

そしてエロ猫耳メイドは巨乳を驚掴んだ両手を波打つようににもにゆもにゆと動かし始め、更に両手の中指の腹で乳房の中心に立つ突起を軽く撫でた。

有希

「っっ！ はあっっっ！！」

電気が走った、という在り来たりな比喻表現は、決して誇張でも虚偽でもなかった事をこの身で実感した。そしていくらか女の身体になつたとはいえ、男である俺がこんなにも悩ましい喘ぎ声を他人に聴かせる事になるうとは！ 乳房に立つ桃色の奴にエロメイドの指が触れた途端、まさに電気が身体中の神経を駆け巡った。それと同時にジスキネジアの発作の如く四肢が内転し、恐らく快感であろうこの未知の感覚に無意識に身体が耐えようとする。今まで感じた事の無い、例えようの無い感覚だった。

有希

「あっ！ はあっ！ ひゃっ！ くぶうっ！

」

……てゆーかこの構図はヤバイ！ 変態猫耳エロに超過激な性的スキンシップを受ける女子高生母と、目の前でその光景を半強制的に見せられている修学前の娘。よく見ると朔耶は微かに振るえている。俺に対してもそうだが、これは完全に朔耶に対しての性的虐待になり得る。精神的に未だ不安定な子どもには、十八歳以下閲覧禁止的な行為を“見せる”だけでも虐待なのだ。保育士を目指す子ども大好きな俺としては、これは絶対に見過ごせない。見過ごすべきではない。せめて朔耶がいない所でやってくれ！！

……いや、今のは朔耶がいなければやっていいとか抵抗しないとか寧ろ積極的とか、そういう意味では決してないよ？ ホントだよ？

身体を流れた電流によって真っ白になりかけた頭で瞬時にそんなことを考えながら、微弱になった理性で抵抗しようとしたその時、エロ猫耳の左手が妙な動きを見せた。手を完全にブラから抜き出し、肌を擦るように徐々に下へ下へと動いていく。俺は察した。このままでは男として終わってしまう、と。咄嗟に猫耳メイドの腹に蹴りを入れて朔耶の腕と脱がされた服をひっ掴み、片手で器用に服を着ながら急いで逃げ出した。

呼吸が落ち着いてきたところで、これからどうするべきか考える。あんな痛いエロ猫耳がいる家には居たくない。ていうかあのエロ猫耳は誰なんだ！ 朔耶も知らないって事は不法侵入か、親が雇ったか……。出来ればこのまま純の家に逃げたい所だが、リュックを背

負ったままの朔耶を見てそれは無理だということに気付いた。明日は平日。朝早く起きて朔耶を保育園に連れていかなければならない。早起きは人の苦手なのに……。まあ、これはしょうがないだろう。これは俺と『さき』の問題であって、朔耶は関係ない。俺の都合で振り回す訳にはいかないからな。朔耶は通常通り保育園に連れていく。『さき』が目覚めるまでの辛抱だ。……。あの痛いメイドの元に戻るのには物凄く怖いし嫌なのだが、どっちにしても結局一度は戻らなければならない。食事は外でも出来るが、せめて着替えくらいは取っておきたい。

有希

「朔耶、一回だけ、戻ろっか」

あのエロに見つからないように。

朔耶

「……………（ガタガタガタ）」

伝説の傭兵ソ　ツドスネ　クに成りきって潜入しようかと決意し、段ボールを何処で調達しようかと考えながら朔耶にそう告げると、俺の背後に視線を向けてガタガタと震える朔耶。そんなにあのメイドが怖いのかと苦笑しながら（俺も相当怖いが）後ろを振り返る。

「お帰りなさいませ、ご主人様。……………ハアハア」

有希

「……………（ガタガタガタ）」

俺は今日、マジで男としての人生を終えるかもしれませぬ。

「アリスと申します。宜しくお願い致します」

命の危機すら感じた俺だったが、猫耳メイドは今度は意外にもまっとうな対応をした。リビングには既にお茶の用意がされており、二つのカップにミルクティーが注がれる。最初から準備されていたのだろうか？ さつき無理矢理引っ張り込まれた時には気付かなかったが。

アリス

「どうぞ」

有希・朔耶

「……………」

婉美な微笑みを魅せるアリス。その様は巧みに獲物を惹き寄せ、男女問わず虜にしてしまう淫魔サキユバスのようである。先程襲われた俺としては、そう簡単にカップに口をつける訳にはいかない。何が入ってるか解ったもんじゃないからな。そしてカップに口をつけられない最大の理由は、

有希

「あの……………ほんと申し訳ないんだけど私、ミルクティーは苦手で……………」

紅茶にミルクを入れる発想が信じられない。別にミルク自体は嫌いじゃないけど。うん、軽くツッコミどころが違う気がするが、そこは今はほっとけ。

アリス

「あつ！ 申し訳ございませんでした！ すぐに煎れ直します！」

パタパタとキッチンに引っ込んでいき、湯を沸かし始める。自分の家じゃないのに手際がとて面白いあたり、何故か恐怖すら覚えてしまう。ふと、キッチンの手前に何かが落ちているのに気付いた。どうやらアリスが落とした物らしい。立ち上がってそれを拾い上げる。なんかの錠剤だ。『ハルシオン』と書いてある……。

有希

「朔耶……やっぱり逃げようか」

朔耶

「……うん」

俺は朔耶を連れてこっそり自分達の部屋を探し、適当に服を取ってそのまま逃げ出した。

有希

「危なかったね……」

『ハルシオン』は超短時間作用型の睡眠薬だ。恐らくはアリスが俺達を眠らせようとして所持していたのだろう。やはりあのミルクティー、飲まなくて正解だった。なんなんだあの変態猫耳エロ百合メイドは！？ 何が目的である家に……『さき』の身体か？

俺は朔耶をシートに乗せてバイクに跨がり、家から十分に離れた

所で停車した。直ぐ様純に電話する。

純

「もしもし」

有希

「純！ 今からお前ん家行って良い？」

純

「は？ 今から？ 俺まだ学校だけど」

有希

「それでもいい！ とにかく逃げたいから！」

純

「何から逃げるの！？ っていつかお前誰なんだ！？」

あ………そういえば『さき』の携帯の電話番号教えてなかったんだ。

有希

「俺だよ俺！ 解るだろ！？」

純

「………有希か………」

有希

「ほほう、よく解ったな。純にしては鋭いじゃないか」

………コイツおれおれ詐欺に引つかかるタイプかもしれん。そう簡単に名前を言っちゃ駄目だぞ。

純

「いや、一人称に“俺”を使う女の子って言ったらお前だけだし」

考えてみたらそうだよな。………待てよ？ 純はもう完全に俺を女の子として認識しているようだ。………ある意味危険が増えたかもし

れない。行くのやめようか？ とか考えてみたりする。

有希

「うん。まあそういうわけで、とにかく逃げなければならぬのだよ」

命の限りに。

純

「……別に良いけどさ。今家に蛭子（純の母）（しかいないよ）」

あ、それちょっと不安。

有希

「俺は気にしないから。とにかく行っていいんだよね？」

……背に腹は代えられんしな。

純

「ああ。俺は学校終わったらそのまま仕事だから、先に寝てていいぜ」

有希

「いや、起きとくよ。話もあるし。じゃね」

純

「おう。後でな」

うむ、話の解る奴で助かる。

俺はそのままバイパスをぶっ飛ばし（二十分かかる距離を七分で）、朔耶の歓声を聞きながら純の家に辿り着いた。蛭子さん（純のお母さん）は何も訊かずに朔耶共々歓迎してくれ、おやつにしようと言いついてお茶と蒟蒻ゼリーをテーブルに置いた。「ダイエットには蒟蒻よっ！」とか叫びながら。俺的にはゼリーと一緒にお茶は飲みたくなかったが。朔耶も流石になんの脈絡もない上にテンション高すぎる歓迎ムードに戸惑ったのか、蛭子さんに人見知りして俺の膝の上で小さくなっていた。

蛭子さん

「あら、朔耶ちゃん静かにしててお行儀がいいのね」

……これは行儀の問題ではなく、ただ萎縮してしまっているだけだ。人見知りしている様を行儀が良いと捉える蛭子さんは、その思考回路の奇天烈さが人間の理解力の遥か上をいくそうだ（純談）。こんなもんは片鱗ですらない。短大時代に弁当を食べながら純によく蛭子さんの話を聞いたのだが、その度にスゴイ勢いで吹き出してしまい、前の席に座る女の子に散々迷惑をかけてしまったものだ。……一度、俺が吹き出したご飯粒を後頭部に付けたまま授業を受けている女の子を見て、腹筋崩壊で死にそうになった&道連れに大勢を殺しそうになった事もある。あれは本当に悪いことをした。本人にも、彼女の後ろに座る人達にも。笑い過ぎで授業が始まらなかったもんな。

暫く蛭子さんと談笑に耽っていたのだが、膝の上でずっと縮こまったままの朔耶は話を振っても恥ずかしそうに口をつぐむばかり。だんだん可哀想になってきたため、会話を切り上げて朔耶と一緒に

二階に上がった。

純の部屋は今朝家を出た時のまま、閉め忘れた窓から風が入り込んでカーテンを揺らしている。昨日の掃除で床は一応は見られるようになったが、部屋の隅にはまだ段ボール箱が積み上がっており、片付けた筈のベッドの上にも教科書が乱暴に投げ置かれていた。こんなところに朔耶を置いておくことは絶対に出来ない！……って、連れてきたのは俺なんだが。とりあえずベッドの上の教科書はカラーボックスに入りきらないため、まとめてベッド脇のカラーボックスの上に置き、朔耶を座らせてから俺は昨日よりも更に張り切って掃除を始めた。

有希

「終わったぁ……」

段ボールも無くなり、クローゼットやベッドの下は朔耶に見られないように全て綺麗にし、要らないもの（主に男性雑誌等）は粗方処分した。うん、これなら大丈夫。純が帰ってきたらびっくりするだろうな（主に男性雑誌等の有無に対して）。

朔耶

「お母さん、お疲れさま」  
有希

「うん、ありがとう」

天使も形無しの可愛すぎる笑顔で労ってくれる朔耶。思わず顔が緩んでしまうのは、これはもう仕方がないことだろう。ついでに女の子口調や女の子っぽい仕草をしてしまうのも、これまた仕方がないことなのだ。うん、仕方ない……仕方ないよね？

俺もベッドに上り、後ろから朔耶を抱き締める。自分の子どもではないのに、この一時間強で既に情が移ってしまっているようだ。柔らかい肌の感触と温かな体温を独り占めしながら、昨日今日ですっかり変わってしまった己の人生に苦笑する。昨日の十八時までには保育士養成学校を卒業した只のフリーターだったのに、今は六歳の娘をもつヤンママ女子高生だ。……ヤンママって、また古い表現だな。まあいい、今後元に戻る、かどうか、精一杯やっ、て……あれ……？ 俺、どう、し……た……？

朔耶

「お母さん？ ……お母さん！」

景色から光が無くなっていく。目の前にいるはずの朔耶の姿が見えない。以前も経験した灰色の砂嵐が視界を完全に覆い尽くし、朔耶の叫び声を遠く聞きながら俺は意識を手放した。

09 夢(貳)

ちびっ娘

「おかえりなさい」

まただ、またあの夢を見ている。真つ黒な空間でベッドに横になっ  
ている。自分の身体を見下ろすとやはり男だった頃の肉体がそこ  
にあり、髪の毛は長くなかった。気を失う瞬間まで一緒にいた筈の  
朔耶の姿も見当たらない。いるのは俺とちびっ娘、そして双子の片  
方だけだった。

有希

「……あと二人いたんじゃないっけ」

昨日の夢では双子はちゃんと二人いたし、中学生くらいの無表情  
の女の子もいた筈だ。

ちびっ娘

「愛は今外に出てるわ。蓮華はついさっき半分は珊瑚と、もう半分  
は貴方と一緒にになったの」

有希

「……一緒に？」

一緒にって、どういう意味だろう？ 半分？ それに名前だけ出  
されても、誰のことかわからない。……でも、どこかで聞いたこ  
とのあるような名前だな。愛、珊瑚、蓮華……いつ聞いたんだっけ  
な？

ちびっ娘

「私の名前は光<sup>あき</sup>。このシステムの保護者よ。よろしくね」  
有希

「……システムの……保護者？」

何の事だかさっぱりわからない。でもやっぱり聞いたことある名前だ。っていうか可愛い。

光

「うふふ、わからないって顔してるね。りかに聞けばたぶん教えてくれるわよ」

……君の微笑<sup>うらやま</sup>にノックアウト寸前。

光

「……聴いてる？」

有希

「……え？ あ、ごめん聴いてなかった」

光

「もっつ、しゃんとしてよね」

頬を膨らませてプンプンするちびっ娘<sup>おんな</sup>光。もう……それすらも可愛い。蕩れ〜。

光

「……もっいいいよ。行ってらっしゃい」

有希

「……行ってらっしゃい？」

話を聞かずにメロメロモードに入りかけていた俺に流石に怒ったのか、背中を向けてそう言う光。隣に立つ双子の片方はそのまま動

かなかったが、ふと目が合うと、俺に手を振って「ばいばい」と言った。直後、またあの灰色の砂嵐が視界を覆う。ああ、これで今日の夢は終わりかと、俺はそのまま横になって目を閉じた。

有希

「……うあ、よく寝たよ」

ばっちり目を覚まし、大きく欠伸をしながら言う。目の前には心配そうな顔の朔耶と、部屋の入口からなにやら不思議そうに俺の顔を覗き込む純がいた。

有希

「んん、おはよー」

俺は純の部屋にいた。昨日と比べてすっかり綺麗になった部屋。段ボール（と男性雑誌等）が無くなり、ギターはケースに入れて二本とも立て掛けられ、カーテンはまだ少し汚いままだったが、少しは過ごしやすい空間になっただろう。

さて、起きてベッドを降りようと思ったが、どういつ訳か俺の上半身は既に地面に対して垂直に起き上がっていた。背中が壁に凭れている。……あれあれ？ なんだこれ、俺はベッドに座った体勢のままですつと眠っていたのか？ 確か俺が朔耶を連れて純の部屋に上がったきたのは十四時半頃だったと記憶している。それから十分は部屋の掃除をし、その後ベッドで後ろから朔耶を抱き締めた辺りで記憶が途切れている。いつの間に眠っていたのだろうか？ 純の仕事が終わるのはだいたい夜中の零時から一時。つまり、十五時から少なくとも九時間以上は眠っていた事になる……？

純

「……大丈夫か？」

若干不安げな響きを伴った純の声。

有希

「大丈夫かって……何が？」

なんだ、どうした？ 俺が寝ている間に何かあったのか？

純

「……お前は、有希なんだよな？」

恐る恐るといった様子で尋ねてくる純。俺は思わず溜め息をついた。なんで今更また疑うんだ？

有希

「はあく、だからほんとに有希だつてば。いい加減にしないと柚美ちゃんに、純がまだ煙草止めてないって事言っちゃうよ？」

純

「俺が悪かった」

直ぐ様土下座する純。そしていきなり土下座した純にびっくりする朔耶。純は元カノの柚美ちゃんとは未だに仲が良く、柚美ちゃんには付き合っていた頃から「もう煙草は止めた」と宣言していたという。

有希

「解ればいいよ。次は無いと思ってね。それで、大丈夫かって、何の話？」

純

「え？ あ、いや、別に何でもないけど」

やはり不思議そうな顔をする純。……ん、言えないとか言いたくないとかっていうよりは、どうやって伝えたらいいかわからないって感じだな。それとも何か企んでいるのか？

有希

「ふん。あつそ、じゃあいいよ別に純は教えてくれなくても。ねえ朔耶、何があったのか教えてくれない？」

意地悪な純には何も期待していない。朔耶なら見たことを素直に話してくれるだろう。それを期待したのだが、返ってきた答えは予想を裏切った。

朔耶

「お母さん、寝る前とちょっとだけ変わったね」

朔耶の顔からは心配そうな表情は消えたが、代わりに微笑と共によくわからない事を言い出した。昨日と今日で中身が入れ替わってしまっているのだから、まずはそっちが先だろう。そんなところは特に気にならないっていうか、寝る前と今では何も変わってないと思うのだが。現に俺は俺であって、他の誰でもないぞ？ まあ、見た目は女子高生だが。

純

「ああ、それは俺も思った。確かに今朝とは何かが違うよな」

お前もか。

有希

「変わったって……どの辺が？」

朔耶

「んとね、もっつと女の子っぱくなくなった！」

純

「そうそう。あと、ちよつとだけ若くなったな。幼くなったっていうか、可愛くなったっていうか。要するにフェロモンが増大したって事だな」

あ、ヤバい。俺今たぶん顔が赤いかもしれない。昔は女の子になりたいとか、生まれ変わるなら女の子がいいとか思ってたからな。正に今念願叶ってしまったっていう訳だが、こつても可愛いつか女の子らしいとか可愛いつか、いろいろ可愛いつか言われると純粹に嬉しかったりする。同時に恥ずかしくもあるが。さりげなく顔に手を当てて赤みを誤魔化す。熱い。頬が物凄いつ熱を発している。これはヤバい。頭は冷静に動いていると思うのだが、身体の反応は実に正直だ。だんだん耳まで熱くなつてきたし、これはもう隠しきれないな。

朔耶

「ああ、お母さん赤くなつてる！」

有希

「……！ちよつと、朔耶っ！」

あうっ！指摘されると更に恥ずかしくなつてきた！

純

「……お前、本当の本当に有希か??」

赤くなつた俺を見てまた疑いだした純。無理もない。俺だつて信じたくないぐらいだ。俺は以前からこうだつただろうか？羞恥に赤面する場面なんて、どれだけ記憶を掘り起こしても見つかりくない。つていうかフェロモンつて……魅力的な異性を身近で感じた

時に出るホルモンじゃないのか？　なんか間違ってるんじゃないか？

朔耶

「お母さん可愛い〜！」

純

「お母さん可愛い〜」

有希

「もっ……私は誰ですか……」

大変だ……。徐々に女の子に近づいていってるような気がする……。

純

「まさか娘が居たとはな」

有希

「うん……俺もびっくりしたよ」

あの後少し落ち着くと、朔耶は徐々にうとうとし始め、俺の腕に抱かれながら寝てしまった。時間は深夜の一時十九分。まあお子様が活動する時間帯じゃないからな。俺に身体を預けて無警戒に寝ている朔耶は、本当に可愛かった。赤く輝く真っ直ぐな髪が俺の手をくすぐる。首元に吹き掛けられる静かな寝息、俺の右手を軽くキュッと握る小さな左手、時々口から漏れる「おかあさん……」という寝言が例えようもなく愛らしかった。ついつい抱き締めてしまうのはやはりしょうがないのだ。うん、しょうがないよこれは。朔耶が可愛いからいけないんだ。

朔耶が本当に『さき』の娘であることを肯定すると、純も流石に驚きを隠すことは出来なかった。

純

「しかし、十歳で出産とかあり得ないだろ」

有希

「そうでもないよ。実際に五歳で出産した女性の記録もあるし」

純

「うそっ!?!」

有希

「ホント」

これはマジなのだ。リアルで存在する情報である。インターネットで探せばすぐ見つかる。妊娠時の写真も公開されている。さあ、みんなもインターネットで検索してみよう！ キーワードは『リナ・メディナ』。

純

「はあく、世の中ってわかんねえもんだな」

有希

「今の俺なんか特にね」

心底驚いた、といった表情をしながらも、口調はそうでもなさそうに聴こえる。コイツはこういう奴だ。最初に派手な反応したら、後は手抜きだ。余程興味を引く内容でなければ、隙をみて下ネタに持っていこうとする。

純

「……………五歳でも、気持ちいいのかな」

有希

「ぶっ殺すぞ」

純

「……ああ、うん、ごめん……」

女子高生の身体を持つ二十一歳に叱られて素直に謝る二十路前の男。コイツはこういう奴だ。

純

「……有希は今、女の身体だな」

有希

「ん？ ああ、そうだな」

純

「……触ったら気持ちい」

有希

「ぶっ殺すぞおっ！」

純

「……ホントごめん……」

……コイツは、こういう奴だ……。

純

「まあ変な茶々入ったけど、確かに他人と身体が入れ替わるってのは、よく考えてみたらすごい事だよな」

有希

「だよなー」

茶々入れたのは純の方だったが、いちいち突っ込むのが面倒くさくなった俺は敢えてスルーした。突っ込んで欲しそうな顔を向ける

純に、完全無視を決め込む俺。思えば俺達っていつもそうだな。さりげなく下ネタでボケる純に、下ネタ以外の部分で会話を繋げる俺。さつきみたいに犯罪ちつくな発言は流石にアレだが、基本は放置プレイだし、純も俺がボケを放置する事に対しては何の突っ込みもせずに会話を続ける。

純

「入れ替わる時の事は覚えてないのか？」

有希

「言っただろ、事故って気絶してたって。それにバイト終わった後の記憶が、何故か綺麗に無くなってるしさ」

ホント、不思議な程に無くなってる。水曜日にバイトが終わって事故るまでの間、俺はこの世に存在してなかったのではないかと思えるくらいに、記憶の欠片すら無い。

純

「ますます暗礁に乗り上げたな。未だに疑いたくなるぜ。本当は夢オチとかドツキリとかじゃないよな？」

有希

「いや、もう二日目だから夢は無いだろうし、ドツキリって誰も何も得しないよ？」

純

「……だよなー」

となればやはり事実として受け止めるしか無い訳だが、まったく不可思議な現象だ。他人の体と入れ替わるなんて、映画や小説の世界でしか見たことがない。現実には起こり得ない完全な非日常だ。どうすれば元に戻るのか、さっぱりわからない。

純

「そういえば、お前の身体は今病院に入院してるんだっただな」

有希

「あ、うん。今朝行ってきた。右目だけ怪我してて、あとは何ともなかったみたい」

それは外見だけの話であり、検査如何ではいきなり地獄に突き落とされる可能性もある。生命維持装置が無かったから、脳死とかはないだろうが。臓器が傷ついている風でもなかったし。神経内科医が怪我人に何の検査をするんだろう？

純

「ふーん……ん？ 目に怪我？ って大丈夫なのかそれ！」

有希

「おおっ？ いきなりどうした？」

急に声を荒らげた純。なんだ？ 何か気になるところでも？

純

「失明とかしてないだろうな！ 洒落にならんぞお前！」

め、珍しく動揺してるな。そんなに俺の目が心配か？ 純って、この辺に愛を感じるんだよな。歳はかなり離れてるけど、大好きだ。お前に出会えて、本当に良かったといつも思うよ。……本当に下ネタがなければいいのに。

有希

「落ち着けて。別に俺の場合、右目が無くなっただくらいで日常生活に支障はでないよ？」

俺の右目はだいぶ弱ってきている。網膜色素変性症という病気であり、視力は未だに1.5を維持しているが、夜盲（夜になると視界が悪くなる）の症状に加えて徐々に視界が狭まってきている。度々激痛に襲われるし、夜になると右目はほとんど見えなくなる。中途失明の代表的な病気であり、そのうち見えなくなるかもしれないことは、もうだいぶ前から覚悟している。俺にとっては今更気にする事ではない。

純

「そういう問題じゃな」

有希

「しっ！ 静かにして。朔耶が起きるから……」

純

「……………」

納得いかない顔で口をつぐむ純。まあ、確かに周りの人達には心配かけるだろうが、それは俺が失明したことを「知った」時の場合、普通に生活していれば、片目が見えないことを他人に知られる可能性はほぼないだろう。視力検査の結果を誰にも見せなければ問題ない。それに、網膜色素変性症は稀に症状が止まることがある。つまり、必ず失明するとは限らないし、そもそも俺にとっては失明してもしなくてもどっちでもいい。まあ、流石に左目まで失うとなると話は別だが。

有希

「とりあえず身体の方は心配ないから。あとは元に戻る方法を探すこと。こっちは難題だよ」

原因すら解らないのではな……。とにかく、一刻も早く『さき』に目を覚ましてもらわなければならぬが、いつになるのやら。

純

「待て！ マジごめんマジごめん許してちょっと待ってくれそれ洒落にならんぞ！！」

有希

「うるさいっ！ 今度こそは絶対に許さないから！」

朔耶

「お母さん……」

輪ゴムとカッターを手に、ドタバタと部屋で捕り物をする俺。純は俺の持つカッターによって所々服と肌が切り裂かれて出血しており、眼鏡も既にバラバラ。朔耶はベッドの隅で呆れたような顔をしていたが、そんなの今は関係ない。先ずはこの『来年の一月半ばで三十路になるエロエロ大魔王』をぶっ殺して心を完全に折った上で、二度とこんなことをする気にならないように輪ゴムとカッターで去勢しなければ。朔耶がいるというのに、友に対してこんなことをする奴だとは……ちよっと思ってたが。でもまさか本当にするとは……！

四時間前

元に戻る方法を二人で話し合ってみたものの、説得力のある意見が出なかった事で有希はだんだん飽き始め、純のベッドで朔耶を抱

いたまま眠った。純に背を向けた体勢で。「五歳でも気持ちいいのかな」という純の先ほどの台詞に、多少の危機感を覚えたらしい。恐らく朔耶を守るためだったのだろうが、これは間違いだった。

有希が完全に寝入った頃合いを見て、純が行動を起こしたのだった。端的に言うと、触った。最初は右手で、有希の臀部を。撫でるといふよりは、愛でる、といった手つきで。起きる気配がないのを見て、次は服の上から腹部を。擦るように撫でていたが、有希はやはり起きなかった。純はそれで気を良くしたのか、今度は服の中に入手を入れ、腹部から徐々に上に向けて撫でていった。ほんの少しだけ身動きしたが、それでも起き上がらないのを見た純はいきなり大胆になった。左手を襟口から突っ込んで胸を直に揉み始め、右手は有希の下腹部のさらに下へと延びて行く。下着の中にまで指を侵入させ、女の敏感な部分を指先でそつと突つく。一瞬身体をビクツさせた有希だったが、純は構わずに行方を続け、呼吸を荒らげる。時折身体をビクビクさせる有希を見て何を思ったのか、襷に隠れた突起を弄る右手はそのままに、利き手の左手を襟口から引き抜き、自分のオトコを握って扱き始めてしまった。荒い息を吐く純。右手を胸へと移動させ、先程よりも少し乱暴気味に揉みしだく。くぐもつた喘ぎ声のような音が自分の口から漏れ始め、絶頂に昇ろうとしたその時、純は両腕を拘束された。

目の前には真っ赤な顔で息を乱す有希。微かな月明かりでもそれと判るほど顔は紅潮しており、熱い吐息には明らかに快感の余韻が混じっている。しかし、視線は相手を射殺すかのように冷たい。

有希

「ハア、ハア……純は、殺され、たいんだね……」

実は純が臀部を触り始めた時から有希は目を覚ましており、朔耶を起こさない様に徐々に身体を離し、純を捕まえようとしていたのだ。危険な部分を触られて身体が思うように動かなかつた為に、反応が遅くなってしまうたが。

前に上げられた有希の小さな腕は純の両腕をガツチリと、いや、ギリギリと、折れそうなほどの力で握っている。純の表情が歪む。

純

「うっ……」

呻き声をあげる純。それは両腕を襲う痛みには依るものではなく、実は快感の波に依るものだった。そしてその快感の原因は痛みを快感に変えてしまうアビリティを持っているわけではなく、快感に耐える有希の艶美な顔を見たせいだった。

ビクンッ、ビクンッ、ビクンッ

熱い波濤が純の全身を駆け巡り、僅かに身体を振るわせた。

ピチャ、ベチャ……ピチャッ

『数億もの小さな生命の元からなる白く濁った液体を放出する生

殖行為』を無駄に果たした純は、今度は絶対零度の視線に身体を振るわせる事となる。

有希

「……床とソレを拭き取って部屋の隅に伏せなさい……」

純は即座に言う通りにし、拭いた後に両手を後頭部で組んで床に伏せた。『ソレ』を拭いた時、微かに「うっ……」という声が聴こえたのはきつと気のせい。

有希

「次は、無いと思えって、言ったよねえ？」

純

「うっ、あ……や、ヤバイ」

有希

「……何がヤバイの？」

未だ快感の余韻が消え去っていない有希の声は、純の性的思考を更に刺激してしまう。結果下着とズボンと床を白濁液で汚してしまう事に。

純

「いやもう、お前のそのエロい顔とか声とか……今ならそれだけでおかずに出来る」

有希

「……！」

嫌そうな表情で俯く有希。しかし顔は相当に赤い。嫌な気持ちと恥ずかしい気持ち、内で闘っているようである。

有希

「…………死ね！」

純

「うぼっ」

横腹にサッカーボールキックをかます。変な悲鳴をあげる純だが、表情は何故か苦しそうではない。手加減し過ぎたのかと、今度は少し強めに蹴ってみた。

純

「うぼあ！」

思いつきり横腹に突き刺さる前蹴り。更に悲鳴をあげるが、やはり苦しそうには見えなかった。それと関係無いが、叫び方が誰かに似ている気がする。不思議に思っていると、

純

「も…………もうちよい、下…………」

有希

「…………？」

どういう意味か解らなかったが、とりあえずもっ少し下の方、腰の辺りを踵で踏んづけてみることにした。

純

「うぼあ……………」

有希

「……………」

ようやく表情に変化を見せた純。その顔は紅く、なんか嬉しそう

な印象を受ける。背を思いつきりのけ反らせながら、身体はビクビクと小さく痙攣していた。誰かに似ていると思った叫び方は、どこぞの皇帝だった。

有希は純に、変態アビリティの基本にして最終奥義『快感置換（ドMの悦楽）』を会得させてしまった。

その後セクハラすると有希が自分をいたぶってくれる事を学習した純は、再び自らちよっかいを出した結果、カッターで男の大事な部位を切り落とされそうになっていた。

朔耶

「お母さーんっ」

有希

「頑張ってね朔耶ー」

園の玄関口から手を振る朔耶。可愛い。俺は門を出た所から思いつきり手を振る。周りのお母さん方や先生方は、まるで子ども同士の戯れを見ているように暖かい目で微笑んでいる。朔耶はそれはもう輝かんばかりの笑顔だ。朔耶可愛いよ朔耶。ただ、笑顔と可愛さでは俺も負けてないがな。

あの後既に五時をまわっていたのを確認した俺はもう眠る気にはなれなかった。と言うか眠ったら危険だし。既に目を覚ましていた朔耶と一緒にシャワーを浴びた後に、キッチンで少しの食材を借りて朝食&朔耶のお弁当を作る事にした。今日は金曜日であり、朔耶の通う保育園は毎週金曜日にお弁当会がある。らしい。これは昨夜、朔耶が「忘れてないよね？」的な空気を言外に纏わせながら確認してきたから発覚した事実だった。言ってくれなかったら終わってた。母親として終わりだよそんなもん。でも朔耶がそんなふうに確認してくるってことは、『さき』は忘れっぽかったのかな？ ……なんか意味不明だ。『さき』の人物像がさっぱり見えてこない。

『家は金持ちで』

『でもバイクはめっちゃ古い型で』

『忘れっぽくて（これは確認不可）』

『無断外泊しても誰からも連絡来なくて』

『驚いた事に六歳の娘がいて』

『しかも女子高生』

何者なのだろうか。あと、あの工口猫耳に狙われてるのも若干気になるし。ただ可愛いから襲われただけか？

まあとりあえずお弁当は上手く出来たよ。途中で起きてきた妹さんも俺がキッチンに立ってるのを見てびっくりして、つまみ食いしまくってた。いい笑顔だったから美味しかったんだろう。普段は料理なんて一切しないからあんまり自信は無かったのだが、母が料理しているのをよく見ていたから適当に真似してみたら、案外上手いこといったようだ。良かったよ。ただ、妹さんのつまみ食いでお弁当の中身ほとんど無くなったから、また一から作り直す羽目になったけど。

今日も妹さんに服を貸してもらった。てゆうか、強引に着せられたのだが。俺は家から『さき』の服を持ってきたというのに、どうしても着せたい服があるという。無理矢理部屋に引つ張り込まれ、脱がされて着せられた。脱がされた瞬間、やはり敵意を一瞬感じたが、妹さんは終始笑顔だったためになにも言えなかった。それと、なんでブラまで外す必要があるのか、理解に苦しむ。女同士であるとはいえ、裸を視られるのはめっちゃめっちゃ恥ずかしい。……いや、俺は男だけども、身体が変わるところというのも意識してしまうんだよ、やっぱり。

着せられたのはちょっともふもふ気味の……なんというか、トレナーみたいな？ この地域の六月という時期には合わないような暖かそうなやつだった。白を基調に所々黒い模様があつて、動物みたいなの……はい、ぶつちやけ牛です。牛模様でしたよ。しかも胸元には大きな穴が空いており、そこから二つの肉塊を放り出すように……牛ですね、はい。要するに妹さんは『さき』の胸に対して嫌がらせをしたかったようです。お腹に「ほるすたいん」って書かれた紙まで貼られたし。なんだこの究極に屈辱感抜群な格好は。昨日始めて会つて、その翌日でここまでされるなんて……相当コンプレックスなんだね、そのまな板。

牛服を脱ぐのを妹さんが激しく拒否したため、とりあえずTシャツを着てその上から牛服を着直した。するとこの巨乳がすこぶる強調されてしまい、妹さんもそれを見て一瞬満足そうな顔をしたが、直ぐに自分の胸元を見てがっくり頂垂れてしまった。

部屋から出ると純がおり、牛服から飛び出る巨乳を見て前屈みになった。なんとなく下段廻し蹴りを食らわせておいて、純が悶絶（

快感置換）している間に妹さんと二人で一階に降りる。階段を降りるとき、妹さんが後ろから抱き着いてきて胸を揉みまくってた。そのおかげで歩きづらい上に一瞬膝の力が抜けてしまい、危うく二人してU字の階段を転げ落ちるところだった。

リビングでは朔耶と蛍子さんが俺の作った朝ごはんを食べており、俺を見つけた朔耶が少しほっとした顔になる。まだ蛍子さんに人見知りしているようだ。妹さんはさっきお弁当をつまみ食いしてお腹いっぱいなようで、知らない子ども（朔耶）がいる事に怪訝な顔をしたが、何も言わずそのまま仕事に行ってしまった。食べ終えた朔耶は半ば蛍子さんから逃げるように俺の元に駆けつけてくる。朔耶を連れて玄関から外に出て（またしても熊の木彫りから嫌な雰囲気を感じた）、バイクで朔耶の保育園へ音速の勢いで向かった。

朔耶

「お母さあん、朝ごはん美味しかったー」

有希

「ほんとー？　ありがとうー」

あ、そういえばさっきの牛服は純の家を出る前に着替えておいた。下からTシャツ着てるけど、流石にあの格好は恥ずかしすぎる。目立つし。『ほるすたいん』も破壊力持ってた。平仮名で書いているあたりがポイント高いよな。ご丁寧に整理番号まで書かれていたのは閉口したが。

因みに今の格好は白地でびちびちのTシャツに、黒のレースチユ

ールミニスカート。故意か偶然かは判らないが、Ｔシャツに挟まっていた黒のニーソを穿き、靴は……靴の事まで頭が回らなかつたために持ち出しておらず、残念ながらローファーだ。

朔耶を保育園に送り届け、今日も一日手持ち無沙汰だ。病院へ行ってもまた検査で追い出されるだろうし、携帯にメッセージを残してきてあるから問題ないはず。この姿で実家（俺の家）には帰れないし、本屋で何時間も立ち読みするのは肉体的に辛い。学校のパソコンで音楽聴きながら携帯小説でも読もうかと思つたが、今のうちに解決しなければならぬかもしれない問題を一つ思い出した。『さき』と朔耶の家だ。俺はいいが、朔耶をこのまま何日も純の家で泊まらせるのは忍びない。朔耶はやっぱり自分の家がいい筈だ。言っちゃ悪いが、純の家は朔耶にとって居心地のいい場所ではない。純の部屋は狭いし。隅々まで掃除したつもりだが、まだ教育に良くない物が残っているかもしれない。さっきみたいな事がまたあつてもまずいし。それに蛭子さんに人見知りしてるから、精神的に疲れたりするだろう。

二神家にいるあの工口猫耳さえなんとかすれば、朔耶は住み慣れた家で寛げるし、俺は……まあ妥協してやる。朔耶の為なら、俺の事は後回しでいい。今ならあの工口猫耳にも逃げずに立ち向かえる気がする。お、なんだかやる気が出てきたぞ。

さて、早速行つて『さき』の部屋を漁ってみようか。『さき』が日記かブログでも書いてれば、普段の彼女を演じる事も出来るかもしれない。その為にはあの猫耳が最大の難関となる訳だが、なんでもまずはやってみなければ、成長は臨めないのだ。負けないぞ！

11 「いいでしょう?」

有希

「いやあああ!?!」

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い!

やっぱりダメだよ、あの猫耳ヤバイ! 可愛いけど! ダイナマイトボディで最強に魅力的だけど! 猫耳萌えるけど! とりあえず話だけはしようと思って行って見たら、玄関開けて直ぐ目の前に立ってたあ!

敷地内で隠れられそうな場所を探して隠れ、周囲を探る。猫耳は来ない。足音も聴こえない。近くの小学校から子ども達の喧騒が聴こえるだけだ。ふうっ、やっぱりヤバイよあの猫耳メイド。ずっとあそこに立って待っていたのか? 考えられない。エロじゃなくても充分恐ろしいよアイツは。それに、誰かに似ているような気がするんだよなあ。

五分待っても現れなかったので、物陰から出て周囲を見回しながらもう一度玄関に向かった。もう二度と近づきたくないけど、朔耶の為だ。俺がやらなきゃ誰がやる!

そろりそろりと近づき、今度はゆっくりと玄関の扉を開けた。

アリス

「お帰りなさいませ、ご主人様」

……居た。凄まじいまでの笑顔だよ。

有希

「あ……はい、ただいまです……」

……いきなり襲つては、こないよな？ マジでトラウマになりそうだ。なんで俺は男なのに、女に迫られて逃げなければならんだ。しかも昨日は思いっきり蹴り入れて逃げたから、気まずいことこの上ない。

軽く逃げ腰になりかけてはいたが、すぐに姿勢を正して向かい合  
う。

有希

「あの……先ずはお話をしたいと、思つのですが……」

話を通じる相手であればいいが。

アリス

「わかりました、こちらへどうぞ。今お茶を淹れま」

危険危険危険――！！

有希

「ちよつと待って！ お茶はいいの！ いいから、話だけさせて！  
ねっ！？」

ハルシオン（睡眠薬）入りのお茶は飲めません。

アリス

「……そうですね……わかりました……こちらへ、どうぞ……」

肩を落とし、物凄くしゅーんとして奥へ入っていく猫耳アリス。可哀想なぐらい落ちこんでしまった。心なしか、猫耳もへにゃんと垂れているように見える。これはなんだろう。まるで俺が悪いことをしたような空気になっているじゃないか。俺は自分の身を守ろうとしただけなのに。

とりあえずリビングのソファにアリスを座らせ、俺がキッチンでお茶を淹れた。それに気付いたアリスがすごい剣幕で飛んできて、そこで一悶着あったが（メイドの仕事を奪うなという事らしい。それと、すごい勢いで飛んできたアリスを見て、今度こそ襲われると思った）。睡眠薬を入れさせない為の作戦だった訳だが、もう淹れてしまったからという事でアリスを黙らせ、二人でソファに座る。対面に座ればいいのに、何故か隣に密着して座りやがったけど。しかしお茶を淹れなくていいと言われた上に、そのお茶を俺が出した事で、アリスは昨日の乱れぶりなど考えられないほどに落ち込んでいた。

有希

「えっと、あの……アリスさん？」

アリス

「……ハイ」

顔を上げようともせずに応える。この空気の重さは、ちょっと堪えられるものではない。この密着感も出来ればやめてもらいたいな。どうするべきかと一瞬悩んだが、結局どうでもよくなってしまう、疑問をそのままぶつけてみる事にした。

有希

「……………貴女は誰ですか？」

住人である朔耶でさえ知らなかったのだから、昨日朔耶が保育園に行ってる間にここに来たことになる。朔耶にとって、アリスは前からこの家に仕えていた使用人ではなく、新しくやってきた使用人でもない。メイドのコスプレをしているただの知らない人だ。俺にとっては、俺の男としての息の根すらも脅かす危険人物。

アリス

「私……………実は、メイドなんです！」

有希

「それは見たらわかるから」

思わず軽く突っ込んでしまったが、今のはアリスが意図的にボケたのだろうか？ それとも本気で答えたのかな？

有希

「誰のメイドなの？ 誰が雇ったの？」

こんな危険なメイドは要らないんだけど。

アリス

「雇い主はいません。私は、ただ個人的にご主人様にお仕えしたいと」

有希

「……………ハイ？」

アリスは顔を上げ、こちらに真っ直ぐに視線を投げ掛けてくる。  
……………ってことはなに？ メイドの押し売りですか？

有希

「いや、そんなこと言われても……」

先ず最初に、俺はこの家の人間ではない。そして、この家の状況などこれっぽっちも知らないのだ。この家にメイドが必要かどうか判断出来ないし、雇うとなると金が動く。そんなもの、俺が決めていいものではないだろう。それに、

有希

「なんで、私なの？」

誰だ、と訊ねられて素直に答える辺りから、『さき』とは知り合ではない事が窺い知れるが、それなら何故『さき』なのか。

アリス

「そんなの、決まってるじゃないですか」

ちよつとだけ、アリスの頬に朱が差したように見えた。瞬間、俺の未来予想図にはでっかい「危険！」の文字と、子どもには見せられないピンク色の光景。いや待てそう簡単に人を疑ってはいけない信じる心って大事だぞと頭を振り、俺は勇気を振り絞って訊ねた。

有希

「……どういう事？」

アリス

「ご主人様が……可愛いから、です」

うむ、やはり俺の未来予想図に狂いは無かったようだ。アリスは更に顔を赤らめて俺の左手に右手の指を絡め、左手で俺の腿を触り

始めた。盛大にため息を吐き、アリスの両手をはね除けて立ち上がりながら、俺は少し強めの口調で言った。

有希

「私は、そういう趣味はありませんっ」

……いや、俺だって男だ。女の子は好きだよ。前にも言ったけど、一般的に見て特殊といえる性癖は持ち合わせてはいない。ただちょっと、ミニサイズの女性に惹かれやすい傾向があるかもしれないと言いつつ、元々の俺の身長（百六十七）より少し小さいぐらいのアリスはその範囲外だが、なんせ可愛すぎる。百人中百人を一目惚れさせかねない容姿を持っているのだ。この魅力に坑するのも結構な労力だが、今の俺は女の身体。小説を読む分にならそういう百合百合な展開も嫌いじゃないが、自分が当事者となると話は別物だ。あ、あと嫌いじゃないとは言ったが、アリスみたいに強姦紛いの真似をするやつは例え小説の登場人物でも嫌いだ。その上自分の身体じゃないんだから、勝手なことしちゃいけないな。

アリス

「……はう、ご、ご主人様……可愛いです……」

有希

「えっ？ あ、ちょっと、やめてよっ。変なとこ、触らないで！」

俺は明確に拒否の姿勢を示したはずだったが、どうやらアリスには効果が無いどころか、状況を悪くしてしまっただけのようだ。アリスは立ち上がった俺の腰に右腕を廻して抱き寄せ、左手で腿の内側を上へ上へと擦り上げていく。背中がゾクゾクツと震え、徐々に身体熱くなってきた。顔を紅潮させ、物欲しそうな潤んだ瞳で見上げてくるアリス。そんな、「いいでしょう？」みたいな顔をされて

も困ってしまうのだが。

ああ、ヤバい。今日は最初から大人しくしていたのを見ているせいか、無意識にアリスに対する警戒心を緩めてしまっていたようだ。そしてセクハラの方も、昨日とは打って変わって恐る恐る、といった感じでこられてはなんだか、えっと……とにかくおかしい。さっきは簡単にはね除けてみせたというのに、今は何故かそれが出来ない。

そうして俺が困惑している間にも、アリスは手の動きを止めなかった。ほんとうに際どい部分を優しく、焦らすように擦る。腰が痺れる。膝が震える。俺も顔と吐息を熱くさせ、しかし全力で“ソレ”に耐えていた。それを見てとったのか、俺の腰をアリスは強く抱き寄せ、足に力が入らなかった俺は容易くソファに倒されてしまった。

熱い。全身が熱い。顔が熱い。下腹部が熱い。熱い熱い熱い。頭の中まで沸騰しそうだ。全身を撫で回され、思考能力を極端に削られ、今自分がどういう状況にいるのかが思い出せなくなってきた。視界に映るのは顔を自前の赤毛と同じくらい真っ赤にし、猫耳を着け、淫靡な表情をする端正な顔立ちの美少女。目はとろんとして何かに酔っているようであり、「もう我慢出来ません」的な視線がほわほわと飛んでくる。本当にサキュバスだなあと、ほとんど飛びそうな意識の片隅で考えた。

アリス

「ハア、ハア、……ご主人様、私、もう……」

そんな声が聴こえ、瞼を閉じたアリスが顔を近づけてきた。柔ら

かそんな桃色の唇を突き出すようにして。何をされるのかを理解した俺は残った力を振り絞り、左手の人差し指と中指の腹を、アリスの唇に合わせるようにしてそっと押し付けた。

アリス

「んむ、あ……ん」

有希

「……あ」

……柔らかい。アリスの厚い唇がはむはむと動き、短い舌は貪るように俺を求めてくる。自分の口内の唾液を俺に向けて流し込んでくる。俺はそのアリスの口から垂れてくる唾液を、右手のひらで受け止めた。

……これは、グロい。やらなきゃ良かったと、今頃になって後悔してしまった。人はこれを見るともう……他人とディープキスなんて出来なくなっちゃうんじゃないだろうか。少なくとも俺はもうギブアップだ。だって……アリスの舌が俺の人差し指と中指の間をこじ開けて、なんとも見るに堪えない気持ち悪い動きをしているのを約十五センチの距離で見せられているのだから。それでも舌が短いせいか、俺の指を舐める程度で済んではいるが……残念な光景だ。哀れ、アリスはまだ気付いていない。俺の唇だと思い込んでいる指を、必死になつてピチャピチャと舐め廻していた。……ちよつと可哀想な事をしてしまったかな……。

アリスの舌の動きがゆっくりになってきたときを狙って、俺はアリスの唇に押し付けている人差し指と中指をさっと引いた。アリスの唾液でべちゃべちゃになって糸を引いてる指を、さりげなくソフアで拭いとる。めっちゃう気持ち悪い。アリスはゆっくりと瞼を開け、

蕩けた目でじつと俺を見つめた。

俺は、ここでまたしても後悔し始めた。アリスが俺の指にすぐに気付いてくれれば、問題は無かったかもしれない。指とキスしている事に気付けば、流石にアリスもシヨックを受けただろう。その間に、さつさと逃げてしまえば良かったのだ。しかし、この様子では本当に気付いていないらしい。俺が心を許したと勘違いして、更に酷いことを要求してくるのでは？ ディープキスよりも更に酷いこと……イヤだ、想像したくもない。とにかく、もうここから離れなければ、俺にとっての何もかもが危ないのは火を見るより明らかだった。

有希

「ん、んうう、んっ」

どうにかして起き上がろうと努力してみたが、俺には結局絶望しか残っていないらしい。無駄な足掻きだった。

アリス

「…………ご主人様…………」

有希

「あ、アリス…………あ、その…………」

ガシツと肩を掴まれる。あー、遂にこの時が来たか。俺は今度こそ襲われるんだな。もうダメだよ、力が残ってない。残っているのは、絶望だけ。

「ごめんなさい、天国のお父さんお母さん、息子はもう…………間違えた、両親生きてたよ。俺が男だった頃のお父さんお母さん、息子はこれから何か大事な物を無くしてしまうようです。そして、『息子』

から『娘』に転職するつばいです。不甲斐ない息子ですまねえ。そして『さき』、俺は君の身体を守れなかったよ。本当にごめん。

さあ、変態エロリコン（エロ・ロリコン）猫耳メイドめ、来るなら来いよ。身体は征服されても、心は絶対に屈しないぞ。……でもせめて痛くないように

アリス

「お風呂に入りましょう、ご主人様」

有希

「……？ ふえ？」

え、なに？ 今までのピンク色の雰囲気はなんだったの？ お風呂？

急にそれまでの怪しい気配は消え、表情が元に戻ったアリス。動けない俺の小さな身体を軽々と抱き上げ、すたすたと歩いていく。二十メートル程の渡り廊下を歩き、母屋から離れた浴場へと入った。大きな石で囲まれた浴場は、まるで時々テレビで見る小さな温泉のようだ。傍では鹿威しがカポーンと暢気な音をたてて、意味もなく付近の小鳥達を近付けぬよう威嚇している。こじんまりとしてはいるが、俺の庶民的感觉を刺激するには充分過ぎる程だった。何故ここに鹿威しを置いているのかは、ちよつと謎。

全身に力が入らず、抵抗出来ない俺の服をアリスは一枚一枚丁寧に剥ぎ取り（下着が上下ともびつちよびちよだった。めちやくちや恥ずかしい……）、アリスも裸になった。日光浴をしても日焼けするかどうかを疑ってしまいそうなほど真っ白な肌、少し重たげな一部の肉、下腹部の薄い毛に隠れた小さな谷間、ふわふわして柔らか

そんな猫耳……はあ、俺つてもうダメかもしれない。男として。自分が裸にされている事に関しては、抵抗出来ないから仕方ない。本来ならアリスを殴り殺す勢いで暴れていた筈だ。実際今も恥ずかしい。しかし今、目の前で全裸のグラマラス猫耳（全裸なのに猫耳は外さなかつた）がその裸体を惜し気もなく晒しているというのに、そこに関しては何も感じない。なんとも思わない。まるで有名な画家が描いた精巧な一枚の絵画を見ているようで、寧ろ神秘的な雰囲気すら感じるのは気のせいだと思うことにしよう。襲われそんな雰囲気が無くなったのはよかつたが、これはこれで男として大問題じゃないだろうか？

アリスの愛撫のせいで全身が敏感になった俺は、服を脱がされた後、肌に直接触れられただけで気絶してしまった。その後の事は記憶に無いが、アリスが身体を洗ってくれたらしく、目を覚ました俺の肌や髪からは石鹸の匂いと桃みたいな匂いが漂っている。服も替えられていて、今は薄いピンク色のパジャマを着せられていた。サイズはぴつたり。『さき』の服か。

ベッドの上でぼーっとしながら桃の匂いに鼻をヒクヒクさせていた俺だったが、起きたのに気付いたアリスがベッドの脇からぬうつと乗り出してきた。

アリス

「おはようございます、ご主人様。お昼ご飯にしますか？ もう少し休みますか？ それとも……わ、わたしに……しますか？」

有希

「……………」

恥ずかしいなら言わなきゃいいのに、アリスは顔を真っ赤にしてそう言った。初対面の女の子を襲う度胸はあるのに、そんなことで恥ずかしがるというのはどういふ事だ。

有希

「今、何時？」

アリス

「十三時五十九分五十六秒です。私にしますか？」

有希

「……………今、何時？」

アリス

「十三時五じゅ……………十四時零分一秒です。私にしますか？」

有希

「……………あー、もう午後二時か」

細かすぎるよ。しつこいし。

アリス

「それで、あの……………私に、しますよね？」

まだ言ってる。しかも遂に質問形から確認形になった。

何気なく意識を身体の各部に向けてみる。このエロ猫耳の事だ。寝てる間に何かされたかもしれない。これ以上あの快感と不快感が入り雑じった気分は味わいたくないし、何より『さき』の身体を汚したくなかった。が、特に違和感らしきものは感じない。ただ、やけに口の中がベタついた感じがするだけで……………？ おかしいな。本当に何もされてないのか？

有希

「ねえ……私が寝てる間に何か変なことしなかった？」

アリス

「ギクツ」

……したのかよ。しかも「ギクツ」って口で言いやがった。

有希

「何をしたの？」

アリス

「え？ や、その、あの………、を」

軽く唇を触り、真っ赤な顔で口籠る。

有希

「聴こえないよ？」

口の中でもごもご何か食べてるようなしゃべり方であるため、何を言ってるのか解らない。俺が少し強めの口調で言うと、アリスはちよつとだけ顔を上げて告白した。

アリス

「あう、そ、そのつ、……ち、ちゅ、を」

有希

「！」

恥ずかしそうにしながらも、後半はとても幸せそうに呟いたアリス。反面、俺の顔は今、どうなっているだろう？ 絶望か、悲哀か、激怒か……せつかく、守りきったと、思ったのに……。

有希

「……勝手に、ちゅっ、したの？」

アリス

「っ、ひううっ！　だ、だってっ、ご主人様……か、可愛い、から……」

顔を赤くさせながら、しかし瞳に怯えの色を示す。絶対に許さない。お前がどんなに怖がるうがエロかるうが、そして可愛かるうが、もう俺の心は揺るがない。この家に来た事を、いや、生まれてきた事をすら後悔させてやる。先ずはお仕置きしてあげなきゃ。

有希

「覚悟しなきゃ、ね？　ア・リ・ス」

アリス

「あうっ、うあ、ご、ご主人様っ。ご、ごめんなさいっ」

有希

「……っ」

涙目で哀願するアリスのとんでもない可愛さに、俺はあっさりと心を折られてしまった。

有希

「昨日誰か帰ってきた？」

アリス

「はい、御母様が夕方頃にお帰りになりました」

アリスの可愛さに負けてしまった俺だったが、結局は軽くお仕置きしておいた。そして今俺たちは『さき』の部屋にいる。お仕置きの内容は……ごめん、アレは言えないよ。なんかね、アレなんだ。縮こまって涙目で『必殺・上目遣い!』を使って謝ってくるアリスを見てると、ドS心が騒ぎだすんだよ。『アリスをイジメてみたい』という欲求がメラメラ燃え上がってきて、困った顔とか泣きそうな顔とかが無性に見たくなるんだ。これがまた凄く可愛いんだ。まさか俺にこんな加虐趣味があるとは思わなかったよ。でも純をいたぶってる時は嫌な気持ちしか感じないが……。

有希

「お母さんは、アリスがいるのに何も言わなかったの？」

アリス

「いえ、特に何も。あ、そういえば、『いいわよ』とは言ってました」

有希

「……？ 何がいいの？ アリス何か言ったの？」

『さき』の母親って、どんな人なんだろう？ やっぱ若いかな？ 『さき』がヤンママだから、両親も実はまだ二十代だったりして。……それはないかな？ それにしても、『いいわよ』って何の事だ？

アリス

「あ、はい……。『お嬢様を、私に下さい!』と……」

有希

「覚悟は出来てる？」

アリス

「っ！ ひうっ！」

何て事を言いやがるんだこの淫獣エロリコンめ。女であるお前が「娘さんを下さい」はマズイだろ。初対面の猫耳にそんなこと言われて『さき』のお母さんだつて黙つてない……ん？「いいわよ」つて言つたのか？『さき』のお母さんは……！自分の実の娘を、こんな得体の知れない猫耳に躊躇なく差し出したというのか！？何の得も無いのに！？いや待て、もう得とかの問題じゃないよねこれ。人間としての是非すら問われるよね。……本当になんと  
いう母親だ。親の顔が見たいぜ。

今俺は『さき』の部屋で彼女の性格を表す物を探している。昨日りか（仮名）と偶然鉢合わせしたように、また誰か『さき』の知り合いに出会す事があるだろう。そうなつても無難にその状況を脱せるくらいには『さき』の事を理解しておきたい。そう何度も「人違いです」で通せる訳もないからな。

アリス

「あつ、あり、ました、よ、ご主人様……」  
有希

「あゝあつたゝ。ありがとーアリス」  
アリス

「はううっ」

俺のお仕置きを受けて息も絶え絶えのアリスが見つけたのは、一冊のノートだった。『交換日記』と表紙に書かれている。開いてみると、表紙の裏に名前が書かれていた。

『光』  
『愛』  
『珊瑚』  
『蓮華』  
『嵐』  
『篠』

……『二神幸』はなんとなくわかる。たぶん『さき』の事だろう。  
あと『珊瑚』と『蓮華』も聞き覚えあるな。後の四人は知らない。  
珊瑚と蓮華は『さき』の友達か？

アリス

「はうあう、は、ふあ」

有希

「……アリス何してんのさっきから」

さっき日記を受け取った辺りからずっと、くねくねと変な動きをしている。顔も赤い。

アリス

「だ、だって、ご主人様が、ただのメイドである私に向かって、『ありがとう』だなんて……。それに、ご主人様の無垢な笑顔が……ごちそうさまです！」

有希

「……あ、うん。どういたしまして？」

意味がわからないよ。

日記に視線を戻す。一ページ目はそれぞれの性格や特徴などを書

き込んでいた。

二神幸 私。

光 保護者さんです。私と同じくらい小さいけど、母性満点です。  
愛 音楽に関する才能が凄い。他の点でも天才。でも男嫌いなんだ  
つて。

珊瑚 天真爛漫。笑顔が天使みたいです。

蓮華 甘えん坊さん。凄く焼きもちやき。たまに困ったちゃんです。

篠 会ったことはないけど、私達を助けてくれる人だそうです。

嵐 わかりませーん。

……あれ？ 光と愛も聞いたことあるな。どこだっけな？ ……

しかし肝心なところが書かれてない。俺は『さき』の性格が知りたかったのに。しかも、「わかりませーん。」って……この嵐って子、なんで交換日記に加わってんだ。でも、これを書いたのは全部『さき』なんだよな。文体の調子から、普通の女子高生な感じはする。

ページを捲ってみた。二ページ目は交換日記のルールが書かれていた。

↳ a r u l e ↵

- ・ スポットに当たったら、必ず何か書くこと。
- ・ 書くことはなんでもいいけど、外に出ている間にあつた事が望ましいです。
- ・ メッセージとかも良いと思います。
- ・ 他人の名前は使用不可です。必ず自分の名前を書いて下さい。
- ・ 破いたり消したりしてもダメですよ。

・システムで何かわかった事等もありましたらどうぞ。

〜以上です〜

……なんだこの交換日記は？ スポットに当たったら？ システム？ システムって最近どっかで聞いたな。なんだろう？ ……わからない。それと、この説明文はさっきの紹介文と違って、字が機械的に綺麗だ。さっきの紹介文と違って、字が機械的に綺麗だ。さっきのは丸っこい可愛い字だった。誰が書いたんだろう？

…三ページ目。やっと日記が始まったようだ。最初に書いたのは…  
…光？

H20:9:10(水)

始まったね、交換日記。

この十五年間、いろいろあったね。

私達には困難だった果てしない道程は、これからは収束に向かっていきます。

幸、貴女には未来があるの。素敵に色付き、輝いていく。その名前のように、幸せな未来が。

私達の一人一人は、いつか消え行くかもしれない。

でも、いつかきつと、貴方を側で支えてくれる人達が、現れるから。

生きて行くのよ、幸。

【from 光】

さっきのルール説明文と同じく、機械的な字だった。「保護者さんです。」と書いてるだけあって、文が凄く大人な感じがする。ただ、内容はなんのこっちゃよくわからん。「さき」に対してのメッセージっぽい。

H20:9:28(日)

はあ……運動会超つまんない。普通に疲れるだけだし、そもそも楽しくないし。

仕方なくフォークダンスはサボった。だって、男と手繋げる訳ないじゃん。光もダンスが苦手だからって、こんな時だけ私に押し付けて。

結局サボっちゃったじゃん。幸、担任に叱られないかな？

【from 愛】

愛、か。この子は男嫌いだったな。だから異性と接近するフォークダンスが嫌だったのか。しかし、この子がサボっただけで、どうして『さき』が叱られるんだ？

20:10:10(きんようび)

きょうはなみかちゃんとみゆちゃんがあそびにきたよ。  
げつようびまでさんごたちのいえにおとまりするの。  
れんげちゃんがとてもよろこんでたよ。  
なみかちゃんとみゆちゃんかわいい。  
いしよにおやつたべてたらちかねえちゃんがでてきてさんごたちのおやつたべてまたひこんじやた。  
もーちかねえ

アリス

「ご主人様。お疲れになるので、座って読まれてはいかがですか？」

有希

「ん……え？ アリスなんか言った？」

少し読むのに夢中になりすぎていたようだ。アリスの方を見ると、床に女の子座りしている。そして俺の目をじっと見て、膝をぱんぱんと叩いた。……そこに座れっか？ 椅子もベッドもあるのに、何故お前の膝に座らなければならぬんだ。まあその案は魅力的ではあるけども。

有希

「……だが断る」

アリス

「ふえーん、ご主人様っつ」

期待を込めた表情から一転、顔をくしゃつとさせて悲しみやら懇願やらを訴えるアリス。涙が二筋流れてはいるが、足の後ろにサテFXネオが落ちてるのが俺の位置からは丸見えだ。泣き真似を

してまで俺を膝に座らせたいのか。っていつか……可愛いじゃねえかこのヤロウ。そんな顔されたら、胸が高鳴ってきやがるぜ。

有希

「わかったわかった、今座るから」

仕方ないな。今だけは座ってやるが、勘違いするなよ。サイヤ人ナンバーワンはこの俺だ。……あれ、何言ってるんだ俺は？ 頭がおかしくなってきたぞ。

俺はアリスに歩み寄り、正面からアリスの膝に座った。そしてアリスの脇に腕を回し、顎を肩に乗せる。抱き着くような姿勢で、腕を前に伸ばして日記の続きを読み始めた。

アリス

「は、はわわ、はうあう」

有希

「アリスうるさい」

アリス

「うっ……」

日記を、文頭から読み始めた。

20:10:10 (きんよつび)

きよつはなみかちゃんとみゆちゃんがあそびにきたよ  
げつよつびまでさんごたちのいえにおとまりするの

れんげちゃんがつつてもよろこんでたよ  
なみかちゃんとみゆちゃんかわいい  
いつしよにおやつたべてたらちかねえちゃんがでてきてさんごたち  
のおやつたべてまたひつこんじやた  
もーちかねえちゃんのいじわるさんごのおやつなくなつちやつた  
さんごのおやつかえして

【from さんご】

これは、幼児だな。全文平仮名で字が乱雑で小文字無し、内容は  
幼い子どものソレだ。罫線は完全無視、日付と名前の部分は誰か違  
う人が書いてるらしく、ちよつとだけ綺麗な字になつてる。それで  
も平仮名つてことは、代わりに書いたのも子どもか？

『れんげ』と『ちか』という名前が出てきた。蓮華と愛……この  
二人は珊瑚とはどんな繋がりなんだろう？ なみかちゃんとみゆち  
ゃんが「あそびにきた」となつているのに対して、愛と蓮華は最初  
から家にいたかのような書き方になつている。姉妹なのか？ 愛の  
事も『ちかねえちゃん』と呼んでいるし、そうなのかも。あ、でも、  
子どもは年上には誰にでもそういつ呼び方をするものではないか？  
うーん……わからん。

H20:12:23 (火)

……あの母親は……！

何度言ったら解るんだ！ 家に男を連れてくるなつて言うのに！

せつかく状態が安定して幸が出てきたのに、また引っ込んでしまった。明後日はクリスマスなのに……。

……家を出たほうがいいんじゃないの？ あの母親のせいで不安定になつてゐる感とかあるしさ。

【from 愛】

また愛が書いてる。インターバルもローテーションもめっちゃくちやだな。この大人数で、そして今頃交換日記なんてやってるのもおかしい話だが。携帯やパソコンがあるんだから、ネットの掲示板を使えばいいのに。

……「せつかく出てきたのに引っ込んでしまった」っていうのは、つまり『さき』は引きこもりか？ 男を連れてきたから情緒不安定？ 『さき』も男嫌いかな？ ……まったくわけがわからない。それに、肝心の『さき』が一向に日記を書く気配が無い。いつになつたら書くんだ。

パラパラとページを捲り、『さき』が書いたページを探す。なかなか見つからず、ようやくそれらしいところを見つけたが、その次のページは白紙になっている。その日付は事故の前日、つまり今日から二日前だった。

やっと見つけた。有希さんのバイト先。

ここからはそんなに遠くない、結婚式場でウェイターやってるんだって。

行ったら、有希さんに会えるかなあ？ さきもそこでバイトしようかな？ な〜んて、お母さんが許すわけないよね。

明日お昼御飯食べたら、ちょっとだけ行ってみよつ。有希さんは平日もバイトしてるってブログに書いてあったから、運が良ければ会えるよね？

楽しみだなあ。。

【 from 幸】

『有希さん』って……誰だ？ 結婚式場でウェイターをしていると書いてあるが、まさか俺ではあるまい。俺にこんな可愛い知り合いはいない。『さき』は『有希さん』とどつう関係なんだろう？ 読む限りでは懂れか、それに近いものを感じるが。

『有希さん』はブログをしているらしい。何の偶然か、俺もブログをやっではいるが。まさか俺ではあるまい。うん、まさかだよな。そうだよ。そんなわけ、ないよ。……そういえば、最近俺のブログに『幸』という名前でコメントがされていたような？ ……まさか、俺では、あるまい……。

アリス

「ハア、ハア……二つの、肉まんが……こんにちわです……」  
有希

「……」

さつきから荒々しい呼吸が耳元でうるさかったが、遂にアリスは変態を匂わせる発言を口から漏らした。……こいつは女なのに、なんで胸が当たっただけでこんな反応をするんだ？ 俺がおかしいのか？ 俺もアリスのが当たってはいるが、なんか全然気にならんぞ。こいつの方が男みたいだ。

とりあえず読むところは読んだので、俺は日記を閉じて立ち上がるとした。アリスの柔らかい二つの肉の感触が離れていくが、どうでもよかった。というか、肉を押し当てる&押し当てられる事で胸が圧迫されて呼吸がしづらい事に気付いたから、さっさと離れたかったのだ。

日記を片手に立ち上がりかけた次の瞬間、俺は後頭部に激烈な痛みを感じて気を失った。

## 12 夢(参)(前書き)

ユニークアクセス2600突破しました。

感想・批評、大好物です。遠慮せずにどんどん下さい。

12 夢(参)

光

「お帰りなさい」

有希

「……ただいま？」

愛

「……」

珊瑚

「……(ウズウズ)」

篠

「ふふっ」

視界は真っ黒い壁や天井で埋め尽くされ、自分が夢を見ていることに気づく。またこの黒い部屋か。ベッドの上で、今度は上半身を起こした状態。最近、というよりは、『さき』の身体に入ってからはこの夢しか見ないな。……あれ？ 夢を見ているってことは、俺は寝てるのか？ いつの間にも眠ったんだ？ 確か『さき』の部屋で『さき』達の交換日記を読んでいたはずだ。

光

「有希、あなたにお願いがあるの」

有希

「……？ お願い？」

愛

「……」

珊瑚

「……(ウズウズ)」

篠

「ふふっ」

今日は昨日より一人増えている。茶色い長い髪の毛のちびっ娘、あき光。赤い短髪のセーラー服少女。綺麗な黒髪の双子の片方。そして新顔の、霧がかかったように薄ぼんやりとして姿がはつきりとは見えな  
い、笑い声からして女性と思われる人物がいた。

光

「お願いというのはね……」

有希

「あ、うん」

愛

「……………」

珊瑚

「……………（ウズウズ）」

篠

「ふふっ」

真剣な表情でちびっ娘光が俺に言う。俺にお願いって、いったいなんだろう？俺に出来ることならなんでも……………って、これ夢だよな。なんで俺はこんな真面目に聴いてんだよ。

光

「あなたに、幸を守って欲しいの」

有希

「……………え？『さき』？守る？」

愛

「……………ちっ」

珊瑚

「……………（ウズウズ）」

篠

「ふふっ」

ん？ 今あの赤髪の子、舌打ちしたか？

有希

「『さき』を守るって……なんの話？」

夢だとわかってはいるが、なんとなく気になってしまっ。

光

「……？ あなた、日記を読んだんじゃないの？」

有希

「日記……交換日記のこと？ あれは最初と最後しか見てないよ。」

『さき』が書いてるページが見たかったただだから」

光

「裏表紙を読んだのなら……わかるはずだけど」

不思議そうな顔をして首を傾げながら言う光。

有希

「最後って言うてもそれは最後に書かれたページの事で、それ以降のページは見てないけど」

そう言う俺に呆れた顔をして、溜め息を小さく吐いた。

光

「はぁ………だったらここに来るのはまだ早いわ。もう一度日記をゆつくり読んで、また明日いらっしやい」

有希

「ええ？ 俺まだこの夢見なきゃいけないの？」

そろそろ飽きてきたし、たまには違う夢も見たかったりする。

光

「いいから言う通りになさいっ。じゃあね。また明日」

愛

「……ボソツ（もう来るな。っていうか死ね）」

有希

「……」

……聴こえたぞ。あの赤髪、今絶対に俺に対して毒を吐いたよな。なんで俺何もしてないのに、そんなに嫌われなきゃいけないんだ。いくら夢でも、流石にちょっと気分良くないぞ。

珊瑚

「おにいちゃん、また明日ね」

有希

「ん？ ああ、また明日ね」

双子の片方は朔耶に負けないくらい笑顔で手を振ってくれた。あー、やっぱり子どもは可愛いよ。ぎゅってしたくなる。それにしても、双子のもう片方は何処にいったんだ？ 最初は双子だったのに、消えて双子じゃなくなったのか？ まあ夢だからどうでもいいけど。

## 13 心

有希

「ん、んううー」

暑さで俺は目を覚まし、仰向けのまま軽く伸びをする。全身に汗を掻いているようであり、半端ない不快感と、身体に不自然な熱を感じた。

軽くぼやけた視界と思考で見慣れない部屋の天井にハテナマークをぶつけながら考える。ふあ、よく寝たな。今何時だ？ 今日は何曜日で、バイトあったっけ？ えーっと……ここはそもそも何処だ？ 寝る前は何をしていて、何故俺はここにいる？ そしてまだ五月の頭なのに滝汗をかくほどのこの暑さの正体はいつたい……？

ハテナマークが乱立する。その熱さの原因はすぐ目の前にあった。

アリス

「んにゃあ……ん。あつ、お目覚めでしゅかあ？ ご主人さまあ」

有希

「え」

声のした方を見ると、俺の左肩を枕にして抱き着く猫耳がいた。その『抱き着く』の言葉通り、『添い寝』ではなく、『密着』といった方がしっくりくる。人間は寝ている間は熱を放出しようとして体温が高くなるため、こつも密着されると流石に熱い。それと、当たってるよ、柔らかいのが。といっても、そこまでは気にならないけど。

……あれ、なんだ？ アリスの首筋に、二つの丸い……穴のような物が見える。黒子には見えない。痣、だろうか？ まるで吸血鬼にでも噛まれたかのような……。

そんな事を考えていると、猫耳がこしこしと目を擦りながら、こちらを見上げていらっしやるのに気付いた。またしても『必殺・上目遣い！』が炸裂し、俺は不意に鼓動が早くなるのを感じた。同時に体温も上昇する。

アリス

「あ、ご主人さまぁ……もしかしてえ、今ドキドキしてましゅかぁ？」

有希

「！」

寝起きで上手く呂律が回ってないが、心臓のすぐ近くに頭をおいているからだろう。アリスには俺の心臓が暴れだしたのが聴こえているようだ。ちくしょう、このエロリコンめ、今すぐにお仕置きして

アリス

「にゅふふ、やっぱり若い男の子はぁ、寝起きもいやらしさんでしゅかぁ？」

有希

「！……！」

……なん、だと……！？

有希

「おい……？ 今何て言った？ 若い男……？」

アリス

「うふふ、ご主人様は、いやらしさんです」

甘える様に抱き着いてきて『いやらしさん』を連呼するアリス。言われて嬉しい言葉ではなかったが、それ以上に聞き捨ててはならない言葉が、俺の頭の中を反芻する。

……男。アリスは今、俺の事を「若い男の子」と言った。その言葉の意味するところは、俺の正体をアリスが知っているという事に他ならない。俺が『さき』という女の子ではなく、『有希』という名の男である事を。名前まで把握しているかどうかは判らないが、確かに今目の前にいる女子高生が女の子ではない事を知っているのだ。

有希

「……お前、何か知ってるのか……？」

声が震える。

元に戻るかもしれない。

そんな期待とは裏腹に、息を乱すものの影。

コイツが、俺と『さき』を入れ替えた張本人かもしれない。

何も答えずに、艶事を期待するかのようなとろんとした目を俺に向けるアリス。その大きく澄んだ瞳に、俺はどう映っている？ 心

は男だが、身体は小さな女の子。中身はどうあっても、今のままでは力も弱く、何も出来ないただの女の子なのだ。そんな半端な存在である今のこの俺に、アリスはいつたい何を期待しているのか。

有希

「教えてくれ。何でもいい、俺にいつたい何が起きてるんだ？ 知ってることがあったら」

アリス

「ご主人様は、ご主人様ですよ？」

俺の言葉を遮り、ニツコリ笑って言い放つ、猫耳のメイド。今となつては、その笑顔にも恐怖を感じる。同時に、怒りに似た衝動も込み上げる。

有希

「答えろっ！ なんで俺と『さき』が入れ替わってるんだ！ 誰がやった！ お前か！？ どうしたら元に戻るんだ！」

起き上がってアリスの襟を掴み、激しく問い質す。普段から表面上は取り繕っても、心の内では感情の起伏が乏しい。そんな俺がここまで激情に任せた態度を取っていることに自分でも驚きだが、しかしどうしても止められない。一歩後ろから冷静に成り行きを見ている俺は、表面で怒声を上げてアリスを揺さぶっている『俺』を、理性で抑える事が出来なかった。

アリス

「おっ、おお、落ち着いて下さいご主人様っ！ 落ち着いて、リビングで、座ってお話し致しましょうっ」

思いつきり揺さぶられて、首が前後に行ったり来たりするアリス。

これで落ち着いてなどいられない。何故ここまで感情が暴発しているのか、自分でもわからない。まるで自分ではない誰かが、俺の代わりに『さき』の身体を動かしているかのようだ。

……しかし、これでは話が進まないよな。アリスはちゃんと話すとやっているのだから、ここは素直に応じるべきか。そもそもこうやって声を荒らげても、何も得るものは無い。平静を欠いては正しい判断が出来なくなるし、こんなの俺らしくない。元に戻るためには、俺は俺でいなければ。

有希

「落ち着いたら話してくれるのか？」

アリスの襟を掴んだまま問いかける。

アリス

「ハ、ハイ、はあ、ふう……落ち着きましたか、ご主人様？」

有希

「うん、落ち着いた」

そう言っただけでいた手を離し、アリスの呼吸が収まるのを見守る。苦しそうに胸が上下しているのを見ると、先程までの狂乱ぶりが甚だアホらしく思えてくる。何故あそこまで取り乱したのだろうか？ 物事には『始まり』があれば必ず『終わり』がある。俺たちの身に起きているこの現象にも、必ず『終わり』がやってくるはずなのだ。今の『十六歳の母』状態も、その内きつと終わる。何事も『永遠』なんて無い。……これはちょっと誤解を招きそうな言い方だな。でも、とりあえずつとこのままって事はないはずだから、そう焦る事はない。もう少し気楽にいこう。

有希

「……大丈夫？ ごめんね、取り乱しちゃって。私はもう大丈夫だから、行こっ」

アリス

「あ、はい。あの……ご主人様？」

有希

「ん、なに？」

アリス

「あの……言葉遣いが、女の子口調に戻ってます」

有希

「……あ」

アリス

「ご主人様、ラズベリーティーはお嫌いじゃありませんか？」

有希

「んー、飲んだこと無い。どんな味？」

アリス

「ほうっ……と落ち着くような、甘い香りがします。ラズベリーティーには収れん作用がありますので、軽い下痢、生理痛、歯肉炎、のどの痛みなどに良いんですよ」

着替えてリビングにやってきた俺は、アリスにお茶の準備を任せた。今度こそは！と、目を血走らせる勢いで訴えてきたからだ。俺も、お風呂に入られてからのアリスの態度を見ると、もう襲われる心配は無いように思えてきたからな。たぶん大丈夫だろうと判断して、お茶を淹れる事を許した。

有希

「へえー、なんだか良さそうだね」

アリス

「はい。それに『妊婦のハーブティー』と言われるだけあって、飲むと母乳の出が良くなりますし、何より子宮を刺激されますので、これからお子様をお産みになる女性におすすめです。ただ、妊娠初期に飲むのはいけません」

有希

「……………」

アリス

「ご主人様もいっぱい飲んで、安産型になって下さいねっ」

有希

「…………ごめん、飲む気無くしたから、別のにしてももらえるかな……………」

眩い笑顔で言うアリスに、俺は溜め息混じりに呟く。これはもう、男として抵抗を感じる部分があるよね。元々これは俺の身体ではないし、そのうち『さき』にこの身体を返すことはわかっているが、それでも「母乳が出やすくなる」とか「安産型になる」とか言われたら躊躇い百パーセントだ。今のところ、誰の子も産むつもり無いし。…………間違えた。「今のところ」じゃない。この先ずっと、だ。

アリス

「そうですね…………。それでは、タンポポ茶などはどうでしょうか？」

有希

「タンポポ？ タンポポをお茶にするの？」

初耳だなそれ。食べられるって話なら聞いたことあるような気がするが。

アリス

「はい。ダンディライオンとも呼ばれる、れっきとしたハーブティーです。タンポポは全部分が利用でき、一般的に若葉はサラダとして、花はワインに、根はコーヒーの代わりに使用されます。タンポポの葉には鉄分やビタミンCが多く含まれ、春に食べれば血液がさらさらになるといわれています。湯がくと葉の苦味が少なくなつて美味しいですよ」

有希

「へえー、じゃそれにしようかな」

アリス

「はい。あ、それから、タンポポ茶はヨーロッパでは『おねじよのハーブ』といわれるぐらい利尿作用が強いので、むくみ気味の方の強い味方なんです。低血圧の方にはおすすめ出来ませんが、母乳の出は凄く良くなるんですよ」

有希

「……………途中まではよかったのに……………」

なんなのだろう？ アリスのやつ、さつきから超笑顔で、母乳が出やすくなるお茶ばかり奨めてくる。これらのお茶はアリスが準備したもののか？ それとも、この家の標準装備なのだろうか？

有希

「もう、普通の紅茶でいいよ……………」

アリス

「紅茶ですね、わかりました。入れ方はどうしましょうか？ それとお味の方はレモンとお砂糖、どちらになさいますか？」

ポットや茶葉をてきぱきと準備しながら、こちらに顔を向けるアリス。お茶の入れ方なんて、庶民の俺に訊く事じゃないと思うんだが。

有希

「淹茶の方が手っ取り早いでしょ。それと、レモンと砂糖は両方をちよつとだけ入れてね」

アリス

「かしこまりました、ご主人様」

淹茶というのはポットなどの容器に茶葉を入れ、熱湯を注いで蒸らした茶葉を濾別して抽出する方法のこと。ティーパックなんかもこれに当たる。逆に沸騰している湯に茶葉を入れるのを煎茶という。俺は猫舌だから、煎茶だと熱すぎて飲めない。時間もかかるしな。

アリス

「あ、そういえばご主人様、今思い出したのですが……」

有希

「ん？ なに？」

アリス

「もう六時を過ぎてます」

え？ もう？ えーっと、確か二時半ぐらいに交換日記を読んだ筈だから……アリスに抱き着かれながら三時間以上も寝ていたのか。確かに窓の外を見ると、茜色が徐々に空を覆い始めている。でも、それだけ？

有希

「六時がどうかしたの？」

アリス

「あの、朔耶お嬢様をお迎えに行く時間かと」

有希

「……」

有希

「……………」

有希

「……………! ! ! ! !」

ぎゃああー！ー！ー！　　そういえばそうだ、何処の保育園も迎えの時間は六時頃だった！　こんなところでお茶飲んでる場合じゃねえ！

有希

「ああんもっつ、もっと早く気付いてくれればいいのにつ。っていうか私なんでさっき気絶してたの! ?」

アリス

「あ、それは…………その、私が、押し倒して、それでご主人様が、後頭部を強打して…………」

有希

「押し倒したあ! ?」

アリス

「ひいっ!」

ティーセットを持ってテーブルに近づいたアリスは身体を竦め、カップをひっくり返しそうになった。

有希

「まったく、アンタは…………性懲りもなくそんなことを…………」

アリス

「ううっ、ご主人様が、可愛すぎるのがいけないんですっ」

泣きそうな顔から一転、開き直って強めの口調で言い返すアリス。…………その言い種はなんなんだ。可愛い人は、襲われても文句は言えないっていいのか？

有希

「で、押し倒した後はどうしたの？」

アリス

「ギクッ！」

だから口でギクッて言うなって。

有希

「で、どうなの？」

アリス

「……ちゅ〜……」

唇を指で触れ、恍惚とした表情をする。またコイツは幸せそうな顔しやがって。

アリス

「……今度は、ディープで……」

恐ろしいこと言い出しやがった。

有希

「させません！」

アリス

「……しました」

有希

「……！！」

……え？ 『今度は』って、次はディープでやるってどういう意味じやなくて、もうディープでやったって事？

……そういえばさつき、口の中が妙にベタついていたな……お前の唾液のせいかなぁ！

有希

「もう許さない！ 私が帰るまでに覚悟しておきなさい！」

アリス

「！……あつ」

そう言っただけはバグをひっ掴んで外へ飛び出した。アリスへのお仕置きよりも、今は朔耶を迎えに行かなければ。

アリス

「こつちですご主人様！」

有希

「はっ？ え、ちょ、ちょっと、何処行くの！？」

駐車場へ向かって走っていた俺の腕を掴み、反対方向へ引つ張りだしたアリス。完全に出遅れた筈なのに、全くタイムロスせずに靴を履いて走っていた俺に追いつくなんて、いったいこの猫耳はどんな脚力してるんだ。しかもよく見ると、両足履くのに一分くらいかかりそうな意味のわからない靴を履いている。男の俺には、履き方すら想像も出来ないし、形状を言葉で説明するのも多分無理だろう。部屋の中では裸足だった筈だが、どんな魔法を使ったらこの早さで追いつけるのか、この猫耳メイドはつくづく理解出来ない。

アリスに手を引かれてやってきたのは、家の裏手にある一台分の小さなガレージだった。家の表側しか見てなかったから、こんなところに車庫があるなんて全然気付かなかった。

中にあつたのは、グラン・ツーリスモ・オモロゲート、所謂GT  
Oだった。クーペタイプで小さいが、かなり改造が施されているの  
が一目で解る。普通とはだいぶ違って、何て言うか……トラ スフ  
オ マーみたいな形になっているからな。誰の車だろうか。『さき』  
のお母さんか？

アリス

「行きますよ、乗って下さいご主人様！」

有希

「あ、うん……ええ！？ これアリスの車！？」

嘘だろ、なんで猫耳つけたエロメイドが、こんなのに乗ってるん  
だよ！ あり得ねえ！

俺はアリスに無理矢理助手席に押し込まれ、言われるままに変な  
形のシートベルトを締め、暗澹たる気持ちでベルトにしがみついた。  
こんな改造車に乗る人間は、スピード狂であると相場が決まってい  
る。こんな可愛い顔をしてはいるが、この車に乗るということは、  
アリスもきつと俺の心臓を縮ませるような運転をするに違いない。

乗り物酔い、しないかなあ……。

アリス

「あ、それとご主人様っ！」

有希

「今度は何！？」

アリス

「また言葉遣いが女の子口調になってました！ 私の前では遠慮は  
無用です！」

有希

「…………あ」

由利

「こんにちはあ、二神さ……………どうかしたんですか？」

有希

「はあ、はあ、はあ……………お、お気になさらず……………」

空も橙色に染まり、俺の顔色が蒼白を超える限界ギリギリの頃に目的地に到着した。朔耶の通う保育園はそれなりの規模で、ちゃんとした駐車スペースがある。何台分かは……………ちよつと待って、今それどころじゃないから。ヤバい、マジで吐きそうだ……………。

アリスに車から出ないことを厳命し、一人やってきた俺を待つていたのは、俺の元クラスメートの由利だった。昨日も由利が迎えてくれたが、今日の勤務は遅番なのだろう。降園で少なくなつた園児達の面倒を一人で見ていた。

有希

「はあ、はあ……………由利先生、お一人ですか？」

由利

「あゝ、一応美代子先生もいるんですけどお、『用事を思い出した』って、どっか行っちゃいました。すぐ戻るとは言っていましたよお」

相変わらず間延びしたしゃべり方をする由利。由利からすれば『さき』は五歳も年下なわけだが、ちゃんと敬語を使ってるんだな。

若い保護者さんとはすぐに仲良くなりそうだが、公私はきっちり分けられているようだ。ちょっと安心。

有希

「そうなんですか」

由利

「はい……というわけで、さきちゃん、明後日の日曜日一緒に遊びに行こーよあ」

有希

「……ええ？」

……前言撤回！

由利

「だってさきちゃん、いつも忙しいって断るでしょ？ たまには遊ぼーよあ。朔耶ちゃんも一緒にさあ」

有希

「あー、えっと、あの……」

……どうやら誰も見ていないと、由利はこつこつ態度になるらしい。しなだれかかる様に軽く抱き着いてきて、上目遣いに猫なで声で誘う由利。俺としては、由利は一度は好きになった女性だ。俺を『有希』だと認識してはいないとはいえ、こんなことをされると流石にドキドキする。由利の外見は特別可愛いという訳ではない。ただ、なんていうか……フェロモン、いや、むしろエロモン。そう、そんないやらしい気分にはさせてしまうような物質を大量に放出しているようなのだ。

しかし、明後日か……クラス会は明日だから、明後日は特に用事は無い……よな？ うーん……行ってもいいかな？ いいよね？

有希

「あ、じゃあ、いきま」

アリス

「ご主人様、日曜日は母の日です。朔耶お嬢様がお料理を振る舞って下さる筈では？」

有希

「……あつ、そういえばそうだった」

あーそうだったか、明後日は母の日か。そういえば昨日、「お母さんはゆっくりしててー！」って朔耶に言われたっけな。危ない危ない、忘れるところだったよ。

……ん？

有希

「あれ、アリス？ 私、『来ないで』って言ったよね？」

アリス

「……っ！」

有希

「車で待つてるように言ったよね？」

アリス

「……（ガクガクブルブル）」

有希

「それと、なんで朔耶が料理作ってくれること、知ってるのかなあ？」

アリス

「はうう……っ」

俺が詰め寄れば詰め寄るほど、アリスは小さくなっていく。終い

には園の玄関から外に出て、砂場に座り込んで『ご主人様好きご主人様好きご主人様好き』などと書きなぐっていた。俺はそれを見てゆっくりとアリスに歩み寄り、アリスが書いた字を全部踏みつけて消した。ついでに軽く指も踏んでやる。悲鳴（喜声？）が聴こえたけど無視。

有希

「すみません、えと、そういうわけで、明後日はダメなんです……」

由利はポケツとした顔で俺とアリスに視線を送る。無理からぬ反応だ。秋原でもないこんな辺鄙なところでメイドのコスプレなんて滅多に見られるものじゃないからな。俺もアリスに会うまでは二次元でしかメイドを見たことがなかった。やはり流石の由利も、珍しい生物としてアリスに興味を持つのは当然か。だが、あまり近づかれると困る。背後から「……ハッ！ 帰ったら、ご主人様のお仕置き……ハアハア」なんて声が、小さく聴こえてくるから。今の台詞が由利の耳に届いていないことを、切に願う。

有希

「ホントにごめんなさい。また今度誘ってください」

由利

「……すげえ、リアルメイドさんだあ！」

ステージスゲー言いながら、歩み寄ってチヨロチヨロとアリスを観察する由利。それに気付いて、直ぐ様立ち上がって慌てて衣服を整え姿勢を直し、ニコツとお仕事スマイルを見せるアリス。同様にニコリする由利。更にニコリアリス……この二人、放つといたら勝手に仲良くなりそうだな。由利って、何気に百合レズの才能あるし。てゆーか家にメイドがいるとか、恥ずかし過ぎて誰にも言えねーよ。しかも放つとけば『さき』までその被害を被る事になるんだから、

それだけは避けたいところ……待てよ、逆にここで由利と仲良くなくて、色々と助けて貰おうかな。協力者が純だけじゃちょっと心許ないし、アリスは危険すぎる。女の子的な知識は女の子に訊く、そういう意味で由利はうってつけの相手だ。高校時代は女扱いされなかったって言うし、それってつまり、男心を少しは判ってるって事だよな。実際純と下ネタ話で盛り上がってる所を目撃したこともある。元々俺は由利とは仲が良かったから、何も問題は無い。逆に俺が『有希』だという事をばらしてしまった方が、後が楽になるかも……。

アリス

「ご主人様、せっかくですから、由利様もご招待なさっては如何ですか？ 由利様も朔耶お嬢様の作る料理、楽しみでしょう？」

由利

「あー、それがいいーよー！ ね、さきちゃん、そうしょっ！」

俺にメイドが憑いている事にはなんら突っ込まない由利。

有希

「え？ あー、うん……そうですね。じゃあ」

由利

「イエーイ！ さきちゃんの家！ さきちゃんの家！」

由利が跳び跳ねて喜ぶ。アリスはそれを見てニコニコしながら、時折こちらにちらりと目を向ける。どういう意味の視線なのかは解らないが、どうせまた善からぬ事を企んでいるに違いない。アリスと一緒にだと常に警戒しないといけないから、気が休まらないな。

保育室に行くと、子ども達がテレビを観ていた。『しまじろだ。恐竜の国にやって来たしまじろ。う達が、元の世界に戻るために恐竜達に協力を頼んでるシーンだ。』

食い入るように画面を見つめる子ども達。しまじろ達を持ち上げて運ぼうとする翼竜に向かって、がんばれーがんばれーと可愛い声援をあげる。遂に翼竜は飛び上がり、しまじろ達は元の世界に戻る事が出来た。そして画面が黒くなる。あ、放送じゃなくてビデオだったのか。考えてみたら、この時間にしまじろは放送してなかったな。

由利がビデオを片付けていると、一番後ろに座っていた朔耶が俺に気付いた。

朔耶

「お母さん！」

パツと立ち上がって俺に飛び付いてくる朔耶。俺はその場で膝をつき、小さな朔耶を後ろにひっくり返りそうになりながら抱き止める。そのまま暫くキャツキャウフフした後、朔耶を抱き上げて朔耶のカバンを手にとる。首に回された小さな腕はぶにぶにと柔らかく、俺の目の前で靡く髪からは純の家の *birista* のいい匂い。その表情は、どこぞの吸血鬼の妹様のように純粹で無邪気だ。

あーもう、可愛いなこんちくしょう。なんかもう、一生こうしていたくなる。このままお持ち帰りしたいぜ。って、これから一緒に帰るん……あれ？ お持ち帰りって、何処にだ？ この姿になった今、実家には帰れないってのに……。

そう思うと、ちょっとだけ心が痛んだ。今朔耶の目の前にいるの



「どーしたのー？」

「さくやなんでー？」

「だいじょーぶー？」

と声をかけてくる子ども達に、大丈夫だからと言い、朔耶を抱き直して職員室に連れていく。後ろから由利とアリスもついてきて、困ったように様子を伺っている。

有希

「ね、どうしたの朔耶？ 何かあったの？」

朔耶を園児用の椅子に座らせ、視線を合わせて訊ねる。少しは落ち着いてきたようだが、それでも目から流れ落ちる滴は止まっていなかった。

朔耶

「だって、だって……お母さんが……」

有希

「え？ お母さん？」

俺が自分を指差して訊ねると、首をコクンと縦に振る朔耶。……俺のせい？ 俺、何かしたのだろうか？ 来るのが遅かったからか？

朔耶

「だって、お母さん、悲しい、から。朔耶の、せい、でしょ？」

「……」

一同、声を失った。

朔耶

「朔耶が、いるから、グズツ、お母さん、大変……」

有希

「……………」

由利

「朔耶ちゃん……………」

アリス

「お嬢様……………」

朔耶は俺の感情を敏感に察知し、それを自分のせいだと思ったよ  
うだ。何故俺の気持ち解ったのかは判らないが、これは朔耶のせ  
いではない。俺のせいだ。全ての非は俺にあり、朔耶も『さき』も  
悪くない。

有希

「うっん、朔耶のせいじゃないの。大丈夫。お母さん、大丈夫だか  
ら」

朔耶

「……………お母さん!」

有希

「ごめんね朔耶」

朔耶をしっかりと抱き締める。朔耶の小さな身体から温もりが伝  
わり、先程の心の痛みが溶解していく。

アリス

「うっ、うっ……………お母さん!」

有希

「えっ!? ちょっと、何してんのアリス!」

何故かアリスが号泣気味で後ろから抱き着いてきた。

由利

「あつ、私も！ お母さん！」

有希

「なっ！ 由利先生まで!？」

由利は逆に超笑顔だった。

職員室の外から投げ掛けられる、子どもを迎えに来たお母さんと、こっそり帰ってきていた美代子先生の怪訝な視線が痛かった。由利、後で美代子先生に怒られるだろうな。

## 14 味噌汁

二神家に戻ってきた俺は、アリスと一緒にキッチンに立った。俺が晩御飯を作ろうとしたのだが、やはりアリスが譲らなかつたのだ。メイドがいる意味が無くなると、必死に説得してくる。そもそも俺はメイドを雇った覚えはないんだが……。そこで俺は少し卑怯だが『ご主人様権力』を使って、しかし俺が一人でやるとまたアリスがいじけてしまったため、二人で料理をすることにした。別にアリスに全部作らせても良かったのだが、なんとなく、その……。一時的ではあるが、朔耶の“母親”として料理を作ってあげたかった。別に腕に自信があるわけではないが、しかも実際は赤の他人なのだが、それでも朔耶は俺の中では“家族”という認識が既にあるみたいだし。まあいいか。アリスもメイドとして主人に自分のじまんの手料理を振る舞いたいのだろう。それはそれで楽しみだ。

有希

「それで、アリスは何か作りたいのある？」

アリス

「えっ！？ あっいえ！ その……！」

有希

「？ どうしたの？」

アリス

「あ、あうう……」

有希

「？」

顔を赤くするやら青くするやらで、だらだらと滝のように汗を流すアリス。俺はアリスの真意が掴めず、首を傾げるばかりだった。

有希

「言わないなら、特に無いと判断するけど」

アリス

「ううう、うっ、ひっく……」

有希

「なっ！ どうしたのアリス！？」

遂には床に座り込み、しゃくりあげる始末。俺は全く意味がわからず、なす術なくおろおろしていたが、ふと思いついた事を訊いてみた。

有希

「アリスって、もしかして……」

……ちょっと残念な結果になってしまった。先程も言ったようにアリスは俺と朔耶に手料理を振る舞いたかったのだろうし、俺も楽しみだった。しかし、根本的な問題を、俺は知らなかった。

アリスは、料理が出来なかった。

聞くところによると、今までは自分でご飯を作る必要が無い環境にいたらしい。他の家事はほぼ全般得意だが、唯一料理だけは知識が欠落しており、料理をすと言いだした方がいいが、料理の仕方を知らないことを、俺に訊ねられてから思い出したようだった。

結局俺一人で料理を作り、アリスには出来た順から料理を運ばせる。アリスは今や絶望状態で、俺が何か指示を出すと「ご主人様はこんな無能なメイドはいりませんよね……」とか「私って存在価値無いですよね……」とかネガティブな事を一言呟いてから動き出す……はつきり言わせてもらうと、うざったい事この上ない。流石に見てられないので、既に料理は全部完成したが、一品余分に作ることにした。

アリスに手招きし、キッチンに立たせる。俺が後ろに立ち、細かに指示を与え、俺は機材や食材の準備だけをする。テンションがた落ちではあるが、言われた事はきっちりこなすアリス。

まずは鍋に水を入れて火にかけ、じゃがいもと玉葱の皮を剥かせる。じゃがいもは1?角に切り、玉葱はアーチ型に。沸騰直前で弱火にして両方湯の中に入れる。赤味噌をちよつとだけ掬って湯に溶かせ、偶然目に映った味の素を小さじ一杯入れる(今時味の素を使ってる家庭も珍しいな)。最後にお湯で溶かした蜂蜜を少量入れてこれで簡単な味噌汁の完成。隠し味に蜂蜜とか、入っている具が玉葱とじゃがいもっていうのも珍しいが、俺はあまり凝ったものよりもこうなのが好きだった。これなら簡単だからアリスにも作れるし、朔耶もおいしいって言ってくれるはずだ。

アリス

「……手抜き料理っぽいんですけど……これで良いんですか？」

有希

「いいのっ。ほら、早く運んで運んで」

納得いかない顔で味噌汁を運んで行くアリス。全く、料理した事がない人が何を言ってるんだか。……まあ俺も元々料理する人じゃないけど。

有希・朔耶

「「いただきますーす」」

アリス

「……いただきます……」

三人で食卓に着いて食べ始める。やはりここでもアリスと一緒に食べようとはしなかったが（メイドが主人と同じ卓で食べるなんて！ という事らしい）、俺は先程と同様に『ご主人様権力』で無理矢理座らせ、箸を持たせた。朔耶はアリスを見て少し顔が強張っていたが、俺が大丈夫だと言い聞かせると、少しだけホッとしたような顔をした。

そして朔耶が先に食べ始め、どの料理も凄く美味しそうに平らげていく。朔耶は凄く少食らしいからそれぞれは一口ずつになっているが、まだ少しお代わりはあるから大丈夫だろう。いざって時は俺が全部食べるし、足りなければ俺のを食べさせよう。俺は基本大食いだが、幼児並みの量でも普通に過ごせる。

そして最後にアリスが作った味噌汁に手をつけたとき、アリスが息をのんだのが気配で感じられた。

アリス

「……………」

固唾を飲んで見守るアリスを尻目に、朔耶はあつという間に味噌汁を飲み干した。そして後からじゃがいもと玉葱を食べる。全部飲み込んで俺の方を向き、元気な声で

朔耶

「美味しいっ」

アリス

「っ！」

アリスは涙を流した。

有希

「その味噌汁ね、アリスがつくったのよ」

アリス

「あつ、ああ、お嬢様がっ、わ、私のっ、ううっ」

顔を覆って泣き始めたアリスの肩に手を置いて一言「良かったわね」と声を掛け、俺は食べ終えた朔耶と自分の分の皿をキッチンに持って行く。朔耶はアリスに駆け寄り、「美味しかったです。また作ってくださいね」と言っていた。更に号泣アリス。朔耶もアリスに対する恐怖は完全に消えてしまったようだ。これなら、この先も仲良くやっていけそうかな……………。

有希

「というわけで、全部吐いて貰うよアリス」

アリス

「ハイ……ご主人様……」

夕食が終わり、俺は真つ先に朔耶を部屋に行かせた。さっきは結構感動的なシーンだったが、俺としてはそれ以上に重要な事がある。これから起こる惨劇は、朔耶にはちよつと見せられるものじゃないし。

家を出る前に俺に対してアリスが口走った「男の子」の真相を知るべく、そしてGTOの暴走ドライブに対する腹いせのため（帰りは朔耶がいるため安全運転だったが）、俺はダイニングの椅子にアリスを縛り付けて尋問を開始

アリス

「はぁ、はぁあつ、はう」

有希

「……」

開始しようとしたが、まだ何もしてないのにアリスは頬を桃色に染め、苦しい姿勢でもないのに既に胸を荒々しく上下させ、身体をもぞもぞと動かしている。脱け出せないと知っていながら、わざと動いているようにも見える。縄の感触を楽しむかのように。あと理解出来ないのが、脚は縛ってないのに何故か椅子の上でM字開脚をする。何でだ？ 見られて気持ちいい人なのか？

アリス

「ああ、う、ご主人様……ハアハア」

……逆に喜んでるようだから、やっぱり縛るのはやめよう。真性のマゾにはこんなのは通用しないものらしい。そもそも縛ってのは逃がさない為に縛るのであって、喜ばせる為のものではないからね。この状況にはそぐわなかったか。それにアリスはちゃんと話すって言うってたわけだし。マゾにお仕置きは褒美あげてるようなもんだ。

仕方なく縄を解いてやり（不満そうな顔をされたが無視）、リビングのソファに座らせようとした。が、やはりアリスはそのまま座りはせず、お茶を淹れる為にキッチンへ向かった。

……どうしようもないほどのDMだけど、仕事はきっちりこなすんだね。そこだけが唯一の救いだよ。

タンポポの花を添えたティーポットとカップを持って現れたアリスは、完全に仕事モードに入っているらしい。ついさっきまではあんなに顔を赤く、息を荒くさせていたのに、今はそれを感じさせない程に真面目な顔でティーセットを並べていく。

有希

「このタンポポはなんなの？」

アリス

「タンポポ茶ですので、なんとなく添えてみました」

有希

「タンポポ茶淹れんなあああゝ！！」

「どんだけ俺に母乳出させたいんだお前は！」

アリス

「お、落ち着いて下さいご主人様っ！ 先ずは落ち着く為にこのタ  
ンポポ茶を」

有希

「ぶち殺すぞ」

アリス

「淹れ直します……」

アリス

「お待たせ致しました……」

俺の目の前にカップが置かれ、軽く頂垂れた様子のアリスの手で  
紅茶が注がれる。ソーサーにレモンの切り身とシュガーが添えられ  
ている。うん、紅茶とレモンの香りが良い感じだ。

有希

「さ、アリスが知ってることを全部話して」

アリス

「はい、ご主人様」

紅茶から湯気が立ち上がり、俺の視界に入り込む。アリスは俺の  
対面に座り、真っ直ぐな瞳を俺に向けた。

アリス

「ご主人様は、私の弟とは会いましたか？」

有希

「んう？　ありふのおふおうふお？」

温い（ぬるい）紅茶で火傷した舌を出しながら、ちよつと行儀悪く言う。アリスに弟がいるのか。どんな人だろう？　姉のアリスがこんなにドMでしかも押し掛けメイドなんて迷惑な真似をする奴だから、弟もやはり常識人ではないかも？　でも、その弟がこの話にどう関係するのだろうか？

有希

「会ってないと思うけど……その弟さんがどうかしたの？」

アリス

「実は私、ご主人様の事は弟から教えて貰いました」

有希

「……………??」

俺の事を教えて貰いました？　どういう事？　俺が男である事を知っているのは、純だけである筈だ。アリスが三十歳の純よりも年上だとは思えないし、そもそも純に姉はいない。妹さんがいるだけだ。

有希

「その弟さんは、なんで俺の事を知ってるの？」

アリス

「弟は幼い頃から不思議な力を持ってまして、遠くの風景を視る事が出来るんです」

有希

「遠くを視る……………」

……………。

有希

「はあ？ 遠くを視るって……視力が良ければ誰だって視えるじゃん」

何を当たり前な事を言ってたんだ。俺だって視力2.0だからめっちゃ遠くまで見えるぞ。左目限定だけど。

アリス

「あ、いえ、視力の話ではなくてですね、凄く遠い場所の風景を視る事が出来るんです。“遠視”というやつですね。例えば、海の向こうにある国とか、地球の裏側の風景とか」

有希

「……地球の、裏側……そんなの、無理に決まってるでしょ……」

あまりにも非現実的過ぎて、簡単に信じられるものではない。だがアリスは真剣な顔で尚も言う。

アリス

「出来るんです。『さき』様は、時折朔耶お嬢様を置いて何処かへ出掛ける事があります。そんなとき弟はそれを『視て』、ここ二神邸にこっそりやって来ては朔耶お嬢様にご飯を作ってあげていんです」

『さき』がいない間に、朔耶にご飯を作って……あっ！ それっ  
てもしかして

有希

「それって……ジハードの事？ ジハードがアリスの弟なの？」  
アリス

「そうです。ちょっと変わった弟ですが、繊細で心優しく、昔か

ら『さき』様の事が大好きなのです。何かお困りであれば、弟が必ず助けられます。実際朔耶お嬢様にご飯を作るために二神邸に来ていたジハードが、街で強引にナンパされてパニックになっていた『さき』様を視て、警察を呼んで助けさせた事もあります」

ジハードはアリスの弟だったのか……。『さき』がいない時は、アリスの弟のジハードが朔耶の面倒を見てくれていた。おかげで『さき』も心置き無く外出……。それはちよつとマズいか。でも、『さき』を助けてくれていた事は素直に有り難い。遠視の力も気になるし、一度会ってみたいな。……。あれ？

有希

「そういえば、ジハードと『さき』は知り合いなの？」

知り合いでもないのに毎日遠くから覗かれていたのでは、助けられていたとしても、ちよつとアレな感じだな。それに、『さき』がいないときしか来ないと言うのも、なんなのだろう？

アリス

「はい。『さき』様とジハードは幼馴染みであり、現在高校のクラスメートです」

有希

「え、そうなの？」

幼馴染みでクラスメートか……。だったら堂々と来たらいいのに、何かそれが出来ない理由でもあるのだろうか。

有希

「『さき』がいるときはジハードは来ないって朔耶が言ってたけど、

それは何か理由でもあるの？」

アリス

「ああ、それですね。来ないと言うよりは、『さき』様に近づかないのです。本当は口止めされていたのですが、この際全部言っちゃいましょう」

そう言ってアリスは俺の紅茶を取って一口飲むと、急になんだかうっとりした表情になった。

アリス

「ジハードは、『さき』様の事を愛しているのです」

有希

「……………??？」

まるで自分が恋をしているかのように熱い溜め息を一つ吐き、アリスはまた俺の紅茶を飲んだ。

ジハードは『さき』を愛している……………愛しているから会わない？

アリス

「先程も言った通り、ジハードは周りの男の子達とは少し変わっています。その“少し”が、子ども達の目には異形に映るよう……………。幼い頃からイジメを受け続け、それは今も少なからず続いているよ。うなのです。今ではジハードに友達はいません。皆がイジメの飛び火を恐れて、ジハードに声をかけることすらしないのです。高校に入学したばかりですが、同じ中学だった子が酷いらしくて、周りの皆も直ぐに避けるようになってしまったと」

有希

「……………『さき』に近づかないのは……………」

アリス

「巻き込まない為。そして、自分の気持ちを『さき』様に知られないためです」

ジハードは近づかずに遠くから『さき』を見守り、そして近づかないことで『さき』を守っていた。

アリス

「遠視の力があつたからこそ、ジハードは正気を保っていられたのかもかもしれません。嘗てジハードが受けたイジメは想像を絶するもので、今もその身体には酷い傷が残っています。そして、その傷は心にも深い穴を空けてしまいました。しかしジハードにとって一番耐えられなかったのは、己が身に受ける痛みよりも、『さき』様の御心が壊れる事だったのです」

有希

「……『さき』の心が、壊れる……？」

……さっぱり解らなかった。だんだんと頭の中が真っ白になり、考えが纏まらない。『さき』の心が壊れる？ どうして？

有希

「……ジハードには、会えるの？ 会って話をしてみたい」  
アリス

「ジハードは、それを望んでいません。『さき』様の身を巻き込む可能性がある限りは」

ダメか……。ジハードなら、俺と『さき』が入れ替わった事について、何か知ってるかと期待したのに。でも、せめてこの一つだけは知りたい。

怖い。「戻れない」と言われたらどうしよう。俺は一生女の身体

で、『さき』は一生男の身体。今までの自分の人生を全て捨て去り、他人の人生を歩まなければならぬ。

有希

「……俺と『さき』は……元の身体に戻るのかな……？」

アリス

「戻れません」

有希

「……え」

何の躊躇いもなく、アリスは答えた。アリスは変わらず、真っ直ぐな瞳を俺に向けている。

有希

「待つ、戻れないって……」

アリス

「正確には、ご主人様が男の身体に戻ることが不可能なのです。」

『さき』様はそもそも自分の身体から出てはいけませんし」

有希

「……『さき』は、身体から出てない……？　じ、じゃあ、今も『

さき』はこの身体に……」

アリス

「はい。『さき』様は事故の衝撃で眠っているだけなのです」

俺と『さき』は、入れ替わってなどいかなかった。俺が何かの拍子に『さき』の身体に入り込み、『さき』はそのまま眠りに入った。

……そうになると、俺の身体には今、魂が存在していないって事になるのか？

有希

「俺の身体は？ 俺が元の身体に戻れないのなら、病院で眠っているあの身体はどうなるんだ！」

魂の無い身体は、腐るだけだ。もしかしたら元に戻る方法が何かあるかもしれないのに、その方法を見つけた時に身体が無かったら意味が無い。

アリス

「身体は大丈夫です。ご主人様のオリジナルが、ちゃんと存在しますから」

有希

「え？ 俺のオリジナルって」

アリス

「その前にご主人様。これ、最後までお読みになってないでしょう？」

そう言ってアリスが手にしたのは、『さき』達の交換日記だった。

有希

「その日記は……ちゃんと最後まで読んだけど？」

アリス

「裏表紙までです。『あき』様に言われませんでしたか？」

有希

「『あき』って……！ そんな！ あれは夢だったはずじゃ……」

確かに妙にリアルだったが、夢は夢だ。その夢の中で登場する『あき』の事を、何故アリスが知ってるんだ？

アリス

「ご主人様が見たのは、夢ではありません。心象世界、とでも言い

ましようか。『さき』様の心の中の世界での出来事なのです」  
有希

「心象世界……じゃあ、あの世界の何処かに、本物の『さき』が…  
…」

アリス

「はい、ちゃんといえます。何処か別の部屋で休んでおられるのでし  
よう。ではご主人様、これを」

有希

「……この日記の裏表紙に何が……」

アリス

「見ればわかります。ご主人様が『さき』様の身体に入り込んだ理  
由も、ご主人様なら理解出来るでしょう」

俺は、ゆつくりと裏表紙を捲った。そこには、九枚のプリントが  
綴られていた。

## 15 解離性同一性障害

？はじめに

解離性同一性障害（DID：Dissociative Identity Disorder）は、DSM-5（精神疾患の診断・統計マニュアル 1994）以降の診断名で、一般的にはICD-10（国際疾病分類 精神および行動の障害 1992）の多重人格障害（MPD：Multiple Personality Disorder）が広く知られている。このように多重人格障害とも呼ばれることから、人格障害（境界性人格障害 etc.）と混同されることがあるが、人格障害ではなく、解離性障害（解離性健忘、解離性遁走 etc.）の1つ。誤解を避ける点からも、多重人格障害（MPD）ではなく、「解離性同一性障害（DID）」の呼称を使うことが望ましい。

DIDは幼少期の催眠感受性（被暗示性）の高さを基盤に、度重なる身体的あるいは性的虐待等の外傷体験を通じて形成される。通常DIDでは複数の人格状態が確認される。新たに生み出された人格（交代人格）は、基本人格（出生時にもっている人格）では耐え切れない悲しみや苦しみを引き受けるサバイバル機能、基本人格が自分の心の中にあることを許すことができない憎しみ、敵意、奔放さ、甘えなどの感情を代弁する情緒的な回避機能を担っている。

したがって必然的に、交代人格は基本人格にはない性格を備え、基本人格がもてない甘えの上手さや、激しい攻撃性や憎悪、自傷・自殺衝動などをもっていることが多くなる。本来は統合されて1つにまとまっているはずの複雑な欲求や感情を、バラバラに分けて、それぞれの専門担当の人格に振り分けることで基本人格の負担を軽減し、その人に危険すぎる状況と精神的な崩壊を回避する手段がDIDなのである。

このような状態は、爆弾処理グループが「爆弾処理」を行っている

状態に例えると理解しやすいかもしれない。

爆弾処理に直接手を下すのは1人で十分。グループ（統合された1つの人格）すべてが傷つくよりも、処理要員の1人（交代人格の1つ）だけが傷つくほうが痛手は少ないといえる。また、処理場面は隔離されているため、爆弾処理が仮に失敗しても苦しむのは担当者だけで、他のグループメンバーは、担当者が傷ついても、そのときの様子を見ることはない。

このようにDIDは、小さな子供が、虐待などの耐え難く避けがたい苦しみや困難を、ダメージを最小限に抑えて生き延びるためのサバイバル術だと考えられる。

？解離とは？

解離とは、耐えがたい苦痛による精神崩壊を防ぐために、痛みを感じなくなったり、忌々しい記憶やその時に感じた生々しい感情を自分から切り離すことによつて苦痛から逃れる心理的なメカニズム。解離状態とは、記憶、意識、身体感覚、時間感覚など、本来ならばうまく統合されている精神機能が統一されていない状態。

解離には病的なもの、日常的で健康な人にも起こるものがある。解離状態は病的か否かの二者択一的な判断ができるものばかりではなく、病的で治療を要するに重篤な状態から、誰にでも起きる日常的なものまでを含めた連続的な精神状態の広がり指着している。

### 【日常的な解離の例】

空想にふける

物事に集中していて周囲で起きていることに気づかないぼうつとしていていつの間にか時間が経っている

映画館で気がついたらポップコーンの入れ物が空になっている

考え事しながら歩いていて自分がどこをどう歩いてきたか詳しく思い出せない

【病的な解離の例】

数日間（数時間あるいは数ヶ月）の記憶がポツカリ空白になっている  
痛みや気分不快をまったく（ほとんど）感じない

周囲の人や物が薄いベールで覆われたように見える

確かに自分がしたと思われることについて記憶がない

周囲の出来事が自分とは無関係に進んでいるように感じられる

生き生きとした自分の感情の流れを感じることが出来ない

まるで別人のようだったと他人に知らされるが、そのような覚えがない

気がついたら、まったく見知らぬ場所（あるいは見知らぬ人と一緒）  
にいた

気がついたら大げがをしていたが記憶がない

？同一性とは？

同一性とは、その人が考え、感じ、行動する際の統合感であり、一つのまとまりをもった“確かに自分は自分自身である”という確信をいう。このような同一性は、通常時間や場所が変わっても変化することがない。

しかし、DIDの人は、この同一性が失われて、多くの場合2人以上の自分（人格）をもっている。それぞれの人格は、自分が主役になった（人格交代）ときに基本人格（出生時にもっていた本来の人格）とは異なる独自の行動パターンで振る舞うため、周囲からはまったく違った人物のように見える。

しかし、多くの場合、本人（基本人格）には、人格交代時の他の人格（交代人格）が、何を考え、どのように行動するのかがまったくわからない。基本人格以外の人格は、名前、性別、年齢などが戸籍上と異なることがある。

？よくある誤解

DIDについては、テレビ、雑誌、映画、インターネットなどを通

じてしばしば誤解を招く情報が流れ、その誤解が定着してしまっている節が見受けられる。この障害の人格交代の現象が非常にセンセーショナルで人々の興味を強く惹きつけることから、虐待等の深刻な原因論がなおざりにされ、興味本位の取り上げ方がなされていることが、DIDDに関する誤った知識を広める原因になっている。

誤解1) 性格の多面性との混同

「人には多かれ少なかれ二重人格的なところがある」という人間の性格の多面性を強調する主張がこの種の誤解を典型的に示している。性格の多面性とは、TPOに応じて、口調や応対の仕方に変わがあることを指しますが、DIDDにおける人格交代は、口調や態度の変化だけに留まらない。

各人格間の記憶は、多くの場合完全に切り離されており、その隔離の結果は記憶の喪失という典型的な形をとる。人は確かに多面的な生き物といえるが、その多面性は通常1人の人間の記憶として統一されているものであり、たとえば社長に平身低頭していたときの記憶を、帰宅して妻の前で関白ぶりを披露しているときの自分が思い出せないということはない。

DIDDでは、人格ごとの記憶は独立しており、人格Aから人格Bに切り替わったときに、人格Bが人格Aの考えたことやしたことを思い出すことは通常できない。また、自分はどんなことをしていても自分に変わりないという同一性がないから、“性格に多面性がある”と感じることはできない。DIDDの人の目には、交代人格がしたこととは他人がしたことのように映る。

誤解2) 解離性同一性障害(多重人格障害)は演技あるいは医原病

誤解3) 解離性同一性障害(DIDD)≠境界性人格障害(BPD)

誤解4) 解離性障害≠解離性同一性障害

?疫学

DIDDの有病率は、研究や報告によって様々だが、一般精神科病院の入院患者の0.5〜2%が解離性同一性障害の診断基準を満たし、

全精神科患者の5%が同障害に相当するという報告がある。

女性に圧倒的に多い(90%以上)障害と言われている。しかしこれには、DIDの男性は、犯罪を起こしたりして刑事上の問題となり、診断が遅れたり、治療を受ける機会が限られてしまうことにも関係があると考えられている。

多くの場合、障害が明らかになるのは思春期以降10代〜20代だが、受診年齢の平均は30歳前後。DIDと診断されることはあまりないが、発症時期は9歳以前の幼少期だと考えられている。

?原因

DIDの原因については、一般的に、1)外傷体験、2)解離能力(催眠感受性)、3)一定の環境要因、4)外的な援助の欠如の4つが指摘されている。

DIDを抱える人のほとんどは、子どもどものころの身体的・性的な虐待などの外傷体験をもっていることが指摘されている。外傷体験は直接体験に留まらず、近親者や友人との死別、あるいは事故の惨状やその犠牲者を目撃することも含まれる。

子どもは大人に比べて高い催眠感受性(解離能力)をもっている。幼少期に定期的に外傷体験(虐待etc.)にさらされている子どもは、「これは自分に起こっている出来事ではない」「何もなかった」「痛くない」と自己暗示(自己催眠)をかけることで、避けられない身体的な苦痛を回避しようとする。このような自己暗示とそれによる解離の反復(解離トレーニング)が、容易に解離する神経生理学的な状態を形成し、そね傾向が成人期に持ち越されてDIDの基礎になると言われている。

子どもが外傷体験を耐え忍ぶ構図には、彼らを取り巻く一般的な環境要因が関係している。たとえば、子どもは社会的にも生物学的にも無力であるから、親の庇護なしに生きていくことができない。また子ども自身も親を頼らずに生きていけないことを感じ取っているものである。こうした状況が足かせとなり、子どもが親や周囲の大

人との関係性を断ち切れない環境構造が解離をより促進させていると考えられる。

子どもは社会的な知識や技能が十分でないため、外部に救済を求めたり、解離以外の方法で事態に対処することができない。虐待の行為者が法律上の保護者ということも多く、本来なら救いの手を伸ばしてくれるはずの両親、兄弟、学校の先生、親戚、隣人たちの援助を得にくいことが解離を抑制できない要因の1つになっている。

### ? 診断

ＤＩＤと明確な診断がなされるまでには、通常6～7年かかるといわれている。これは、ＤＩＤの治療経験者が比較的少なく、ＤＩＤが多様な精神症状（幻聴、人格の急速交代、対人関係の不安定さ）を併せもっているため、統合失調症、双極性障害（躁うつ病）、境界性人格障害、社会不安障害などと誤診されやすいためである。

ＤＳＭ-?によるＤＩＤの診断基準は次のようになっている。

#### 300.14 解離性同一性障害の診断基準

2つまたはそれ以上の、はっきりと他と区別される同一性または人格状態の存在（その各々は、環境および自己に対して知覚し、かわり、思考する比較的持続する独自の様式を持っている）。

これらの同一性または人格状態のすくなくとも2つが、反復的に患者の行動を統制する。

重要な個人的情報の想起が不能であり、ふつうの物忘れで説明できないほど強い。

この障害は、物質（例：アルコール中毒時のブラックアウトまたは混乱した行動）または他の一般身体疾患（例：複雑部分発作）の直接的な生理学的作用によるものではない。

注：子供の場合、その症状が、想像上の遊び仲間または他の空想的遊びに由来するものではない。

「DSM-? 精神疾患の診断・統計マニュアル」医学医院（19

DIIDと診断されるためには、少なくとも2つの明らかに異なる人格状態が確認される必要がある。しかし実際には、明確に2つ以上の人格が認められる状態から人格の独立性があまりない状態まで、さまざまな病態が存在すると考えられる（解離スペクトラム）。

人格交代は、他の病気として治療している最中に明らかになってくることも多いが、この際に、DIIDの症例に不慣れな治療者であると、急速交代人格型の双極性障害と混同されたり、また幻聴・幻視などの症状から統合失調症と誤診されたりする。また、神経学的障害の中では、複雑部分てんかんが、もつともDIIDの症状に類似しているので注意を要する。

### ？症状と特徴

DIIDを見分ける最重要ポイントは、先の診断の項目で記したように、

- ・ 少なくとも2つの明らかに異なる人格状態が出現する
- ・ 解離性の健忘

この2つである。

DIIDは、明らかに異なる2つ以上の人格状態が現れる障害。各々の人格状態は、大まかには次のように分類される。

### DIIDにおける人格の種類と説明

基本人格（original personality）オリジナル人格とも呼ばれる。生まれたときの本来の人格。

主人格（host personality）ふだん活動している時間が長い人格のこと。基本人格と混同しがちだが、肉体を支配している時間が長い人格状態を指す。

交代人格（alter personality）基本人格また

は交代人格以外の人格状態。役割分担が決まっていることが多く、子ども人格、攻撃的な人格、奔放な人格など内容は多彩である。

保護人格 交代人格のうち、すべての人格の力関係や肉体を守る役目をする人格。

交代人格は、基本人格（戸籍上の名前をもつ人格）が対処不能な出来事に遭遇して、その事態を何とか切り抜けようとするときに生まれてきた人格である。したがって、交代人格は、基本人格とは対照的で、基本人格にはない行動パターンを身につけていることが多くなる。通常、基本人格は、受動的でおとなしく、願望をストレートに表現できない性格であることが多い。その基本人格に不足したものを補うために創り出されたのが交代人格であるから、交代人格は、基本人格に比べ、攻撃的であったり、社会的であったり、甘え上手であったり、ときには性的に奔放な性格であったりする。交代人格のうち、もつとも広く認められるのは「子ども人格」で、DID治療の本質は、この子ども人格を成長させることだと述べる治療者や研究者もいる。

それぞれの交代人格は、独立した生活スタイル、好み、行動パターンを持ち、基本人格とは、名前、年齢、性別、人種、癖などが異なることがある。

DID当事者は、通常それぞれの人格状態にあるときは、別の人格の存在や、別の人格が経験した記憶内容を失っている。しかし中には、ある人格が他の人格とある程度の共通した記憶をもっていたり、他の人格が優勢なときでも共通意識を保ち、他の人格の活動をそばで眺めている場合もある。ときには、自分以外のたくさんの人格の存在にはつきりと気づいていて、他の人格を、友人、仲間、あるいは敵対者として感じていることもある。

驚愕の内容だった。そこには『解離性同一性障害』、所謂『多重人格』という障害の概要が細かに書かれていた。多重人格は実在する精神的な障害であり、決して演技や都合のいいものではない。俺は学校で解離性同一性障害をテーマにレポートを書いたことがあり、その上解離性同一性障害の友人がいるため、それなりに詳しくかつた。要約するとだいたい以下の通りである。

解離性同一性障害は身体的、精神的苦痛から身を守るための心理的メカニズムである。

身体的、あるいは性的な虐待などが原因となりやすい。

本来なら一つに纏まった記憶や感情・意識が分離し、全く別の人格（自我）が形成される。

2つ以上の独立したアイデンティティ（人格又は自我）が存在する。

一人の中に何百人もの人格が存在することもあり、よく聞く『二重人格』は逆に稀である。

何れかの人格が身体を支配している時、他の人格は意識・記憶を共有していない事が多く、一時的な記憶喪失のような状態が見られる。

とりあえずわかりやすく言つとこんな感じになる。

信じられない気持ちでプリントを読む。何故この日記に解離性同一性障害のプリントが添付されているのか。それは深く考えずとも予想出来た。しかし、やはり信じられない。信じたくない。

『あなたが来るのを待っていたのよ』

嘘だ

『このシステムの保護者よ』

嘘だ嘘だ

『あなたに、幸を守って欲しいの』

……

『さき様はそもそも自分の身体から出てはいませんし』

……

『さき様の心の中の世界での出来事なのです』

……

『ご主人様のオリジナルが、ちゃんと存在してますから』

「……き……ゆうき……」

有希

「……ん、誰……?」

少女のような高い声が、遠くからよく響くように聴こえてくる。俺は微睡みながらその声を耳に受け、声の主を思い出そうとする。

光

「有希!」

有希

「うわっ!?!」

気づけば隣にいた光が耳の近くで叫び、俺は冗談ではなく飛び上がった。

有希

「ビックリした……光か。なんだよいきなり」

耳を押さえながら光を睨む。だが光は逆に詰め寄ってきて、俺を下から睨み上げてきた。

光

「あなた……日記はちゃんと読んだんでしょっかね?」

有希

「……………」

……そうだ。思い出してしまった。

『解離性同一性障害』

考えたくなかったが、一度想起してしまうと脳裏から離れない。

『さき』は、解離性同一性障害なのか？

今日の前にいる光は、『さき』から解離した交代人格なのか？

この黒い世界の何処かに、本物の『さき』がいるのか？

『俺』は、いったい誰なんだ？

光

「あなたが予想している通り、さきは解離性同一性障害よ。そして私はこの世界の保護人格であり、上層階のISH（inner self helper）なの。理解出来たかしら」

有希

「……『俺』は、誰なんだ……？」

光

「あなたはさきが想像した、『犬神有希』のコピーよ」

有希

「……『さき』が、想像した……コピー？」

光はまっすぐに俺の瞳を見つめてくる。光の目には俺が映り、しかし虚ろな俺の目に光は映っていなかった。

人格の解離によって生まれてくる交代人格の記憶や性格に、確かな規則性は無い。基本人格の心の奥底にある、怒りや寂しさ、衝撃

などの感情に応じた人格が生まれる事もあれば、たまたま読んだ小説に登場する人物の性格をそっくりコピーしたかのような人格が生まれる事もある。俺の場合は後者だった。

『さき』の交換日記によれば、『さき』は一昨日の水曜日に俺に……いや、『犬神有希』に会いに行った。その時に『さき』は『俺』という人格をコピーした……。

光

「理解したのね。そう、あなたは本物の『犬神有希』ではない。『犬神有希』をコピーして作られた、ただの交代人格よ」  
有希

「……………」

これほどショックな事は無い。これまで積み重ねてきた21年間の記憶は、全て虚像だった。……全てが嘘だった……？

光

「嘘ではないわ。さきは『犬神有希』の事をよく知っていた。『犬神有希』のブログは毎日見ていたし、友達に訊いたりもした。……『y u - k i -』の事は知ってるでしょ？ さきは昔から彼女とは仲が良かったの。同じ解離性同一性障害をもつ者同士だから」  
有希

「…………… y u - k i - と……………？」  
光

「いろいろと聞き出したみたいよ。『犬神有希』のブログに書き込みしたのも、さきで間違いないわ」

……………もう、訳がわからなくなってきた。何も考えられない。何も考えたくない。……………あ、なんかこの状況ってデジャヴュだな。確か

『彼女は、存在しない』っていう小説だったか。自分が交代人格だという事に気付かなかった少女が、最後の最後に自分がある小説のヒロインをコピーした人格だという事実を知り、絶望する。そして「私は、存在しない」と呟く。全く同じだ。

俺は、存在しない。

膝がガクンと折れ、その場に座り込む。視界には何も映らず、耳には何の音も入らない。

俺は、存在しない。

元から自分の身体など無い。生きてるだけで『さき』や他の人格達に迷惑を掛けることになる。解離性同一性障害を治すには、全部の人格を統合したり、あるいは他の人格達を殺す方法がある。交代人格が一人でも減れば『さき』に掛かる負担は軽くなる

光

「ふざけないで！」

有希

「っ」

気づけば顔が右側に向いており、徐々に左頬がジンジンと熱くなってくる。どうやら頬を叩かれたらしい。

光

「勝手に消えようとしないでよ！ 私達はさきを守るために生まれたのよ！ さきが苦しまないようにするためなの！ あなたが必要

だから生まれたのよ！ さきを救うために！ だから、勝手に消えようとなんてしないで……！」

有希

「……………」

微かに輝くものを瞳に湛えた光は、膝をついて俺を抱き締めた。柔らかい肌の感触が俺を包み、少しだけ落ち着きを取り戻した。

光

「交代人格は皆、必要だから生まれるの。あなたならさきを助けられるから。事故の衝撃でさきはまた下層に潜ってしまった。だからその間、あなたに身体の方を任せたいと思ってるわ」

……………身体を任せるって……………。

有希

「……………俺、男なんだけど？」

光

「あなたなら大丈夫。私は信じてるから」

有希

「……………」

## 17 クラス会（前書き）

第一章の最終話です。

## 17 クラス会

アリス

「……大丈夫ですか、ご主人様？」

目を覚ますと俺は、リビングのソファでアリスの腕に抱かれていた。

有希

「また寝てたのか……」

アリス

「ええ、ぐっすりと」

有希

「ごめん、しょっちゅう迷惑かけちゃって」

アリス

「いえ、構いません。その分私も楽しませていただきましたから」

……何を楽しんだのだろうか？ よく見ると若干鼻血の痕が見えなくもない。

有希

「……じゃあ、そろそろ放してくれる？」

なんかもうどうでも良くなっちゃった俺は、放したからないアリスの手をやりわりとほじめてソファに座り直し、今見た夢……いや、システム内（心象世界）での出来事を考える。

『さき』と俺は、入れ替わってなどいなかった。『さき』は解離性同一性障害で、俺は『さき』の中で交代人格として生まれた。『犬神有希』と『さき』が同時期に事故を起こしたのはただの偶然で、『犬神有希』という実在する人物をコピーした人格（つまり俺）が生まれたのも、全てが偶然の産物だったのだ。

光は俺に、『さき』の身体を任せると言った。『さき』はシステムの下層に潜り、暫くは出てこない。その間俺は子持ちの女子高生として過ごさなければならぬ。それ自体は別に構わない。普段の生活はアリスがサポートしてくれるし、純や由利もいる。朔耶めっちゃ可愛いし。今までは仕事ばかりでストレス満載だった、という記憶しかないから、少しはのんびり出来そうだ。ただ学校には、行きたくないなあ……。

純

「着いたよ」

有希

「……んあ！」

急な制動により身体が前に引つ張られ、返事をすると同時に助手席の背面に顔をぶつける。悲鳴を聴いて純はこちらを振り返った。

純

「…………大丈夫か？」

有希

「…………いい加減に車買い換えたら…………？」

額を押さえながら呟く。一応シートベルトはしていたが、今座っている後部座席のベルトは腰の位置に当てただけの古いタイプであり、前部席のように上半身まで守ってくれる訳ではなかった。そもそもこの車自体が相当にクソボロい軽自動車であり、もう何度もエンジンのトラブルで往生したりしている。いつの年代のものなのかは、既に純自身も思い出せないらしい。

純

「有希が買ってくれるのか？」

有希

「純の首を刈ってあげる」

純

「……………」

純の後ろに付いて入口の階段を降りる。店内は暖色系の壁紙を薄暗く照らしており、ホールはそう広くないが悪くはなかった。記憶ではちゃんと短大の卒業式の後にここでパーティーをしたはずなのに、店内の光景は見覚えなど全く無く、その事が自分は交代人格なのだという事実を一層感じさせられた。

有希

「……『ライブハウスb1』って、こんなところなんだ」

純

「ああ、いいところだろ？」

有希

「……うん、そうだね……」

今日は五月九日の土曜日。待ちに待ったクラス会の日だ。集合時間は二十一時。一時間も早く来たためにまだ客が入っていない店内の隅の席に腰掛け、辞めた筈の煙草を堂々と目の前で吸い始める純をぼんやり見ながら、俺……いや、私は、今朝も夢の中に現れた光との会話を思い出していた。

光

「おっはよ〜ゆき。よく眠れた？」

有希

「……今日はテンション高いな。それに今俺は夢を見ている状態だから、身体の方はまだ寝てるんじゃないの？」

光

「うつん、今は愛がスポットに出てるわ」

有希

「愛って？」

光

「ほら、あの赤髪の」

有希

「……ああ、俺に舌打ちしたり毒吐いたりしたあの子か」

光

「そう、あの子。愛は男嫌いだけど、女の子は好きだから大丈夫よ。特に朔耶とか」

有希

「…… g t y r ?」

光

「んう？ g t y r って何？」

有希

「いや、別に知らなくていいんだ（朔耶が好きって……ロリコンかよ！）。それで、今日はどうかしたの？」

光

「あ、うん。実はあなたについて少し補足を」

有希

「俺について？」

光

「うん。ほら、多重人格ってさ、生まれてくる交代人格が、基本人格や主人格に無い知識を持って生まれる事って無いじゃない？」

有希

「ああ、要は知らない場所や知らない人の顔は思い出せないって事でしょ？」

光

「そうそれ。それって、あなたにも言える事なの。あなたの場合は、さきが『犬神有希』のブログで家族や友達の写真を見たから純さんや由利先生の事を認識出来るだけで、例え『犬神有希』が知っていても、さきが知らない人や場所はあなたも認識出来ない筈よ」

有希

「なるほどね。 y u - k i - の事を交代人格である俺が知っていたのは、さきが元々 y u - k i - と知り合ってたからか。今思えば、メアドも知らない筈なのにメール出来たし」

光

「あの時の有希、違う携帯電話なのに何も疑わずに y u - k i - に

メールしてたわよね。突っ込みたくて堪らなかったわよ」

有希

「……自分ではそれなりに冷静だと思ってたけど、やっぱりどこかで焦りがあったみたいだな。なんか、今更恥ずかしくなってきたよ」

光

「しょうがないわよ。今回のケースは結構特殊だったからね。それはこれから慣れていけばいいわ。……慣れると言えばアリスのこと、少しは慣れてきたみたいね。アリスにいじめられてた時のあなた、見物だったわ」

有希

「……頼むから、誰にも言わないでくれよ」

光

「……気持ち良かったんでしょう?」

有希

「……………」

光

「つぶつぶ」

光

「さて、あなたはこれからさきの交代人格として生きていく事になるわ。どう生きるかはあなた次第。私はあなたを信じて、全てを任せる。頑張ってね」

有希

「ああ、頑張るよ。……さきのために」

光

「うん、期待してる。……あ、そういえばさ、今有希って男口調で喋ってるじゃない?」

有希

「ん？　それがなに？」

光

「アリスや由利先生と話してる時の有希、普通に女の子してたわよね。この際普段からあれでいきなさいよ」

有希

「……さきの、ために……？」

光

「うふふふつ。可愛かったわよ、女の子してるときの有希」

有希

「……つ……」

光

「ぷつ、あはははっ！　赤くなっちゃって、可愛いわね！」

有希

「……」

純

「……希、有希……」

有希

「ん……あ、なに？」

純

「いや、ボーツとしてたから。大丈夫か？」

気づけば店内には客が入り始めていた。客といっても、ほとんどはクラスメートだ。その内八割は女の子。男子は、今も病院のベッドで寝ている『犬神有希』を除いて六人しかない。その六人しかない内二人がやってきて、純に声をかけた。

聡也

「おつ、純さん珍しく来るの早いな！ どうした？」

純

「別にいいだろ！ たまには俺だって遅刻せずに来るわ」

隆治

「そして早速若い女の子をナンパしてるとは、流石に純さんはやる  
ことが違うな。しかも何歳だ？」

純

「ナンパじゃねえよ！ こいつは俺が連れてきたんだし歳は……秘  
密だけだ」

顔を向けるとそこにいたのは成人した今でもサツカー小僧として  
青春を謳歌している聡也 そうや と、そこに存在するだけで笑  
いを引き起こす常時笑いの神憑依人間である隆治 りゆうじ だった。

純の言葉を聞いた二人は急に顔色を変え、隅っこでなにやら話し  
始めた。

聡也

「……まさか彼女とか言わないよな……！」

隆治

「いやいやいや、年齢的に犯罪だろ……！」

ボソボソと小さい声で、まさか、いやでも……とかなんとか言い  
合う二人。犯罪で。まあ確かに、さきはロリータの完全体だからな  
身長146cm、体重はナイショ、アンダー66・トップ93のH  
カップというスーパーロリ巨乳星人なのだから（アリスに強引に計  
測させられた）。中学生、いや下手したら小学生に見えているのか  
もしれない。……あ、この巨乳で小学生は無いか。なんだかアンバ

ランスだなー。

由利

「あー！ さきちゃんだー！」

衝撃と共に、小さな二つのマッシュマロの感触。

由利

「なんでなんでえ？ なんでさきちゃんがここにいるのぉ？」

有希

「あの、純さんが誘ってくれて……」

由利

「……純さんが……」

途端、“ギンッ！”という音が聴こえそうな勢いで由利が純を睨み、

由利

「……さきちゃんは渡さないからっ！」

と宣った。それに対して私は何も言えず、純も由利の眼威に圧されてただこくこくと頷くことしか出来なかった。

その後、飲んだり食べたり歌ったり、店側のバンド演奏を聴いたりし、最後に純や聡也、隆治達が何やら楽器を店の裏から持ち出してきた。五人がてきぱき……とは言えない手付きで……演奏の準備をしているのか？

ボーツと見てみると、早くもエフェクトのセットまでを終えた純が声をかけてきた。

純

「有希……間違えた、『幸』、お前も早くマイクの準備しろよ」

有希

「……………私が……………？」

純

「ああ。今日は『有希』の代わりに、歌ってくれないか？」

有希

「……………」

『有希』の代わりに、か……。そうだ。『俺』は、もう『有希』ではない。『さき』のために、『二神幸』としての道を歩んでいくと、『私』は決めた。純にはその事を既に全部話してある。やはり驚いた顔をしたが、純は思った通り信じてくれた。自分でも信じられないような事なのに……。

光は私を信じて、任せると言った。その期待に答えるために、『さき』を傷つけないよう、そしてその上で、『犬神有希』としての自分の存在を消さずに生きてゆこう。

純

「ほら、早く」

有希

「あ、うん。わかった」

私は席から立ち上がり、ステージに向かう。純は微笑を湛えて私を迎え、他のメンバーは不思議そうな表情で私を見つめる。慣れた手付きでマイクの準備をし、胸を張って前を向く。交代人格として

生まれた私だが、ライブの手順は何故かはつきりと頭の中で想起出来た。

藍華

「あ、あの……打ち合わせとか……」

有希

「大丈夫です。藍華さんはいつも通りに歌って下さい」

藍華

「えっ、あ、あたしの名前」

有希

「白百合短期大学Dクラスの皆さん、今日はお忙しい中お集まりいただきありがとうございます。宴の最後はニットキャップスの演奏で盛り上げていきましょう！」

知らない顔の私が出てきた事にポカンとする者が大半だったが、私を知っている由利がいきなりすごいテンションで盛り上げにかかり、それにつられたのか徐々に熱が上がっていく。

有希

「さあ、最初の曲は『以心伝心』からいくよっ！」

〈第一章〉fin〈

18 愛(前書き)

『08 お母さん』と『10 牛』の間、『09 夢(弐)』の  
時の出来事です。夢を見ている間、実はこんなことがありました。

……砂嵐。壊れて映らなくなったテレビのような灰色の砂嵐が今、私の視界を覆っている。私にとっては苦痛でしかない、システムの外の世界。何故私が外に出なければならぬのか。私は望んでない。望まれてもいない。誰にも、一度だって。光は外の世界も良いって言うてたけど、きつと嘘。……いや、やっぱり嘘じゃない。だって、光は嘘をつかない。嘘をつけない。本当に、外の世界も良いことはあるんだろう。ただそれは、光や幸にとっては、という意味で。

私にとっては、苦痛でしかない……。

砂嵐が視界から消えていくにつれて、徐々に身体中の感覚が蘇ってくる。手に、足に、お腹に、胸に、背中に、首に、頭に。まるで心臓から飛び出ていった新鮮で酸素をたっぷり含んだ綺麗な血液が、身体中の血管を駆け巡っていくように。それと同時に、他の五感も次々と息を吹き返していった。まず感じたのは、ふんわりと香るシヤンプーのような匂いだった。続いて顔面に触れている、鬱陶しい糸か何かの束と思われる滑らかな感触。それから身体の前面と手足に触れている、温もりを持った柔らかな感触。顔の直ぐ側から聴こえてくる、小さな吐息。最後に口の中に微かに残る、葡萄っぼいけど葡萄ではない何かの味。

そつと瞼を開ける。最初に目に入ったのは、“赤”だった。滑らかな曲線が数え切れないどころか視界いっぱいにはしっていて、シ

ヤンプーっぽい匂いもする。まるで髪の毛を目の前に置かれているような……って、これは本当に髪の毛のようだ。顔を離して状況を探る。五、六畳程の狭い部屋に居るらしい。飾り気の無い質素な部屋で、黒と赤の二本の左利き用のギターが部屋の隅に立て掛けられている。その脇には黒くて古いROLANDのアンプ。小さなカラーボックスには教科書やバンドスコアが並んでいた。カラーボックスの上にも教科書が並べて積まれている。そして私はベッドの上に座っていた。

恐らく男の部屋だろうと思うのだが、意外な程に片付いていてカーテン以外は結構綺麗だった。しかし、誰の部屋か判らない。少なくとも我が家でないことは理解出来た。

よし、次。手足と胴に密着している温かくて柔らかい物体。目の前に髪の毛があることから、人間であると考えられるが。……密着しているということは、抱き着いているのか？ 男の部屋で？

……男！？

「いやあー！」

目の前の人間を思わず突き飛ばし、ベッドの隅に逃げた。壁に背中がぶつかり、逃げ場がないと悟って絶望的な気持ちになる。男の部屋にいる。男の部屋。男、男、男！

「嫌っ！ 来ないで！ いやあー！」

喉が痛くなるほど思いつきり叫ぶ。身体の震えが止まらない。両

腕で自分の身体を抱き締めて震えを抑えようとしたが、それは無駄な努力だった。

息が苦しい。あまりの恐怖に過呼吸を起こしかけていた。震える体で、尚も逃げ場を探す。しかし、自分が部屋の隅にあり、目の前に人がいる。とても逃げられないと思ったが……？

「……サクヤ？」

目の前に蹲るのは、薄く色づいた赤い直毛で、四肢も胴も程好いくらいに脂肪がしがみついた小さな女の子だった。男ではない。朔耶は幸の愛娘であり、私にとって唯一、苦痛ではない存在だ。恐れるものではないか。子どもは好きだし、朔耶は私にとって妹のような存在。いくら気が動転したとはいえ、朔耶をいきなり突き飛ばしてしまうような真似をした自分に対して、私は呪いの言葉をつき吐き掛けたくなった。

「あ……さ、朔耶。その、私……」

ああ、私は朔耶になんてことをしたのだろう。突然突き飛ばされて、びっくりしている筈。朔耶、朔耶！ 私は、決してそんなつもりじゃ……。

そんな私の胸中を知ってか知らずか、此方を振り向いて少しの間呆然として。

朔耶

「愛姉ちゃん！」

朔耶は無邪気な笑顔で私に抱き着いてきた。

朔耶

「愛姉ちゃん、おはよっ！ 何年ぶり？」

瞳をキラキラと眩しく輝かせ、ぎゅぐゅと強く抱き着きながら叫ぶ朔耶。私は息を飲み、その言葉に胸が熱くなった。

……今、私を『愛姉ちゃん』って読んだ？ 覚えていたの？ 三年前に会っただけの私を？ あの頃はまだ身体が弱くて、歩けもしなかった朔耶が、私の名前を……！

愛

「朔耶……！」

私は朔耶を力一杯抱き返し、再度その柔らかさと温もりを全身で感じた。

朔耶

「どうして、ずっと会いに来てくれなかったの？ 朔耶、愛姉ちゃんのことずっと待ってたのに……」

愛

「……ごめんね朔耶」

私の悲鳴を聴いて駆け込んで来た女性を巧くやり込めて部屋から丁寧に追い出し、また朔耶と甘々ムードを形成し始める。朔耶を後ろからキュッと抱き締め、朔耶の赤い艶やかな髪に顔を埋める。桃の成分配合っばいシャンプーの匂いに、ほんのり香る汗が気味の良いスパイス。朔耶の身体についている脂肪はまるで赤子のそれで、

マシユマロのような肌だった。

愛

「今は……朔耶のお母さんが頑張ってるでしょ？ 皆でお母さんの事、頑張れって応援してるの」

この身体の持ち主『幸』は《解離性同一性障害》、所謂《多重人格》なのだ。幸は幼い頃から繊細な心の持ち主で、ちょっとした事でも深く心を傷つけることが多々あった。人が多重人格になる原因として最も多いのが『虐待』だが、幸は虐待など受けたことがなく、特に虐められたこともなかった。寧ろその愛らしすぎる容姿と小動物的か弱さ、うるうる輝く瞳には男女問わず“守ってオーラ”に撃沈していた。幸の場合、繊細過ぎる心が必要以上に感傷を与え、その度に解離症状に悩まされてきたのだ。

現在は基本人格の幸が主人格として動いている。危なっかしいことばかりだが、幸が成長するために必要だと光あきが言ったため、今は皆で見守る形になっている。幸自信も皆の応援を受け、少しずつ人生を前向きに捉えるようになってきた。昔は光が全部幸の世話をしていたようだが、朔耶が生まれてからは光は殆ど外に出なくなり、代わりに私や双子やその他が時々出て幸を安全な方へと導いている。稀に邪魔が入ることもあるが、それは乗り越えるべき試練だと、光は言った。そしてそういつた試練を、危なげながらも全て乗り越えてきた。最近は自然なタイミングで統合と分離を繰り返し、“より良い形”を目指している。

朔耶

「また新しい人が来たね」

“新しい人”というのは、新たに生まれた交代人格、『有希』と

かいう男の人格のことだ。

愛

「……………そうだね。今度は男の人だよ」

朔耶

「……………男のひとお!？」

驚愕に目を剥く朔耶。あいつは普通に男なんだけど……………何をそんなに驚いてるの？

朔耶

「うそっ! あの人、とつてもとつても女の子っばいよ!?! お母さんみたいに! それに朔耶のこと、ギョツてしてくれて、温かくて優しくかった」

愛

「……………!」

温かくて優しくかった? 男が? ……嘘。そんなはずない。男なんて、ただ自分勝手に自己中で、生きてる価値無いのに。あいつをシステムに呼ぶのも、私は反対だった。いくら幸と珊瑚のお気に入りだからって、よりによって男を招き入れるなんて! 光が言うから渋々受け入れたけど、私は絶対に認めない。あんなやつはこのシステムには必要無い。そもそも、今まで上手くやってこれたじゃないか! 幸の自殺未遂も、破壊人格の発生も、私達だけで解決してきたのに。男なんて必要無い。私は絶対に認めない!

朔耶

「愛姉ちゃん……………大丈夫?」

どうやら私の心の叫びが表情に出ていたようだ。余程恐い顔をし

ていたのかも。眉を八の字にしておずおずと話しかけてくる朔耶。男性恐怖症である私の事が心配なのだろう。三年前、幸が上級生の男に告白された事があった。私からすれば男なんてみんな同じだが、その男は周りの女子生徒には人気があったようで、歩くだけで熱っぽい視線を集めるような奴だった。そんな男に人気の無い校舎裏で告白され、幸は泣きながらその場から逃げ出した。それから一時期、幸はスポットに出たがなくなり、その時は学校には光が行き、家では私が朔耶の面倒を見た。

愛

「うん、ごめんね。大丈夫だよ朔耶」

それでも幸の母親が連れてきた客や仕事のパートナーである男共が来る度に、私は暴れたり泣き叫んだりした。それはもう熾烈なほどに。その時を限定して言えば、ある意味破壊人格と言えただろう。しかし男に反応して半狂乱に陥る私を、幸の母親は気にも留めなかった。その為私の意識の中には誰かに甘えたい部分（幸の属性）と冷静な部分（私）が同居し始め、甘えたかと思うと急に熱が醒める事が何度もあった。そうしているうちに新たに二人の人格が解離した。しかも基本人格の幸からではなく、交代人格である私から。単細胞生物のアメーバのように、同じ形で完全に二つ以上に別れる“分裂”ではない。私の中にある二つの属性が、私という個体の形を残したまま“分離”した、といったところだろうか。

微笑みながら「大丈夫」と言った事で安心したのか、朔耶は顔を綻ばせて一層強く抱き着いた。

一旦冷静になってみると、今自分がどんな状況になっているのかが検討もつかなかった。この部屋は誰の部屋で、さっき私の悲鳴を

聞き付けて駆け付けてきた女性は誰なのか。まだ午後三時十五分で授業中の筈なのに、制服を着て学校で眠くなる授業を聴いてないのは何故か。学校が終わって四時半頃に迎えに行く筈の朔耶と一緒に居るのは何故か。……何故男の部屋なのか……！

今までスポットに出ていたのはあの男か、それとも昨日から姿を見かけていない幸か。

朔耶

「あつ、ここね、お母さん……じゃなくて、お兄ちゃんのお友達の部屋なの」

愛

「友達？ あいつの？」

お兄ちゃんというのは、あの男の事を言っているのだろう。あの男は確か“自分の過去の記憶”を持っていたはず。昨日生まれたばかりの人格だから友達なんているはずないが、実在する人間を解離させたのだから、そういう事があっても不思議ではないだろう。ただ、何故友達の家の場所を知っているのだろうか？ 偶然出会っただけか？ それともあいつは日記やら小説やらに、自分の友達の家の住所を細かに記載していたというのか？ 顔の写った写真とかも？ 幸の記憶に無いものが交代人格の中にあるなんて事は絶対になり。つまり、幸はこの家があいつの友達の家であることを知っている事になる。まさかそんなプライバシーな情報をオンラインで流す訳もないし、やはり幸が自力で知ったことに……最近幸は学校が終わるとよくバイクで何処かに出掛けていたらしいが、まさかストーカーなんてしてないだろうな……。

愛

「メイド？ 誰それ、どういう事？」

朔耶

「わかんない。朝はいなかったのに、帰ってきたらいたの……」

そう言っつて朔耶は何か恐いことを思い出したのか、俯いた顔が青ざめだした。垂れた赤い前髪がゆらゆら揺れている。……あまりの恐怖に振るえているらしい。

愛

「ちょっと朔耶、どうしたの？ 何かあったの？」

朔耶

「……そのメイドさんに、お兄ちゃんが襲われたの……」

振るえながら搾るように声を出す朔耶。襲われたって、あの男だけ？ どこも怪我らしい怪我は無いようだけど。っていうか、メイドに襲われたってどういう事？

愛

「……どんなふうに襲われたの？」

朔耶の瞳はいつそう恐怖に染まり、振るえが全く止まらない。

朔耶

「……ベッドに、押し倒されて……服を……」

愛

「……………」

……把握した。つまり、朔耶は虐待を受けたわけだな？ 淫乱な

行為を見せつけられるという、精神的な虐待。

蒼白な顔でそこまで言った朔耶は、もう何も言いたくないというように瞼と口をギュツと閉じた。まだ振るえている。六歳児には刺激が強すぎたようだった。あの男も、女の身体になって早々貞操の危機を迎えるとは思ってなかっただろう。しかも相手が女。それでここまで逃げてきたという訳か。そうとうな恐怖を味わった事だろう。同情の余地が無いわけではない。

しかし、それで男の家に来るのは絶対に間違ってる。さつきも言ったが、男なんて自分勝手に自己中で、生きてる価値なんて無い。せつかく危機から逃れてきたのに、ここで襲われたりなんかしたら……アイツ殺してやるからな。……いや、その前にアイツは朔耶の心にダメージを与える行為を阻止出来なかった。既に手遅れ。やっぱり駄目だな。光は失敗した。あの男は、このシステムに存在するべきではない。今度会ったらすぐに殺してやるう。男なんて、必要無いんだ！

朔耶

「ねえ愛姉ちゃん、あの男の人の名前、何て言うの？」

愛

「……有希」

朔耶

「ゆづきお兄ちゃんかあ……。んふふっ」

愛

「……」

一頻り心の中で呪詛を唱え続けた後は、立て掛けてあるギターを使って朔耶と一緒に歌を歌ったり、ベッドに並んで寝て朔耶の話を聞いたりした。

時間が過ぎるのは早く、すぐに夜の帳が降り始めた。私は朔耶を連れてちようと近くにあったファミレスでご飯を食べた。朔耶はハンバーグ定食を頼み、私は何も注文しない。朔耶は幸や珊瑚とは違い、ちよつと心配になるほどの少食だ。外食に行くといつも半分以上残す。この辺りは幸ではなく私に似たのかもしれない。私も一般の幼稚園児と同じくらいしか食べないし。珊瑚は大人の男と同じ量を食べ、幸と光なんかまるでギャ 曽根だ。お腹の中にブラックホールでも持つてるように、食物をどんどん胃の中へ放り込んでいく上、完食するまで手を止めない。ビュツフェ形式の店に行ったりすると、店側に被害が出てしまう。

いつものように半分以上残した朔耶のハンバーグ定食を私が頑張つて胃の中で処分し、あまり客が（つていうか男が）増えない内に店を出た。

部屋に着くと、お腹一杯になった朔耶は目がトロンとし始め、気付くと意識の半分以上が夢の世界に拉致されていた。小さくなった理性で、確り起きていようと努力しているのだろう。九割方目を瞑ったままむにやむにや言っている。まだ十九時半だがここで起こすのも可哀想なので、そのままベッドに押ししたお……ベッドに寝かせ、タオルケットを掛けてあげる。完全に意識が刈り取られたようで、甘えた声で「お母さぁん……」と寝言を言う朔耶は、地上に舞い降りた天使のような可愛らしさを発揮していた。普段は六歳児とは思えないほどしっかりしている朔耶だが、外見は二歳から三歳くらいで、甘えるときはまるで人懐っこい子猫のようにベタベタだ。しっかりと気を張っていないと、その小さな愛らしい唇を奪ってしまいたいそうで、そんな考えが一瞬でも頭に浮かんでしまったことに私は大いに狼狽えた。

なっ！ 何ですか今のわ！？ 今私、何だか、さっ、朔耶の……くちびる……あっだ、ダメ！ 幸の娘である朔耶に、あぁでも、柔らかそうだにや。それにっ、今なら、誰も見てないし、ち、ちゅ……ちゅ、を………きゃー……！！

【愛の頭の中が混沌で意味が解らなくなったので、ここからは三人称でいきます】

モノローグでの口調が変わってしまうほどに動揺しながら朔耶の唇に自分のそれを近づけようとした愛だったが、触れる直前に弾かれたようにバツと身体を離し、頭を振って逃げるように部屋から出た。閉めた扉にもたれ掛かかって、そこで足が震えに負けて腰を落としてしまい、その場に座り込む。朔耶のあの柔らかそうな唇を思い出して、顔どころか全身が熱を持って朱に染まる。呼吸も荒く、

思いつきり肩を上下させていた。

愛

「はあ、はあ……朔耶……」

熱い声が、誰もいない廊下に消えていく。ちよつとぐらい離れていても聴こえるのではないかと思えるくらい、心臓の音が大きく鳴っている。擬音で表すと

「ズダダダダッ！」

といった感じで暴れまくっていた。その鼓動の激しさは例えるならガトリングガンのような凄絶さ。目に焼き付いた光景を頭から振り払おうとする度に無意識的にますます強くイメージされる、朔耶の可愛らしい桃色の唇は、愛を更なる混沌の彼方へと誘った。

たつぷり三時間、愛は自分でも気づかないまま自分を指で慰め、漸く熱が下がった頃には、床にギクリとする光景が広がっていた。急ぎながらも慎重にタオル的なものを探し、床と自分を綺麗に拭いて行為の証拠を完全に消す。自分はなんてことをしてしまったのだろうと、愛は今更ながらに後悔した。いたいけな幼女を、しかも幸の娘である朔耶を想像しながらやってしまった。今思うと、声も結構出ていたかもしれない。喘ぎながら、朔耶の名前を呼びまくっていたような気がする。当の朔耶は扉一枚隔てた向こう側。逆を言えば、愛と朔耶を隔てる物は“扉一枚だけ”なのだ。起きていれば、絶対に聴こえているだろう。不意に二筋の涙が頬を伝う。部屋に戻りたくない、朔耶の顔が見れない。絶望的な気持ちになりながら、愛はお山座りをして顔を膝に埋めた。

更に二時間が過ぎた頃、愛の目の前にある勝手口の扉が開いた。涙に体力を奪われて微睡みかけていた愛は、扉が開く音に顔を上げた。

目を疑った。

最初に愛が知覚したのは、眼鏡。縁が紺色で、だいぶ長い間使っているのだろう、ネジが緩んでガタガタになっているところまで見えた。その次に、黒い髪。肩に触れる程度のボサボサした黒髪が外の風に揺れていた。そして最後に、顎に点々と見られる髭。目の前に現れたのは、男だった。

愛

「……………イヤ」

それは拒絶の言葉だったが、声が小さすぎて男の耳には届かなかった。

純

「有希？ お前何してるんだこんなところで？ 部屋ん中入れればいいのに」

不思議そうな顔をする男。半袖のYシャツにボロボロのジーンズという格好で、手には教科書等が入った鞆と何故かケーキが入っているとされる箱を持っていた。その箱が愛の大好きな洋菓子店の物だったのだが、愛の頭にはそれを気にする余裕が完全に無くなっていた。

愛は振り返り、立ち上がるのと同時にドアの取っ手に手を掛け、

目にも留まらぬ早さで部屋の中へ逃げ込んだ。しかし扉が完全に閉じる前に鍵を掛けてしまったため、ガンツという音と共に扉が強く跳ね返り、取っ手は愛の手から離れてしまった。跳ね返っていった扉の向こうに男の姿を見た愛は更に混乱し、「……なんでっ、なんでっ?」と小さく呟きながらベッドの隅へと逃げ込んだ。

朔耶

「んん……愛姉ちゃん? どおしたのお?」

ベッドの揺れで目を覚ました朔耶が、手首の辺りで目を擦りながら間延びした声で言う。愛はそんな朔耶の声には気づかず、朔耶が居ることさえも忘れて、隅で縮こまって震えていた。

愛

「……ヤ……イヤダ……イヤ」

気が触れたように拒絶の言葉を繰り返す愛。朔耶はそんな愛の拳動を見て男性、つまりこの部屋の主が帰ってきた事を悟った。部屋の入り口を振り返ると、思った通り男の人が一人立って此方を見ており、その眼鏡の向こうにある瞳は朔耶と愛の間を何度も往復していた。

愛の気を鎮めるには男性に一旦外に出てもらわなければいけないのだが、自分の部屋であるのに部屋の主を追い出すというのは流石にどうだろうか。

どうするべきか悩んでいる朔耶と訳が解らず首を捻っている男を尻目に、愛は前触れ無く呼吸を止めた。それに気付いた朔耶は振り向くが、既に意識を手放していた愛を見てため息をついた。

朔耶

「……愛姉ちゃん、帰っちゃったんだね」

言葉を獲得した頃から幸が解離する様を見てきた朔耶は、人格が入れ替わる瞬間を大概は見て察知出来る。大抵は眠った時に自然に入れ替わるが、何か大きなシヨックを受けたり、又は必要に応じて故意に入れ替わる事もある。愛の場合は『気絶』という場合がほとんどだったため、朔耶の目にも特にわかりやすかったのだ。

純

「ねえ、あの……どゆこと？」

純が朔耶に話しかける。純にしてみれば親友が廊下で座って泣いており、自分の顔を見ていきなり逃げ出して顔面蒼白で震えだしてその上気絶したのだから、まったく状況が理解出来ない。それに、見知らぬ幼女が自分のベッドで寝ていたところも気になる。

朔耶

「あ、お兄ちゃ……お母さんのお友達ですか？ お母さんって時々、じょーちよふあんてーになるらしいんです」

これは一々説明するのが難しい上に面倒くさいと思った朔耶が、幸の解離を第三者に手っ取り早く一言でしかも曖昧なまま伝える為の最終手段。しかし普段から使っているため、最終ではなく常套手段となっているが。朔耶のように小さな子どもが情緒不安定という言葉を知る筈がないので、聞いた人は皆「……そうなんだ……」で終わり、それ以上は追求しなくなるのだ。が、

純

「……………お母さん？」

朔耶

「え？ あ、はい。お母さんです」

純としては親友の様子も気になるが、それ以上に聞き捨てならぬ言葉が聴こえてしまい。

純に質問責めにされ、『お母さん』と言ってしまった事を心底後悔した朔耶だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8535p/>

---

乙女のSOS

2011年1月30日17時17分発行